大阪府埋蔵文化財調査報告2004－3

安松田遺跡

２００５年3月

大阪府教育委員会

安松田遺跡

2005年3月

大阪府教育委員会

はじめに

安松田遺跡の所在する泉佐野市は、大阪湾の関西国際空港を対岸に望む大阪府の南西部に位置します。関西国際空港の開港に伴い同市の海岸部では、住宅やりんくうタウン、ゲートタワービルなどが建設されましたが、都市化が進む大阪府下にあってもまだ田園地帯が広がり、起伏に富んだ古くからの地形が良く残されています。

今回の調査は、高度成長期の昭和40年代に建築された府営泉佐野羽倉崎住宅の建替えに伴って、同地の埋蔵文化財の記録を保存する目的で実施いたしました。調査の結果、中世から近世にかけての粘土掘削土坑が規則正しく密に検出されたことから、土地開発の状況と土地利用の一端がうかがえる貴重な資料を得ることができました。この結果は、これまで積み上げられてきたこの地域周辺の調査成果とあわせ、今後さらに詳しく検討されていくものと思われます。

今回の調査に際して、ご協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各位、諸機関に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に変わらぬご理解とご協力をお願いいたします。

平成17年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　向井　正博

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府建築都市部の依頼により、府営泉佐野羽倉崎住宅建て替えに伴い実施された大阪府泉佐野市東羽倉崎町所在、安松田遺跡の発掘調査報告書である。

2．現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ技師杉本清美を担当者とし、平成15年６月～12月に実施した。遺物整理は調査管理グループ技師林　日佐子・藤田道子を担当者として実施し、平成17年３月末に終了した。

3．本書の執筆・編集は杉本が行なった。また、第４章１．については、島内洋二氏（(財)大阪府文化財センター専門調査員）に原稿をお願いした。

4．本調査の航空写真測量は大阪測量株式会社に委託して実施した。なお、撮影フィルムは上記の受託会社において保管している。また、遺物写真は有限会社阿南写真工房に委託して撮影した。土壌分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。遺構の写真撮影については、担当者が行なった。

5．本文・挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．値）を示す。また、座標値は世界測地系によるもので、方位は座標北を指す。

6．発掘調査・遺物整理及び本書の作成に要した経費はすべて、大阪府建築都市部が負担した。報告書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は963円である。

目　　次

はじめに
例　　言
第１章　調査に至る経過 …… 1
　　１．調査の経緯 …… 1
　　２．調査位置と調査方法 …… 2
第２章　位置と環境 …… 4
第３章　調査成果 …… 7
　　１．試掘調査 …… 7
　　２．基本層序 …… 8
　　３．調査区成果 …… 9
　　４．出土遺物 …… 25
　　５．小結 …… 29
第４章　考察 …… 31
　　１．泥面子における祭祀行為の可能性 …… 31
　　２．安松田遺跡の自然科学分析 …… 35
第５章　まとめ …… 41
報告書抄録 …… 44

挿　図　目　次

図１　泉佐野市安松田遺跡の位置 …… 1
図２　調査地点位置図 …… 2
図３　調査区地区割図 …… 3
図４　周辺遺跡分布図 …… 4
図５　明治19年測量地図による調査地位置図 …… 5
図６　試掘調査地点位置図 …… 7
図７　調査区位置図 …… 8
図８　１区遺構全体図 …… 9
図９　１区東壁・南壁断面図 …… 10
図10　２区遺構全体図 …… 12
図11　３区遺構全体図 …… 13

図12　２区・３区北壁断面図 ……15～16
図13　２区・３区南壁断面図 ……17～18
図14　２区・３区東壁・西壁断面図 ……19～20
図15　４区遺構全体図 ……21
図16　４区南壁・西壁断面図 ……22
図17　遺構断面図 ……24
図18　１区出土遺物実測図 ……25
図19　２区出土遺物実測図 ……26
図20　３区出土遺物実測図 ……27
図21　３区出土貨銭実測図 ……27
図22　４区出土遺物実測図 ……28
図23　出土石製品実測図 ……28
図24　周辺条里復元図 ……29
図25　粘土採掘坑分布図 ……30
図26　波状紋を持つ泥面子 ……31
図27　泥面子図柄分類 ……31
図28　自然科学分析挿図 ……37
表１　出土遺物対照表 ……42～43

図　版　目　次

図版表誌　調査区遠景
ＰＬ－１　調査区全景（1）
ＰＬ－２　調査区全景（2）
ＰＬ－３　検出遺構（1）
ＰＬ－４　検出遺構（2）
ＰＬ－５　出土遺物（1）
ＰＬ－６　出土遺物（2）
ＰＬ－７　出土遺物（3）
ＰＬ－８　出土遺物（4）
ＰＬ－９　自然科学分析（1）
ＰＬ－10　自然科学分析（2）

第１章　調査に至る経過

１．調査の経緯　（図１・２）

安松田遺跡は、泉佐野市東羽倉崎町に位置する府営羽倉崎住宅地内の東西約200ｍ、南北約180ｍに広がる遺跡である。平成13年度に実施された府営羽倉崎住宅の建て替えに先立つ遺跡確認の発掘調査において、遺構及び遺物が検出されたため、新規発見遺跡として周知された遺跡である。

大阪府建築都市部は、老朽化した府営羽倉崎住宅を取り壊し、整備、高層化する住宅の建て替えを計画した。本府教育委員会はこうした計画を受け、建築都市部と協議を重ね、平成13年8月に試掘調査を行なった。その結果、建て替え予定地内で、遺構および遺物の包含層が認められたため、同年度以降に発掘調査を実施することになった。

試掘調査の結果を受けて泉佐野市教育委員会により、府営羽倉崎住宅建て替え予定地内を範囲とする遺跡は、平成13年に安松田遺跡として周知された。

今回の調査は府営羽倉崎住宅建て替えに伴う発掘調査で、新しく建築される住棟部、集会場、機械・電気室についての調査を実施した。調査では、機械・電気室（234㎡）を１区、住棟部（1901㎡）の東半分を２区、住棟部の西半分を３区、集会場（234㎡）を４区とした。調査面積は2369㎡である。

発掘調査は平成15年６月に着手し、同年12月に現地調査を終了した。現地調査期間内には、航空測量を同年９月、12月の２回実施した。また、遺構内において自然科学分析を実施した。分析の結果は、第４章に掲載している。現地調査に引き続き、整理作業を行ない、平成17年３月にすべての作業を終了した。

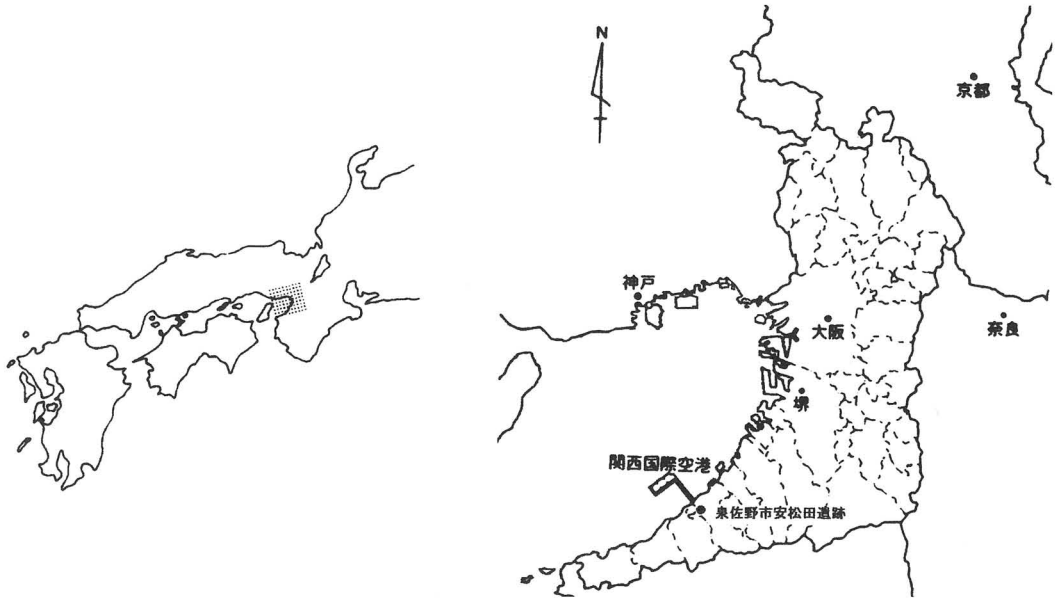


図１　泉佐野市安松田遺跡の位置

２．調査位置と調査方法　（図２・３）

調査は現地表面から約0.6ｍをバックホウで掘削したのち、旧耕作土層以下を人力によって掘削し、遺構・遺物の確認に努めた。調査終了後は掘削土で埋め戻し現状復帰させた。

調査では、建築が予定されている住棟部、機械・電気室および集会場のうち、まず機械・電気室（１区）と住棟部の東半分（２区）について調査を行い、続いて住棟部の西半分（２区）と集会場（４区）の調査を実施した。

調査区の地区割り（図３）は、大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財センターの発掘調査において、調査区の位置が共通して表現できるよう、大阪府発行１万分の１の地形図を基準として４段階の区分を実施している。第Ⅰ区画は南西隅を基準として、縦軸をA～O、横軸を０～８に区画したもので、縦６km、横８kmの範囲となる。安松田遺跡はC－２にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので、縦1.5km、横2.0kmの範囲となる。安松田遺跡はC－2－8にある。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。今回の調査区はD1、D2にあたる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸a～j、横軸を１～10に区分したものである。たとえば、今回の調査地点の一つは、C－2－8－D1－ｆ6などと表記される。

さらに遺物の取り上げ等に際して補助的に、第Ⅳ区画を５ｍ方眼で区画し、北東区画をⅠ、北西区画をⅡ、南東区画をⅢ、南西区画をⅣとしている。

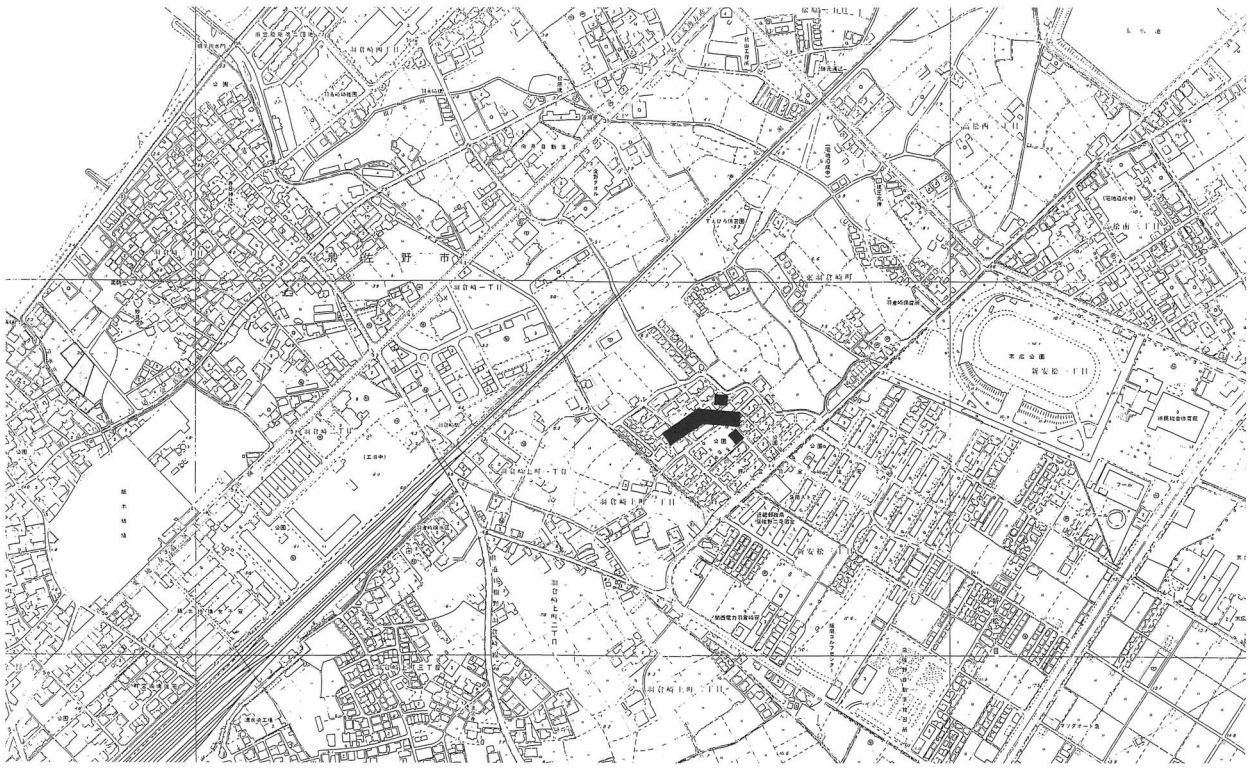


図２　調査地点位置図

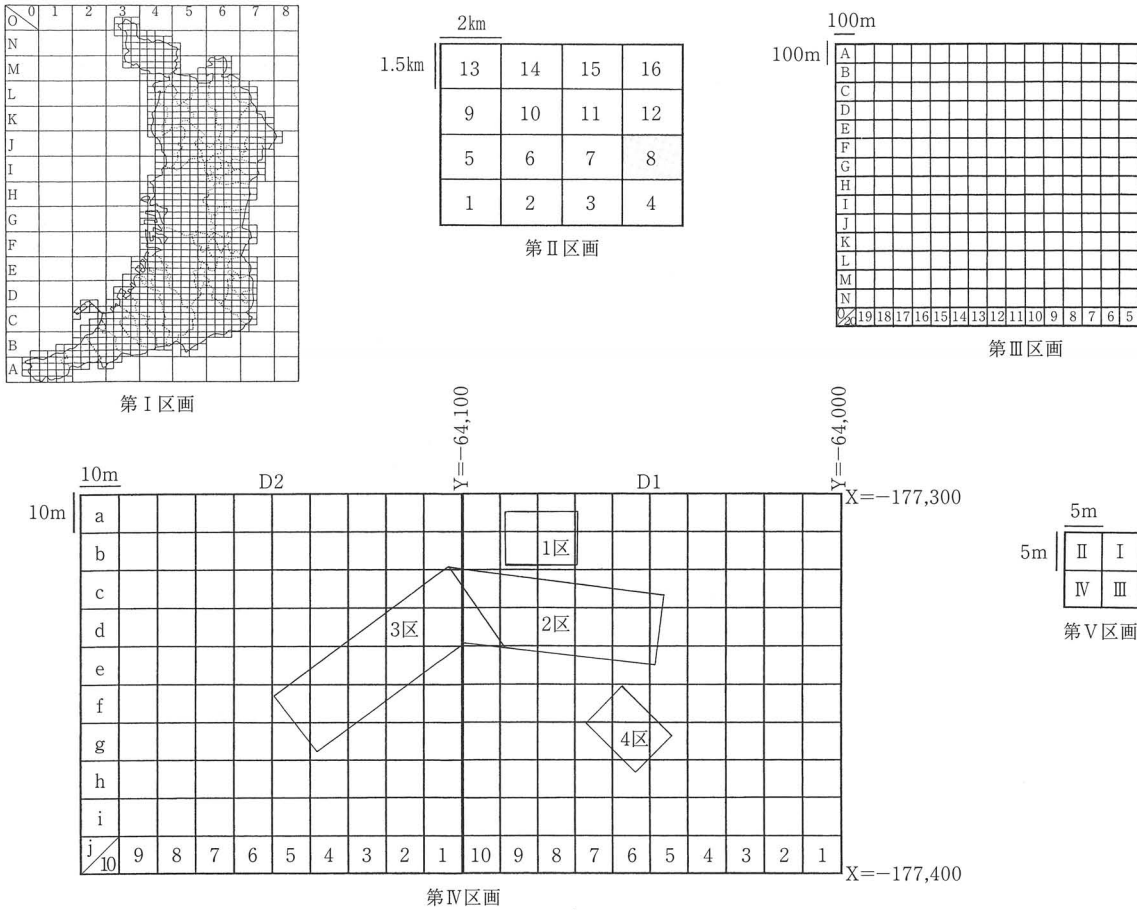


図３　調査区地区割図

特記すべきこととして、平成14年度から座標値が国際基準に基づく新座標に変更された。これにともなって、座標値から導かれた地区割りの表記も変更されている。安松田遺跡については、今回の発掘調査が初見であるため、新座標に基づく表記を採用しているが、周辺の遺跡との位置関係を照合する際には気をつけたい。

遺構番号は、調査区を問わず検出した遺構順に通し番号を与えた。そのため、遺構番号が1番違いであっても調査区が異なる場合がある。遺構の性格が想定できるものについては、遺構番号に溝・井戸などの性格を付加した。また、検出時に遺構番号を重複して与えたものについては、便宜上遺構番号の後に①．②．などの番号を付加した。本書では、すべての遺構についての記載を行なっていないため掲載している遺構番号は飛んでいるが、遺構番号は調査時のままである。

検出された遺構は、ヘリコプターによる航空測量と空中写真撮影を実施し、これを基に1／20および１／50で迅速に平面図、遺構図の図化を行なった。この空中写真撮影で得られた各調査区のカラー密着写真を基に、1／100の調査区全域の合成写真を作成した。

このほか、必要に応じて遺構断面図や遺物出土状況図については、細部を表現するため手書きで実測し、1／5、1／10、1／20の図面を作成した。土層断面図については、遺構平面図と対応するため基本的に1／20で作成した。

方位については、座標北を示している。このため、真北と座標北では約６°東にずれている。

第２章　位置と環境　（図４・５）

大阪府南部の泉佐野市は、大阪市と和歌山市のほぼ中間のいわゆる泉州・泉南地区南部に位置する。泉佐野市は、市域の北西が大阪湾に面し、遥か遠方には淡路島や六甲山麓を望むことができる。また、市域東側の背後には和泉山脈がそびえ、そこを源に発した樫井川などによって沖積地や丘陵部が形成されている。市の中央部には中位から高位段丘、西部と南部には低位段丘および沖積低地からなる和泉平野が広がり、海岸部、平野部、丘陵部といった比較的変化に富んだ地形をしている。大阪湾を望むと対岸に関西国際空港があり、市域中央にはそれにつながる空港連絡道路が縦断している。大阪湾と和泉山脈に挟まれた緑豊かな平野部を中心として多くの人々が生活しているが、山側に向かうにつれまだまだ畑地などの田園風景が多く見られる地域である。

安松田遺跡は泉佐野市の西側の平野部に位置する遺跡で、海岸線から約1.2km内陸に入った安松川と根来川により開析された下位段丘面に位置する。標高は約６～７ｍである。

古来、泉佐野市周辺は紀伊と難波を結ぶ交通の要所として歴史上重要な役割を果たしてきた。海岸沿いには、旧佐野村－嘉祥寺－吉見などの集落が立地し、孝子越街道がこれらを繋いでいる。

図４　周辺遺跡分布図

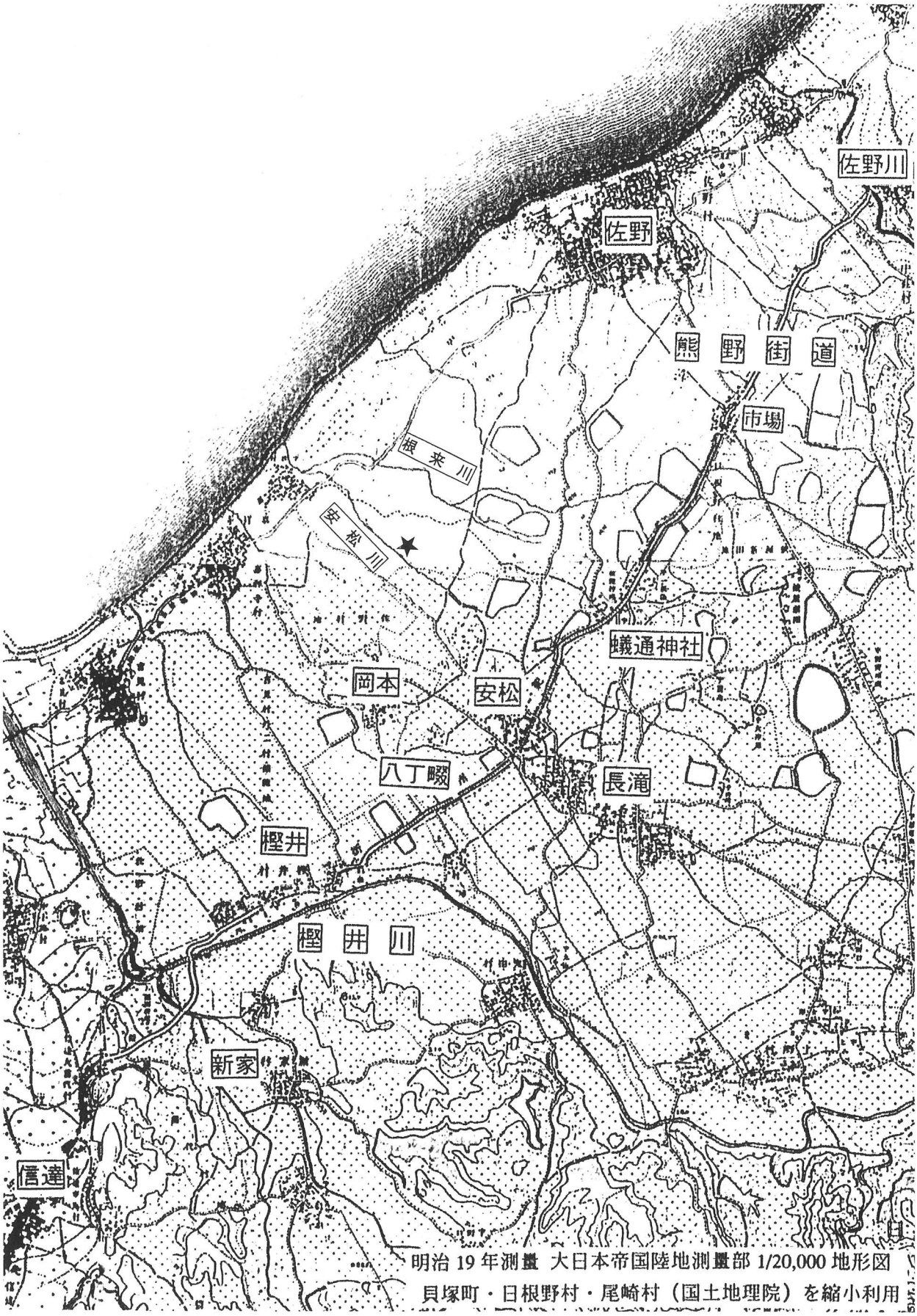


図５　明治19年測量地図による調査地位置図

また、南海道が海岸線にほぼ平行して通い、市場－蝋通神社－安松－樫井などの集落をむすぶ熊野街道が見られる。特に平安遷都以降、熊野街道として発達し、熊野や高野山の参拝が盛んになると交通の要所として賑わいをみせた。近年、熊野街道を含む地域が「世界文化遺産」としてユネスコに登録され、かつてを偲ぶ賑わいを見せている。

泉佐野市周辺の泉州地区は、気候区分的には瀬戸内気候に属し、年間を通じて降雨水量が少ないことから用水路や溜池の発達が著しい。和泉国日根庄による荒野開発として、14世紀初頭に『和泉国日根野村近隣図』などの絵図が示されるなど、古くから灌漑の開発が知られている。

これまで泉佐野市周辺でも多くの遺跡が知られていたが、関西国際空港の建設に伴い、アクセス道路（関西国際空港連絡道路）や鉄道（JR･南海関西空港線）の建設、関連施設建設および海岸部の埋め立て事業（りんくうタウン）などの開発が進んだことで、発掘調査も盛んに行なわれ新たな遺跡の発見や発掘調査の成果が数多く報告されている。

安松田遺跡の西側では、関西国際空港連絡道路等建設に伴う発掘調査が実施された日根野遺跡、植田池遺跡、長滝遺跡、安松遺跡、末廣遺跡、中開遺跡、松原遺跡などが連なっている。当遺跡北側の海岸部では、羽倉崎東遺跡、羽倉崎遺跡が見られる。当遺跡西南側の平野部では、船岡山遺跡、羽倉崎上町遺跡、岡本寺跡、樫井城跡、樫井西遺跡などの遺跡が分布する。当遺跡南東側の丘陵部では、諸目遺跡、三軒屋遺跡などがある。

旧石器時代では、日根野遺跡、三軒屋遺跡などでナイフ形石器、長滝遺跡でナイフ形石器、楔形石器や彫器などが出土している。縄文時代では、樫井川下流域の船岡山遺跡で後期、中流域の三軒屋遺跡で晩期の生活痕跡が見つかっている。弥生時代では、船岡山遺跡や三軒屋遺跡が前期の代表的な集落である。樫井西遺跡や諸目遺跡では、方形周溝墓が検出されている。古墳時代では、三軒屋遺跡や諸目遺跡などで集落跡が検出されている。また、長滝古墳群など5世紀後半の方墳が相次いで発見され、人物埴輪、石見型盾形埴輪などが出土している。７世紀中頃の終末期古墳として方墳の石ノ子古墳があげられる。海岸部の湊遺跡や松原遺跡では、製塩土器が出土している。古代では、白鳳時代建立として知られる禅興寺がある。寺域ははっきりしないが、山田寺式、河原寺式、紀寺式などの軒丸瓦が出土している。飛鳥時代では、三軒屋遺跡や湊遺跡から集落跡が検出されている。また、長滝遺跡では覆い屋付の井戸から齋串や独楽などが出土している。奈良時代では、湊遺跡から多くの建物跡が検出され、漁労具の蛸壺や土錘のほか、「和銅開珎」なども出土している。長滝遺跡では、瓦窯跡が検出されている。平安時代では、日根野遺跡、湊遺跡、上之郷遺跡、三軒屋遺跡、船岡山遺跡などで住居跡などが検出されている。上之郷遺跡では、緑釉陶器やふいごの羽口などが出土し、有力農民の屋敷地と考えられている。中世では、ほぼ市内全域で遺跡の分布が広がり、日根野遺跡のほか、湊遺跡、上町遺跡、樫井西遺跡、机場遺跡などでは大規模な集落跡が検出されている。壇波羅密寺では、土坑墓群などが検出されている。戦国時代の終わり頃から江戸時代にかけて、多くの濠商が佐野を足場に全国規模で廻船業を展開し、漁業・廻船業の発展に伴い、佐野は町場として繁栄する。

第３章　調査成果

１．試掘調査　（図６）

泉佐野市東羽倉崎町所在の府営羽倉崎住宅では、大阪府建築都市部住宅整備課が建物の老朽化に伴う府営住宅の建て替え事業を計画することとなった。この事業に先立ち、事業地内における埋蔵文化財の有無を確認すべく、同課の依頼を受けて平成13年８月６日～９日に本府教育委員会が試掘調査を実施した。

試掘調査の方法として、事業地内の公園・駐車場などの空き地に８ヶ所のトレンチ（2.0m×4.0m）を設定し、確認調査を実施した。表土・盛土等は重機で除去した後、人力によって遺構・遺物の確認につとめた。調査の結果は、写真撮影と土層断面の実測図を作成し、記録した。

試掘調査の結果、第１・第２トレンチでは、須恵器片、土師器片等の遺物をわずかに含む遺物包含層と黒褐色および黒色粘質シルトを埋土とする遺構を検出した。第３・第４トレンチでは、瓦器椀片、瓦片、土師器片等の中世遺物を含む遺物包含層を確認した。さらに、第６トレンチでは、瓦片、瓦器椀片、土師器片、スス、植物遺体を含む遺物包含層と遺構相当層を確認した。

試掘調査の結果を受けて、府営羽倉崎住宅建て替え予定地内を範囲とする遺跡は、平成13年に安松田遺跡として周知された。

図６　試掘調査地点位置図

2．基本層序　（図７）

調査地は、府営羽倉崎住宅地内のほぼ中央部に位置する。現況では、調査区の南東から北西方向で海岸部に向けて徐々に低くなり、また、西側の安松川に向けてやや低くなる様相を示す。

土層の基本的な堆積状況は、おおむね６層に大別することができる。第Ⅰ層は住宅造成時の盛土で、厚さは35～60cmを測る。第Ⅱ層は旧耕土及び床土層で、暗灰黄色粘質シルト、にぶい黄褐色砂混じり粘質シルトが主を成す。厚さは10～20cmを測る。第Ⅲ層は中世遺物を含む包含層で、調査区全域の所々で確認された。暗灰黄色粘質シルト、にぶい黄褐色粘質シルトが主を成し、土師器、瓦器椀などの細片を僅かに含む。厚さは10cm程度と薄い。おそらく後世の耕地化により上層部が削平を受けたものと考えられる。第Ⅳ層は遺構相当層で、第Ⅴ層の青灰色粘質土層を切り込み掘削した粘土採掘坑である。深さは10～80cmを測る。埋土は埋め戻し土で様々な堆積状況を示すが、大きく３パターンに分類することができる。①黒褐色・茶色・黄褐色・灰色などの粘土ブロック土を多く含むもの、②茶色・黄褐色・砂ブロック土および砂層を含むもの、③各種ブロック土を含む層が水平堆積を示し、特に下層付近で黒褐色・黒色粘質シルト層が帯状に入るもの、などである（図25）。第Ⅴ層は青灰色粘質土～シルトで地山直上層及び地山層となる。第Ⅵ層は黄灰色砂・砂レキで、３区の西側で確認された。おそらく安松川の旧河道あるいは氾濫源とみられる。

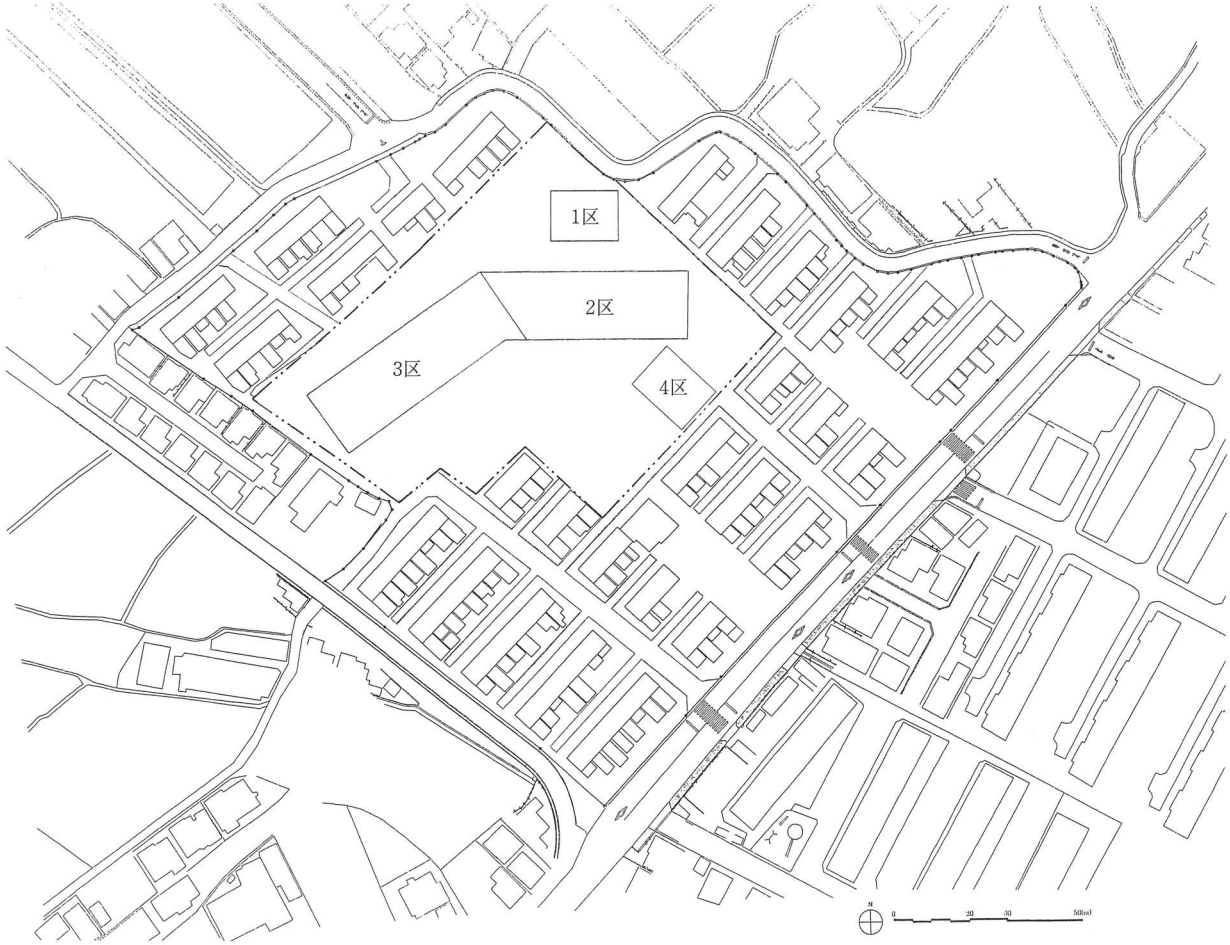


図７　調査区位置図

3．調査区成果

1）１区の調査　（図８・９．PL－１・２）

１区は調査地の北側に位置する東西18m、南北13mの方形を示す調査区で、機械・電気室に当たる。１区では、畦畔、スキ溝跡、溝状遺構、粘土採掘坑などを検出した。

盛土下の旧耕土面は、畦畔で区切られた南側の一部分が台地状を示し、T.P.＋7.20mを測る。他三方は段を成して低くなる様相を示し、T.P.＋6.70mを測る。畦畔は中央部に溝を有するもので、北西から南東に延びるが、中央部から以南(畦畔B)はやや角度を変える。畦畔の北半部（畦畔A）は調査地の北および西側に現存する耕作地の区割りと同方向を示す。

畦畔Aの西側では、北西から南東に延びるスキ溝跡数条とスキ溝跡に直行する浅い溝を検出した。埋土は黄灰褐色砂質シルトで、深さは２～10cmを測る。遺物は出土しなかった。

南側の台地状部分では、不正形な楕円形状（遺構110・113）あるいは方形状（遺構111・112）を呈する粘土採掘坑を検出した。長径は２～３ｍを示す。掘り方は底が狭く平らな深皿状を呈す。埋土は、茶色および黄褐色ブロック土を含むにぶい黄褐色粘質シルト、下層に黒褐色シルトが帯状に入る様相を示す。いずれも地山層の青灰色粘質土を切り込んでいる。掘り込み面は旧耕土層により削平されていると思われる。掘削の深さは10～30cmを測る。

畦畔の北東側では、不正形な方形状を呈する粘土採掘坑（遺構105・108・109）を検出した。一辺が２～３ｍで、浅い皿状の掘り方を呈す。埋土は、黄褐色、茶褐色ブロック土および砂ブロック土を多く含む粘質シルトで、深さは約30cmを測る。いずれも遺物は出土しなかった。

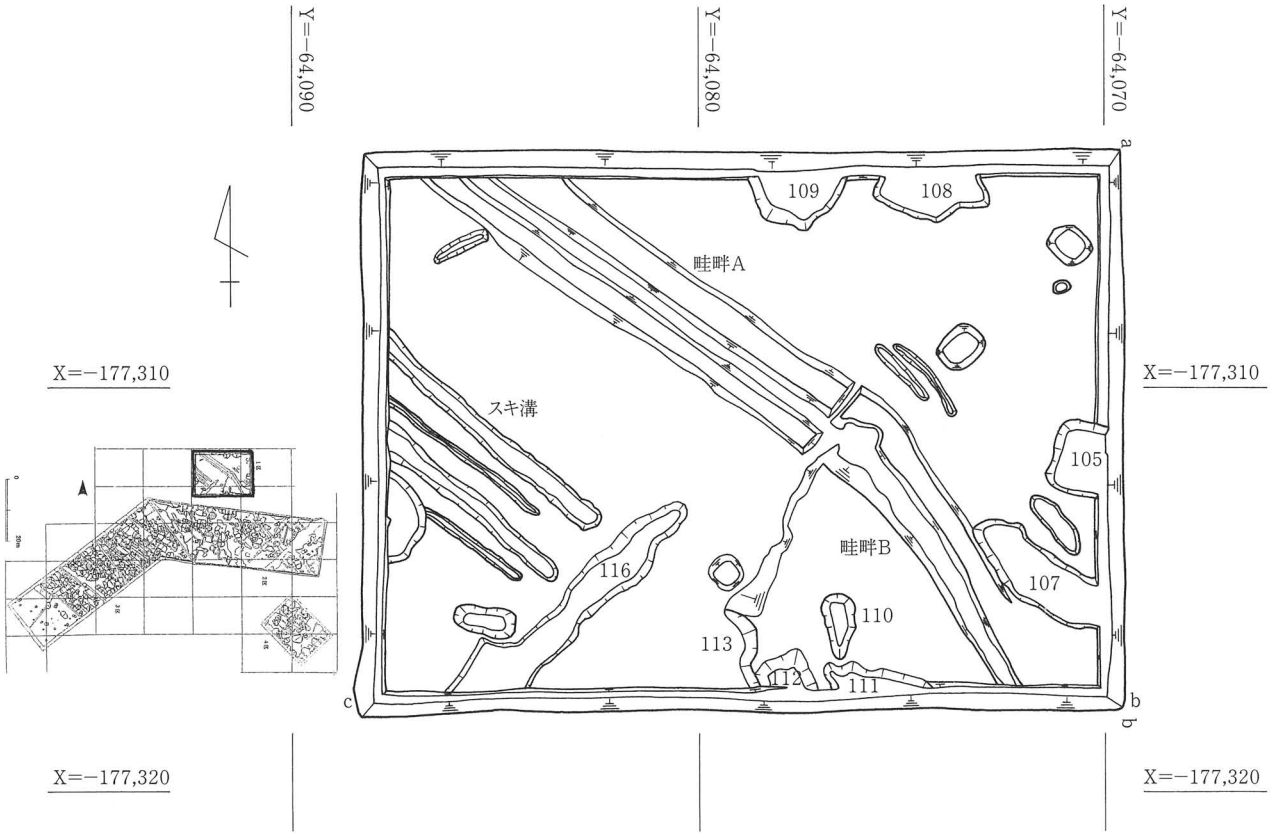
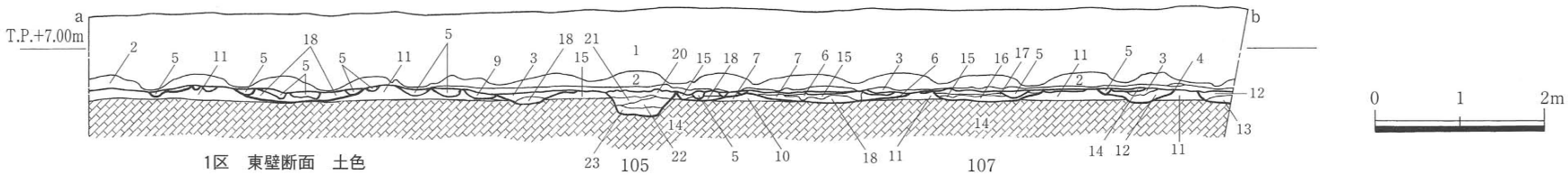
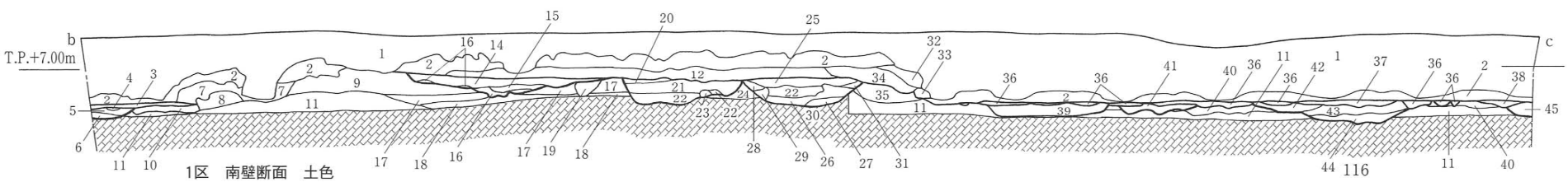


図８　１区遺構全体図



1区　東壁断面　土色

1（盛土）　黄褐色砂レキ土
2（旧耕土）　黒褐色砂混じり粘質シルト
3（床土）　にぶい黄褐色シルト
4（床土）　にぶい黄褐色＋黒褐色砂混じり粘質シルト
5（溝内埋土）オリーブ褐色砂混じり粘質シルト
6（溝内埋土）灰オリーブ色＋灰色細砂混じりシルト
7（包含層）　暗灰黄色＋暗オリーブ褐色（茶ブロック）粘質シルト
8　黄褐色（黄小ブロック）＋黒褐色（茶小ブロック）＋暗オリーブ褐色砂混じり粘質シルト
9　灰色（地山ブロック）＋黄褐色シルト混じり粘質シルト
10　灰色及びオリーブ灰色＋Fe　シルト
11（地山層）　灰色＋浅黄色（Fe）粘質土
12（遺構内）　暗灰黄色＋オリーブ褐色＋暗オリーブ褐色（茶小ブロック混じる）粘質シルト
13（遺構内）　黄褐色＋青灰色（地山層小ブロック混じる）粘質シルト
14（遺構内）　黄褐色＋暗灰黄色（茶ブロック混じる）粘質土
15（遺構内）　黄褐色粘質シルト（Fe）
16（遺構内）　にぶい黄色（黄ブロック60%）＋黒褐色（茶ブロック40%）シルト
17（遺構内）　黄褐色砂質シルト
18（遺構内）　浅黄色＋灰黄色（地山ブロック混じる）粘質シルト
19（遺構内）　暗灰黄色粘質土
20（遺構内）　にぶい黄色＋黒褐色（茶ブロック30%）粘質シルト
21（遺構内）　黄褐色砂質土
22（遺構内）　灰色＋明黄褐色＋Fe　砂レキ混り粘質シルト
23（遺構内）　黄灰色＋（茶小ブロック10%含む）シルト



1区　南壁断面　土色

1（盛土）　黄褐色砂レキ土
2（旧耕土）　黒褐色砂混じり粘質シルト
3（床土）　暗灰黄色（茶・黄小ブロック混る）粘質シルト
4（床土）　オリーブ褐色砂混じり粘質シルト
5（溝内埋土）暗灰黄色＋オリーブ褐色＋暗オリーブ褐色（茶小ブロック混じる）粘質シルト
6（遺構内）　黄褐色＋青灰色（地山層小ブロック混じる）粘質シルト
7（畦畔B）　暗褐色砂混じり粘質シルト
8（畦畔B）　黄褐色（黄小ブロック）＋黒褐色（茶小ブロック）＋暗オリーブ褐色砂混じり粘質シルト
9（畦畔B）　灰黄褐色粘質土（上層Fe多い。下層地山層）
10　青灰色＋黄褐色（砂少し混じる）粘質土
11（地山層）　青灰色粘質土（Fe少し含む）
12（床土）　灰黄褐色＋にぶい黄褐色粘質シルト（Fe粒多く含む）
13（包含層）　にぶい黄褐色粘質シルト（Fe含む）
14（遺構内）　暗オリーブ褐色粘質シルト（上層Fe含む）
15（遺構内）　黒褐色粘質シルト
16（遺構内）　にぶい黄色＋暗オリーブ色シルト（茶・帯状に入る）砂混じり粘質シルト
17　にぶい黄橙色＋褐灰色（ブロック土少し混じる）シルト（Fe多い）
18（地山直上層）浅黄色＋にぶい黄橙色（Fe）＋灰黄色（ブロック土入る）シルト
19（遺構内）　褐灰色粘質土（Fe少し含む）
20（遺構内）　黒褐色粘質シルト
21（遺構内）　褐灰色＋にぶい黄橙色粘質土（Fe少し下層に含む）
22（遺構内）　にぶい黄橙色＋灰色（地山ブロック少し混じる）粘質シルト（Fe下層に入る）
23（遺構内）　にぶい黄褐色粘質シルト
24　にぶい黄橙色＋黒褐色（茶シルト帯状に入る）粘質シルト
25（遺構内）　黒色粘質シルト
26（遺構内）　青灰色（地山ブロック）＋灰黄褐色粘質シルト（Fe多く含む）
27（遺構内）　浅黄色＋にぶい黄橙色砂混じり粘質シルト（Fe）
28（遺構内）　暗灰黄色＋黒褐色（茶ブロック多く含む）シルト
29（遺構内）　暗灰黄色＋黒褐色（茶ブロック少し含む）砂混じり土
30（地山層）　にぶい黄橙色＋灰黄色粘質シルト（Fe多い）
31（遺構内）　黄褐色＋黒褐色（下層に入る）粘質シルト（Fe）
32（あぜ状堆積）にぶい黄橙色砂レキ混じり粘質シルト（Fe含む）
33（あぜ状堆積）灰黄褐色砂混じり粘質シルト（上層Fe多い）
34（あぜ状堆積）暗灰黄色＋灰黄色（地山ブロック）砂レキ混じりシルト
35（あぜ状堆積）灰黄褐色砂混じり粘質シルト（小ブロック土混じる）
36（床土）　黄褐色砂質シルト
37（床土）　暗灰黄色（茶小ブロック・黄小ブロック混じる）シルト
38（溝内堆積土）オリーブ褐色砂混じり粘質シルト
39（遺構内）　黄褐色（黄小ブロック）＋灰黄色（地山ブロック混じる）砂混じり粘質シルト
40（地山直上層）灰黄色（地山ブロック）＋黄褐色（Fe。上層に砂混じる）粘質シルト
41（遺構内）　にぶい黄色＋暗灰黄色＋黒褐色（茶ブロック土多く含む）粘質シルト
42（遺構内）　黄褐色（黄小ブロック）＋暗オリーブ褐色（茶小ブロック少し混じる）砂混じり粘質シルト
43（遺構内）　黄褐色（黄小ブロック）＋黒褐色（茶小ブロック）＋暗オリーブ褐色砂混じり粘質シルト
44（遺構内）　黄褐色＋暗灰黄色（青粘土ブロック）粘質シルト（Fe）
45（遺構内）　暗灰黄色＋オリーブ褐色＋暗オリーブ褐色（茶小ブロック混じる）粘質シルト

図９　１区東壁・南壁断面図

2）2区・3区の調査　（図10・11・PL－1～4）

2区・3区は調査地の中央部に位置する調査区で、住棟部に当たる。全長は東西約116m、南北約18.5mを測る。2区・3区では、粘土採掘坑と畦畔、溝などを検出した。

盛土直下の旧耕土層は、南側が高く2区南端ではT.P.＋7.20mを測り、西側に向かって低くなる様相を示し、3区西端ではT.P.＋6.50～6.70mを測る。旧耕土層取り除くと遺構面が広がる。2区南側では、旧耕土層下に中世遺物を含む包含層がみられた。

2区では、畦畔B東側の区画が段を成して低くなり、T.P.＋6.70mを測る。1区検出の畦畔東側の区画に繋がるとみられる。また、2区西側では1区南側から続く台地状部分から段を成して低くなる区画が広がる。1区の畦畔Aに対してほぼ垂直方向に段を成す。2区内の粘土採掘坑がこの段によって切り込まれることから、後世の耕地開発の際、削平・整地されたものと考えられる。3区西側の畦畔F以西では、約20cm低くなる。検出面では僅かに小規模な粘土採掘坑と、東西方向の溝、さらにヒトおよび牛馬などの動物の足跡が全面にみられた。遺構の検出状況は、他の区画とやや異なる様相を示す。土地の管理形態、所有者の違いにより、土地の利用方法が異なるものと考えられる。

検出された粘土採掘坑は、形状、大きさ、埋土の堆積状況などで違いがみられた（図25）。

・検出形状・大きさ

Ⓐ1辺3m以上の方形あるいは長方形状を呈すもの。（2区53・72・3区378・4区408・414他）

Ⓑ長辺約2～3m、短辺約1.5～2.5mの長方形状を呈すもの。（3区148・150・222・245他）

Ⓒ長径約2～3mの隅丸方形ないし長方形状を呈すもの。（2区4・67・3区297・318・377他）

Ⓓ長径約1～3mでやや不定形な楕円形状を呈すもの。（1区110・2区23・3区351・4区422他）

・掘り方

㋐垂直気味の深い掘り方で、底はおおむね平底を呈す。掘削深度は20～50cmを測る。掘り込み形状として肩部が直線を成す。（3区204・251・252・261・378他）

㋑垂直気味の深い掘り方で、底はおおむね平底の深皿状を呈す。掘削深度は20～50cmを測る。（1区105・3区377・348・378・4区408・417他）

㋒擂鉢状にやや傾斜をもつ掘り方で、底が丸みを帯びる椀状あるいは深皿状を呈す。掘削深度は20～40cmを測る。（1区113・2区23・28・3区303・315・351・4区416他）

㋓やや垂直気味の浅い皿状で、平底を呈す。掘削深度は10～30cmを測る。（3区291・232他）

㋔全体に浅く底が不整形なもの。掘削深度は5～20cmを測る。（1区111・3区402・403他）

・粘土採掘坑内の埋土（粘土採取後の埋め戻し土が主を成す。）

①黒褐色・茶色・黄褐色・灰色などの粘土ブロック土が多く混在するもの。（2区4・94・3区195・261・378・4区417他）

②茶色・黄褐色・砂ブロック土および砂を含むもの。（3区204・297・371・4区431・433他）

③各種ブロック土を含む層が水平堆積を示し、特に下層付近で黒褐色・黒色粘質シルトが帯状に

X=−177,320
X=−177,330
X=−177,340
Y=−64,100
Y=−64,090
Y=−64,080
Y=−64,070
Y=−64,060
Y=−64,050
a
b
c
d
畦畔B

図10　2区遺構全体図

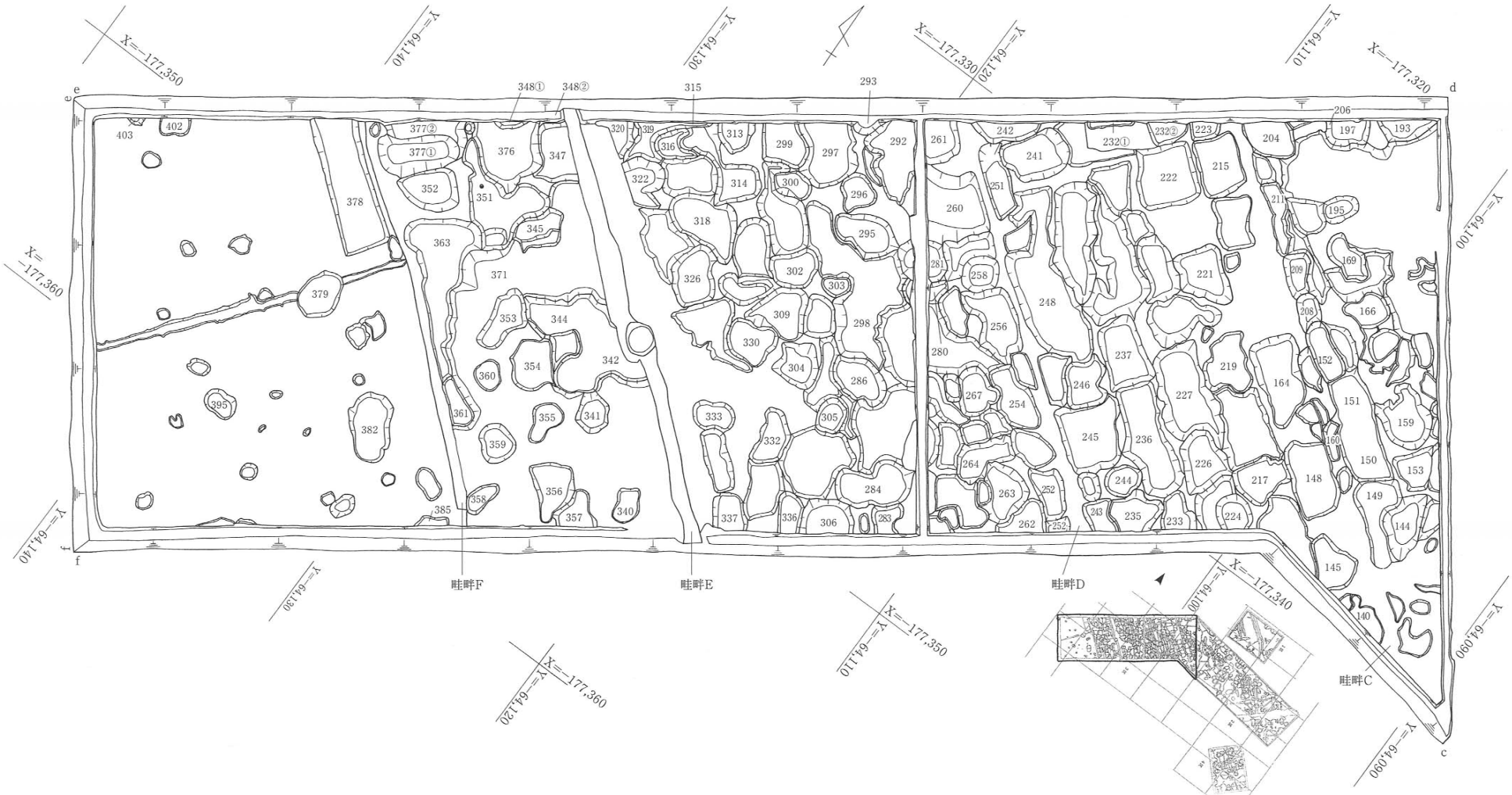


図11　3区遺構全体図

入るもの。（２区16・71・72・３区315・351・352・４区408・416他）

３区北側の土層断面で、③類の粘土採掘坑（遺構293）が②類の粘土採掘坑（遺構297）に切られる状況がみられた（PL－３e・f）。また、２区・４区では②・③類の粘土採掘坑の上層に中世遺物を含む包含層が堆積する状況がみられた。これらのことから、③→②→①の順に埋土の違いによる時期差がうかがえる。

・粘土採掘坑の分布状況

ⓐ畦畔に沿って直線的に計画して掘削され整然と土坑が並ぶもの。（３区畦畔C・D付近）

平行して延びる畦畔C・Dに沿って約２m間隔の直線区画内を長辺約２～３mの方形状を一単位とし、規則的に掘削している状況がうかがえた。畦畔C・Dは畦畔Aに起因する旧耕作面の区画を成す。壁断面観察では、これらの畦畔は幾つかの粘土採掘坑上に造られており、時期的に後出するものと考えられる。粘土採掘坑の検出形状・大きさはⒷ、掘り方の形状は㋐、埋土はおおむね①に分類できる。近世代のものと推測される。

ⓑおおむね直線的に配置されるが不整形な掘り方の土坑が密集するもの。（２区畦畔B西側付近・３区畦畔E・F付近）

畦畔Bに起因するとみられる直線方向に沿っているが、形状や大きさは一定ではなく、方形状や楕円形状の土坑がいくつか近接している状況がうかがえた。おそらく一定区画内で無作為に掘削したものと思われる。壁断面観察では、畦畔Bの盛土上を中・近世の遺物を含む包含層が堆積していることから、畦畔Bは中世代に形成されたものと考えられる。粘土採掘坑の検出形状・大きさはⒸあるいはⒹ、掘り方の形状は㋑・㋒・㋓、埋土は②および③に分類できる。

ⓒ散逸的に点在する小型の不整形状のもの。（２区23・65・３区195・351・４区422・418他）

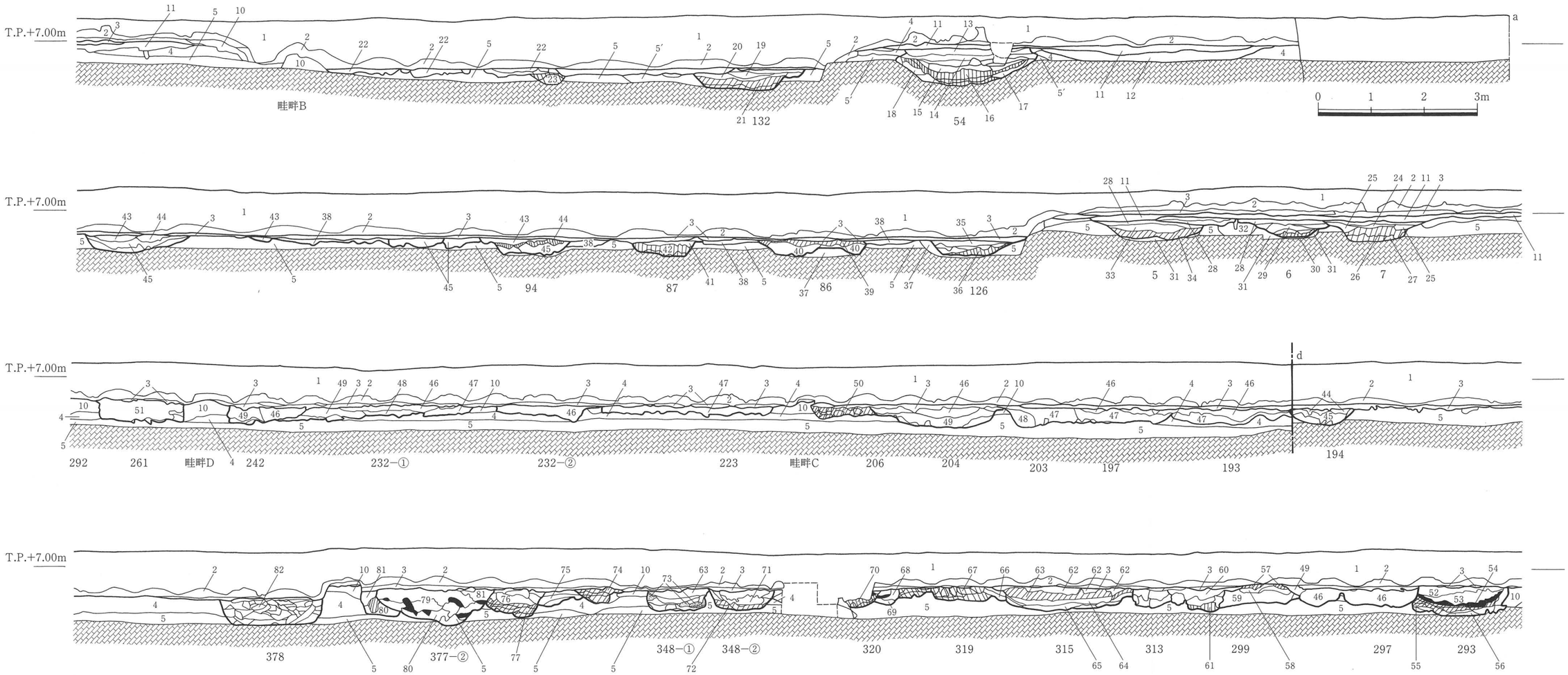
ほぼ単一でほとんど切り合いを持たない。形状は一定ではなく、長辺約１～1.5mで歪な楕円形又は方形状を呈す。遺構内からほぼ完形の遺物が出土するものもみられる（２区23・３区351・４区422）。14～15世紀頃に相当すると考えられる。粘土採掘坑の検出形状・大きさはⒹ、掘り方の形状は㋒、埋土は③に分類できる。

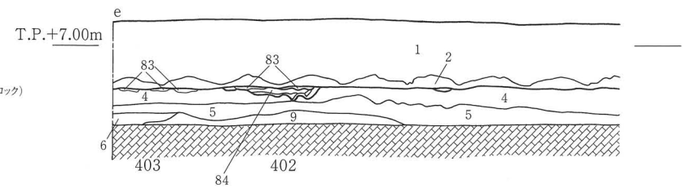
ⓓ単一で直線的な大型の方形状を示すもの。（２区71・72・53・54・３区378他）

一辺が約３m以上の長方形を呈す。一度の掘削単位が、おおよそ10～20㎡となる。２区の畦畔Bに沿ってみられる粘土採掘坑の検出形状・大きさはⒶ、掘り方の形状は㋑、埋土は③に分類できる。３区の畦畔Fに沿う粘土採掘坑の検出形状・大きさはⒶ、掘り方の形状は㋐、埋土は①に分類できる。２区のものはやや古く中世代に、３区のものは新しく近世に相当すると思われる。

遺構の検出状況から、14世紀代では散逸的に小規模な採掘(Ⓒ)であったが、その後、中世代には畦畔を利用し、区画ごとに採掘(ⓑ・ⓓ２区)をするようになる。近世代では、土地区画を最大限に利用し、効率よく計画的に採掘(ⓐ・ⓓ３区)するようになったと考えられる。

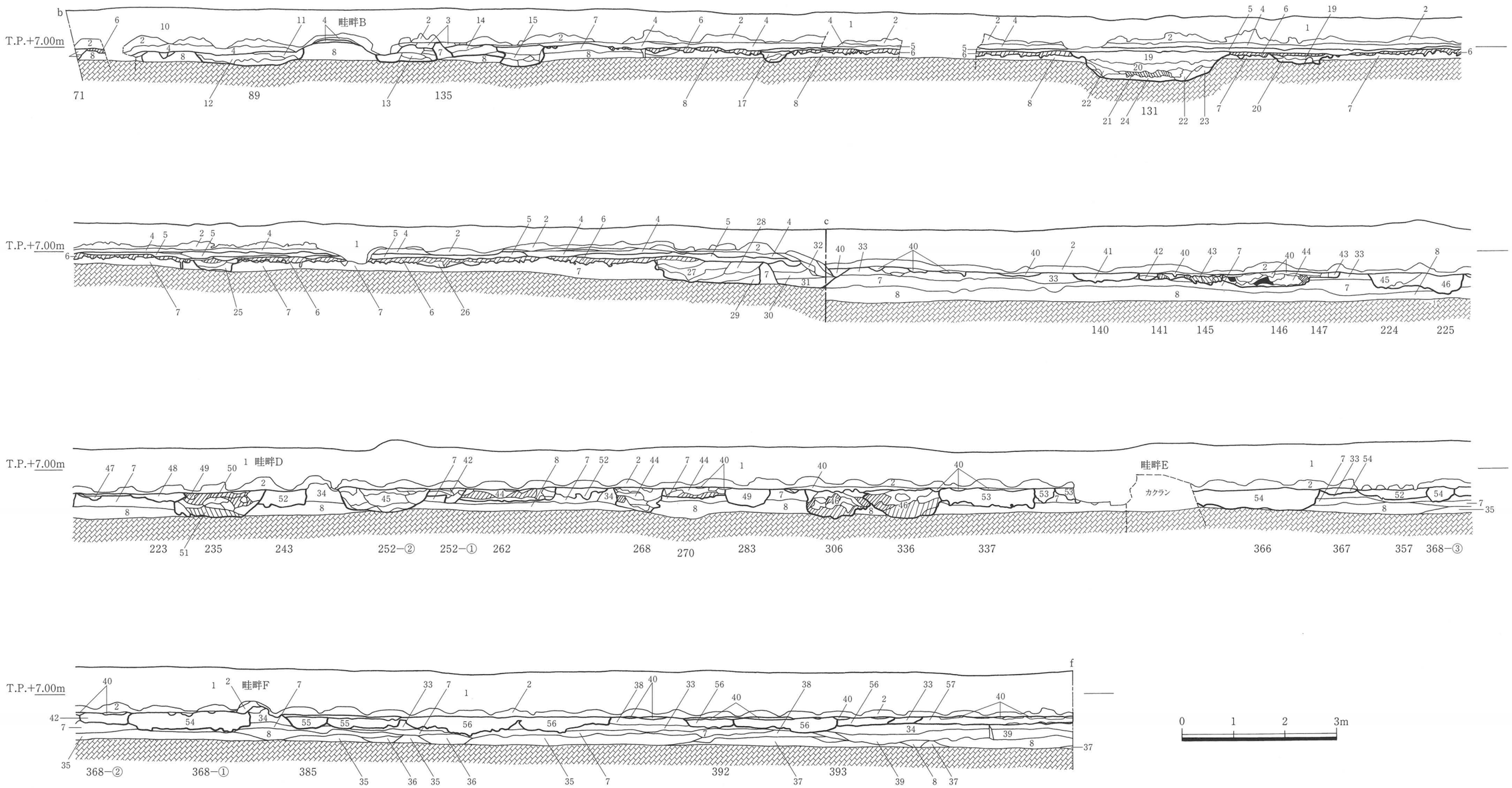
調査区内では採掘された粘土を利用し製品化した痕跡は確認できなかった。粘土をどの様に利用したかは不明である。





1 盛土　明黄褐色砂レキ土
2 耕土　灰色+オリーブ黒色　砂(レキ)混じり粘質シルト
3 床土　にぶい黄色+灰黄褐色　砂混じり粘質シルト　(鉄分多い)
4 地山直上　にぶい黄色+灰色+鉄分　砂混じり粘質シルト
5 地山層　オリーブ灰色(鉄分含む)　粘質シルト
5′　地山層　灰色+青灰色(鉄分含む)　粘質土
6　青灰色+にぶい黄色(鉄分含む)　砂混じり粘質シルト
9　青灰色+にぶい黄色(鉄分含む)　砂レキ混り粘質シルト
10 畦畔　灰色+黄褐色　砂混り粘質土
11 包含層　暗灰黄色粘質シルト　(鉄分含む)
12 包含層　暗オリーブ色+にぶい黄色(鉄分含む)　砂混じり粘質シルト
13 (遺構54・最上層)　黒色+黄褐色(小黄ブロック粒少し)　粘質シルト
14 (遺構54・上層)　黒色+暗灰黄色+黄褐色(キブロック塊50%)　シルト
15 (遺構54・中層)　黒褐色+黄褐色(黄ブロック塊　50%)　砂質シルト
16 (遺構54・下層)　黒色+暗灰黄色(灰黄色ブロック少し・流状に薄く数条入り互層を成す)
砂質シルト
17 (遺構54・最下層)　黒色　(砂質)シルト
18 (遺構54・周縁部)　黄褐色(黄ブロック土多い)+暗灰黄色　シルト
19 (遺構132・上層)　黄褐色+明黄褐色(黄小ブロック)　粘質シルト
20 (遺構132・中層)　黄褐色+黒褐色(茶小ブロック30%)　粘質シルト
21 (遺構133・下層)　黒褐色(黒ブロック)+オリーブ褐色(黄ブロック塊)　砂混じり粘質シルト
(下層砂レキ混じる)
22 (遺構相当層)　灰黄色(地山ブロック)+黄褐色　(上層に砂混じる)粘質シルト(鉄分含む)
23 (遺構相当層)　黄褐色(黄小ブロック)+黒褐色(茶小ブロック)+暗オリーブ褐色
砂混じり粘質シルト
24 (遺構7・上層)　黄灰色+灰白色(流状)+オリーブ黒色(黒灰色ブロック)+(鉄分含む)
粘質シルト
25 (遺構8・中層)　明黄褐色(黄ブロック)+黄灰色　(鉄分含む)　砂質シルト
26 (遺構7・下層)　黒色(黒茶ブロック)+灰白色(灰白ブロック)　各ブロック土混在する粘質シルト
27 (遺構8・最下層)　青灰色(地山ブロック)+黒色(黒茶ブロック少し)　粘質土
28 (遺構5,6・最上層)　黄灰色+にぶい黄色(黄ブロック含む)　粘質シルト
29 (遺構6・中層)　黄灰色+黒褐色+明黄褐色(黄ブロック)各ブロック互層を成す　粘質シルト
30 (遺構6・下層)　黒色+灰白色　粘質シルト　(僅かに互層を成す)
31 (遺構5・6・最下層)　にぶい黄色粘質土
32 (遺構相当層)　黒褐色(茶ブロック多い)+にぶい黄色(黄ブロック20%)+灰白色(ブロック少し)
小ブロック混じる粘質シルト
33 (遺構5・中層)　黄褐色+黒褐色(茶小ブロック　30%)　粘質シルト
34 (遺構5・下層)　黒褐色(黒ブロック)+黄褐色(黄ブロック)+オリーブ褐色(黄小ブロック)+
黄灰色(白灰色ブロック)小ブロック混在する　粘質シルト
35 (遺構126・上層)　明黄褐色(黄層)+暗灰黄色(茶小ブロック)　粘質シルト
36 (遺構126・下層)　緑灰色(地山ブロック)+黒色(黒茶ブロック50%)　粘質シルト
37 (遺構126・周縁層)　オリーブ灰色+にぶい黄色(黄ブロック)+(鉄分含む)　粘質シルト
38 (遺構86・周縁層)　暗灰黄色(黄ブロック)+黒褐色(茶ブロック)　(粘質)シルト
39 (遺構86・上層)　にぶい黄色(茶小ブロック)　(粘質)シルト
40 (遺構86・下層)　にぶい黄色(薄茶ブロック)黒褐色(黒茶ブロック)砂混じる　(粘質)シルト
41 (遺構87・上層)　にぶい黄色(黄層)+黒褐色(黒茶ブロック)　砂混じり(粘質)シルト
42 (遺構87・下層)　黒色　シルト　+2.5Y7/1灰白色(灰色ブロック下層に堆積)　粘質シルト
43 (遺構94・上層他)　黄灰色(薄茶)　粘質シルト　(鉄分含む)
44 (遺構94・中層他)　浅黄色(黄ブロック)+黒褐色(茶ブロック)　粘質シルト
45 (遺構94・下層他)　黒色(黒茶ブロック土多い)+浅黄色(黄ブロック)　シルト
46 (遺構193他・上層)　オリーブ褐色(茶ブロック20%)+にぶい黄色(黄ブロック70%)+黄灰色+黒褐色
(小ブロック60%)　各ブロック土混る粘質シルト
47 (遺構193他・下層)　暗灰黄色(薄茶小ブロック50%)+黄褐色(小ブロック0%)+黄灰色(茶ブロック20%)
小ブロック混る砂質シルト
48 (遺構197・周縁層)　にぶい黄色(黄ブロック)+オリーブ灰色(地山ブロック)　粘質シルト
49 (遺構202・下層他)　にぶい黄色(黄小ブロック20%)+黒褐色(茶ブロック60%)+灰色(地山ブロック)混るシルト
50 (遺構206)　黒褐色(ブロック)+暗灰黄色(黄砂ブロック塊多く含む)
各大ブロック土多く混在する粘質シルト
51 (遺構261)　黒褐色(黒茶ブロック塊)+黄灰色(黄ブロック塊)+にぶい黄色(砂ブロック塊)
ブロック塊多く混在する砂混じりシルト
52 (遺構293・最上層)　黒褐色(砂混る)砂混じり粘質シルト
53 (遺構239・上層)　明黄褐色粘質シルト　(僅かに茶色シルト混る)
54 (遺構239・中層)　黒色　(黄小ブロック粒僅かに含む)　粘質シルト
55 (遺構239・下層)　明黄褐色(黄ブロック)+黄褐色+黒褐色(小ブロック少し)　砂少し混る粘質シルト
56 (遺構239・最下層)　黒色+灰色(地山ブロック)　粘質土
57 (遺構299・最上層)　黒色+(鉄分含む)　(上層砂混る)　粘質シルト
58 (遺構299・上層)　黒色+にぶい黄色(黄ブロック塊多い)　粘質シルト
59 (遺構299・下層)　黒褐色+灰色(灰白シルト流状に僅かに入る)　粘質シルト
60 (遺構313)　黄褐色+黒褐色(茶ブロック)+暗灰黄色(薄茶ブロック粒)
砂含む各ブロック土混在する砂質シルト
61 (遺構313・最下層)　暗灰黄色+明黄褐色(黄ブロック)+黒褐色(茶ブロック)+オリーブ灰色(地山ブロック)
小ブロック混る粘質シルト
62 (遺構315・最上層)　黒褐色+灰色(下層に流状に入る)+(鉄分含む)　粘質シルト
63 (遺構315・上層)　黒褐色+にぶい黄色(黄小ブロック少し混る)　粘質シルト
64 (遺構315・中層)　黒褐色+にぶい黄色(キブロック僅か)+黄灰色(地山ブロック)
各ブロック土層状に混じる　粘質シルト
65 (遺構315・下層)　黒褐色+明黄褐色(黄小ブロック)+灰色(地山ブロック)　粘質シルト
66 (遺構319・周縁層)　黄灰色+にぶい黄色(黄砂ブロック粒)　砂混り粘質シルト
67 (遺構319)　暗灰黄色+黒褐色(茶小ブロック)+黄灰色+黒色+黄褐色(僅かに流状)
各ブロック土混在する　砂混り粘質シルト
68 (遺構320・上層)　黒褐色+暗灰黄色(黄小砂ブロック・流状・互層)　砂混り粘質シルト
69 (遺構320・最下層)　黒色+明黄褐色(黄小ブロック僅か)+灰色(小ブロック粒僅か)　シルト
70 (遺構320・下層)　黒色+にぶい黄色(黄小砂ブロック少し)　シルト
71 (遺構348②・上層)　灰白色+にぶい黄色+黄褐色+黄灰色+暗灰黄色　砂質シルト
72 (遺構348②・下層)　黄灰色(薄茶)+黒褐色+黄褐色(黄ブロック入る)　シルト
73 (遺構348①・中層)　黒褐色+黄褐色(黄ブロック)混る　粘質シルト
74 (遺構相当層)　黒褐色(茶ブロック)+灰黄色(砂混じる)+黄褐色(黄ブロック)　粘質シルト
75 (遺構相当層)　黒褐色(茶ブロック)+黄褐色(黄小ブロック)　砂混じり粘質シルト
76 (遺構377②・上層)　黒褐色(茶ブロック塊)+黄褐色(黄ブロック)+灰黄色(砂)　砂混り粘質シルト
77 (遺構377②・下層)　(上層)黒色+　(下層)黄褐色(黄ブロック)+黄灰色(砂ブロック)　粘質シルト
78 (遺構377②・最下層)　オリーブ灰色+(鉄分含む)+黄灰色(薄茶ブロック粒少し)　粘質土
79 (遺構377①・上・中層)　暗灰黄色+黒褐色(茶小ブロック少し)+黄褐色(黄小ブロック少し)+
砂ブロック土混じる砂混り粘質シルト
80 (遺構377①・下層)　黄褐色+(鉄分含む)+黄灰色　粘質シルト
81 (遺構377①・周縁層)　灰黄色(黄ブロック)+灰白(砂)　砂混り粘質シルト
82 (遺構398)　黒色(黒茶ブロック塊多い)+黒褐色(茶ブロック)+青灰色(地山ブロック少し)+黄褐色
(黄小ブロック少し)　各フメ゛ロック土混在ずる　粘質シルト
83 (遺構402.403上層)　黄灰色(砂)+灰黄色(黄小ブロック粒少し)　砂質土
84 (遺構403)　黒褐色+黄褐色(黄小ブロック粒少し)+青灰色(地山小ブロック粒下層少し)粘質シルト

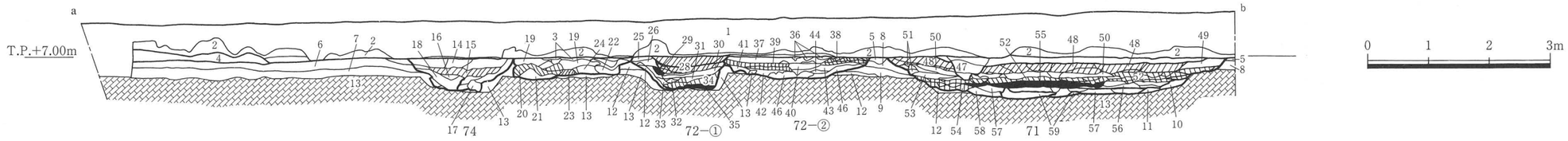
図12　2区・3区北壁断面図



2区・3区　南壁断面　土色

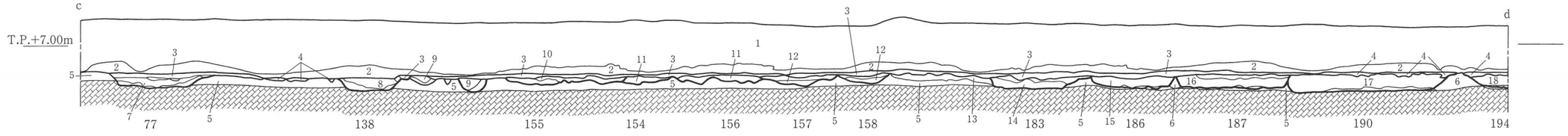
1（盛土）　黄褐色　（粗）砂レキ土
2（耕土）　灰色＋オリーブ黒色　砂（レキ）混じり粘質シルト
3（床土）　暗灰黄色orにぶい黄色　砂質シルト
4（包含層）　灰色＋灰黄色（10%以下）　砂混じり粘質シルト
5（包含層）　暗灰黄色粘質シルト（鉄分含む）　or　オリーブ褐色粘質シルト
6（包含層）　黒褐色（茶）＋オリーブ黒色＋にぶい黄色（キ小ブロック粒僅かに入る）　小ブロック混在する粘質シルト
7（地山直上）　黄灰色＋にぶい黄色（Fe非常に多い）　or　暗灰黄色＋黄灰色粘質土
8（地山層）　黄灰色粘質土　（上層鉄分含む）＋灰色or緑灰色（地山ブロック）＋明黄褐色（キブロック上層に少し入る）粘質土
9（遺構71）　2.5Y3／2黒褐色（茶90%）＋2.5Y5／4黄褐色（キ10%・下層に入る）粘質シルト
10（遺構相当層）　10Y5／1灰色＋2.5Y6／3にぶい・黄色（僅かに入る）シルト
11（遺構89・上層）　オリーブ褐色　砂混じり（粘質）シルト　（薄茶ブロック混じる）
12（遺構90・中・下層）　黒褐色（茶）＋にぶい黄色（キ小ブロック10%）＋黄灰色（薄茶30%）　小ブロック土多く含む　粘質シルト
13（遺構135）　黒褐色（茶ブロック）＋黄灰色（キ小ブロック僅か）＋黄褐色（キ小ブロック僅か）＋黒色（黒茶）＋暗灰黄色（砂混じりシルトブロック）　各ブロック土混在する砂混じり粘質シルト
14（遺構相当層）　黄褐色（キブロック土）＋黒褐色（茶ブロック土）＋緑灰色（砂混じりブロック）　各ブロック土混在する　砂混じり粘質シルト
15（遺構相当層）　黒色（黒茶）＋灰黄色（キ小ブロック少し）＋オリーブ褐色（キ小ブロック僅か）＋灰白色（灰白ブロック少し）各小ブロック土少し混じる粘質シルト
16　黄灰色粘質シルト　（地山ブロック）
17（遺構相当層）　暗灰黄色（薄茶）＋黒褐色（茶）＋にぶい黄色（キ小ブロック僅かに入る）＋灰色（地山ブロック少し入る）　粘質シルト
18（上層溝）　明黄褐色＋暗灰黄色（茶小ブロック少し入る）　粘質シルト
19（遺構131・上層）　黒褐色（茶）＋オリーブ褐色（鉄分粒含む）＋暗灰黄色（キブロック土わずかに含む）　粘質シルト
20（遺構132・中層）　黒褐色＋暗灰黄色（キブロック土わずかに含む）　シルト
21（遺構133・下層）　灰黄色＋にぶい黄褐色（キ小ブロック）＋黒褐色シルト　（白灰シルト帯状に入る）　粘質土
22（遺構131・周縁層）　黒色シルト
23（遺構132・周縁層）　黄褐色粘質シルト　（キブロック土）
24（遺構134・最下層）　オリーブ灰色（地山ブロック）＋黄褐色（キブロック土）＋にぶい黄褐色シルト　（灰黄色シルト帯状に入る）
25（遺構50）　黒褐色（茶ブロック土）＋黄褐色（キブロック土40%）＋オリーブ褐色（キブロック土）　小ブロック混在する粘質シルト
26（遺構相当層）　灰色（地山ブロック）＋にぶい黄色（キ小ブロック少し含む）　粘質シルト
27（遺構相当層）　黒褐色（茶ブロック土多い）＋明黄褐色（キ大ブロック50%）＋黄褐色（キ小ブロック少し）＋黄灰色（薄茶）ブロック土多く混じる粘質シルト
28（遺構相当層）　黒褐色（茶）＋にぶい黄色（キブロック）＋暗灰黄色（薄茶）　ブロック土混じる粘質シルト
29（遺構相当層）　黄褐色＋黒褐色（茶ブロック30%）＋オリーブ褐色（キブロック流状に多く入る）＋にぶい黄色　粘質シルト
30（遺構相当層）　暗灰黄色（薄茶）＋黄灰色＋にぶい黄色（キブロック少し30%）　粘質シルト
31（遺構相当層）　黒褐色（茶）＋灰色（灰ブロック少し）　（粘質）シルト
32（盛土）　2.5Y3／3暗オリーブ褐色シルト
33（地山層）　緑灰色＋灰色（小ブロック少し混じる）　粘質土　（鉄分含む）
34（畦畔）　暗灰黄色＋黄灰色＋オリーブ灰色粘質土　（鉄分多い）
35　灰色＋オリーブ褐色（鉄分含む）　細砂・粗砂混じり粘質シルト
36　青灰色＋2.5Y6／3にぶい黄色（鉄分多い）　シルト　（下層細砂含む）
37　青灰色（上層鉄分少し）　砂レキ混じりシルト
38　青灰色＋にぶい黄色　細砂混じりシルト
39（地山層）　青灰色（上層鉄分少し）　小石混じりシルト
40（溝内堆積土）　オリーブ黒色＋暗灰黄色　細砂混じり砂質シルト
41（遺構140）　暗灰黄色＋黒褐色＋灰黄色（小ブロック）＋黄褐色（キブロック）　各ブロック土混じる　砂質シルト
42（遺構141・他）　黒褐色（黒ブロック土）＋黄灰色（灰ブロック土）＋黄褐色（キブロック土）　各小ブロック土混在する　粘質シルト
43（遺構145）　黒褐色（黒茶ブロック土）＋黄灰色（キブロック土）　各大ブロック土混在する　粘質シルト
44（遺構146・他）　黒色（黒ブロック）＋黒褐色（黒茶ブロック）＋黄灰色（灰ブロック）＋黄褐色（キブロック）　各ブロック塊多く混在する　粘質シルト
45（遺構224・他）　黒色＋黒褐色（茶ブロック土）＋黄褐色（キブロック土）　各大ブロック塊混在する　粘質シルト
46（遺構225）　黒褐色（黒茶ブロック土）＋黄灰色（キブロック少し）＋黄灰色（黄灰ブロック）　（下層に黒色ブロック土堆積）各ブロック塊混在する粘質シルト
47（遺構相当層）　黒色粘質シルト
48（遺構相当層）　黒色＋にぶい黄褐色（キ小ブロック）＋黄灰褐色（茶ブロック）　各ブロック土混じる　粘質シルト
49（遺構235・上層）　黒褐色＋暗灰黄色（茶ブロック）＋黄褐色（キ小ブロック）　各小ブロック土混在する　粘質シルト
50（遺構236・中層）　黄褐色（キ小ブロック土）＋暗オリーブ灰色（茶ブロック）＋茶黄褐色（薄茶ブロック）　小ブロック土多く混在する　粘質シルト
51（遺構237・下層）　黒色＋黄褐色（キブロック土）＋暗灰黄色（黄灰ブロック）　各ブロック土混在する　粘質シルト
52（遺構243・他）　黒褐色＋灰オリーブ色（灰ブロック）＋黄褐色（キブロック少し）　各ブロック土混じる（層状に堆積）　粘質シルト
53（遺構337・他）　黒褐色・暗灰黄色＋にぶい黄褐色＋灰黄色＋地山ブロック他　各小ブロック土多く混在する　粘質シルト
54（遺構366・他）　にぶい黄色（砂ブロック）＋暗灰黄色（薄茶ブロック）＋黄灰色（小ブロック）＋黄褐色（キブロック）＋黒褐色（茶ブロック）＋灰オリーブ色（ブロック土）　各ブロック土混在する　砂混じり粘質シルト
55（遺構385・他）　暗灰黄色（キ小ブロック）＋黒褐色（茶ブロック）＋黄灰色（ブロック土）＋灰白色（灰白小ブロック）　各小ブロック混在する砂質シルト
56（遺構相当層）　黄灰色（ブロック土）＋黒褐色（茶小ブロック）＋暗オリーブ褐色（キブロック）＋黄褐色（砂ブロック）＋地山ブロック土砂混じり粘質シルト
57（遺構相当層）　黄褐色＋オリーブ褐色＋黄褐色（薄茶ブロック少し）＋2.5Y7／1灰白色（黄小ブロック少し）＋鉄分粒含む　砂混じりシルト

図13　2区・3区南壁断面図



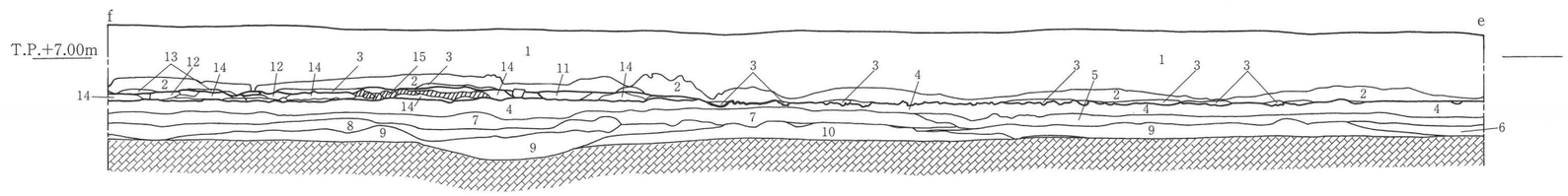
2区　東壁断面　土色

1（盛土）　黄褐色砂レキ土
2（旧耕土）　オリーブ黒色粘質シルト　（小砂粒少し混じる）
3（溝内埋土）　黄褐色　及びオリーブ黒色砂混じり粘質シルト
4（包含層）　黄褐色（砂混じり）粘質シルト　（中世遺物含む）
5（包含層）　黒褐色（茶）＋にぶい黄色（キブロック50%）シルト
6（地山直上層）　にぶい黄色砂混じり粘質シルト　（Fe_2キブロック含む）
7（地山直上層）　にぶい黄色＋灰色砂混じり粘質シルト　（Fe）
8（地山直上層）　明黄褐色（キブロック）シルト
9（地山直上層）　黄褐色（キブロック30～40%）＋黄灰色シルト　（Fe多い）
10（地山直上層）　暗灰黄色（薄茶）＋にぶい黄色（キブロック塊80%）粘質シルト
11（地山直上層）　暗灰黄色（薄茶）＋にぶい黄色（キブロック）＋灰白色（灰白シルト）砂混じり粘質土
12（地山層）　灰色＋黄褐色（キブロック土・Fe粒少し入る）粘質土
13（地山層）　灰色及び灰オリーブ色粘質土　（Fe）
14（遺構内）　暗灰黄色＋黒褐色（茶小ブロック30%）砂混じりシルト
15（遺構内）　黒色＋黄褐色シルト　（茶ブロック土90%含む）
16（遺構内）　オリーブ褐色＋黄褐色（キブロック50%）砂混じりシルト
17（遺構内）　黒褐色（茶粘土ブロック含む）砂混じりシルト
18（遺構内）　黄褐色＋黄灰色粘質シルト　（キブロック上方に含む）
19（遺構内）　にぶい黄色（キブロック80%）＋暗灰黄色（茶ブロック少し）砂混じり粘質シルト　（マーブル状に入る）
20（遺構内）　黒褐色（黒茶）＋オリーブ褐色（黄茶）＋にぶい黄色（キブロック僅かに含む）粘質シルト
21（遺構内）　オリーブ褐色砂質土
22（遺構内）　黒褐色（茶ブロック70%）＋オリーブ黒色（茶20%）＋オリーブ黄色（キ小ブロック10%含む）粘質シルト
23（遺構内）　オリーブ黒色（黒茶80%）＋オリーブ色（キブロック20%）粘質シルト
24（遺構内）　灰オリーブ色（粘土ブロック10%）＋2オリーブ黒色＋オリーブ色（キ小ブロック土混じる）粘質シルト
25（遺構内）　オリーブ黄色（キブロック70%）＋暗灰黄色（茶）＋Fe　粘質シルト
26（遺構内）　暗灰黄色＋黄褐色（キ小ブロック）粘質シルト
28（遺構内）　黒褐色＋黄褐色（キ小ブロック及びブロック粒）＋黄灰色（所により灰白小ブロック粒含む）　粘質シルト
29（遺構内）　黄褐色（明キブロック）＋黒褐色（茶ブロック）ブロック混在する粘質シルト
30（遺構内）　黄灰色及び黒褐色（茶ブロック）＋黄褐色（キ小ブロック）＋黄灰色（灰白シルト帯状に入る50%）シルト
31（遺構内）　黒褐色（茶）＋暗灰黄色＋明黄褐色（キブロック少し）シルト
32（遺構内）　明黄褐色（キブロック）＋黒褐色（茶ブロック上層少し）粘質シルト
33（遺構内）　黒褐色（茶ブロック）＋黄褐色（キ小ブロック）＋明黄褐色（キブロック）＋黄灰色（地山ブロック混じる）粘質シルト
34（遺構内）　暗灰黄色（茶ブロック）＋暗灰黄色（キ小ブロック）＋明黄褐色（明キ小ブロック）（互層を成す）粘質シルト
35（遺構内）　オリーブ灰色（地山層）＋黒褐色（上層に帯状に薄く入る）粘質シルト
36（遺構内）　暗灰黄色（茶）＋オリーブ黒色（黒茶）＋にぶい黄色（キ小ブロック）（各ブロック土入る）　シルト
37（遺構内）　黄灰色＋オリーブ黒色（茶ブロック）＋オリーブ黄色（キブロック多い）シルト
38（遺構内）　にぶい黄色（キ小ブロック）＋灰黄色（灰白ブロック少し）＋暗灰黄色及び黒褐色（茶小及びブロック土）シルト
39（遺構内）　黒褐色（茶）＋暗灰黄色（キブロック15%以下）砂混じり粘質シルト
40（遺構内）　暗灰黄色（茶ブロック土）＋灰黄色（灰白小ブロック含む）粘質シルト
41（遺構内）　明黄褐色（明キブロック）＋黒褐色（小ブロック僅か）シルト
42（遺構内）　暗灰黄色（茶）＋黄褐色（キ小ブロック少し）砂質シルト
43（遺構内）　黒褐色（茶）＋暗灰黄色（キブロック僅か）＋オリーブ黄色（キブロック下層に入る）　砂混じり粘質シルト
44（遺構内）　黒褐色（茶）＋にぶい黄色（キ小ブロック互層を成す）シルト
45（遺構内）　にぶい黄色（キ）＋黒褐色（茶ブロック流状に僅かに入る）シルト
46（遺構内）　暗灰黄色（キブロック70%）＋にぶい黄色＋黄灰色（茶ブロック僅かに混じる）（粘質）シルト
47（遺構内）　黒褐色（茶）＋黄褐色（キブロックまだらに入る）上層に小砂混じる粘質シルト
48（遺構内）　黒褐色（茶）＋にぶい黄色（キ小ブロック少し）＋オリーブ黄色（キブロック少し）＋暗灰黄色（白灰シルト僅かに入る）粘質シルト（所により小石混じり・灰黄シルト下層に帯状に入る）
49（遺構内）　オリーブ黒色＋オリーブ黄色（キブロック70%）砂混じり粘質シルト
50（遺構内）　黒褐色（茶ブロック）＋黒色（黒茶ブロック土）＋黄褐色（キブロック多く含む）＋黄灰色（黄灰シルト）シルト
51（遺構内）　黒褐色（茶ブロック）＋にぶい黄色（キブロック粒）＋黄灰色（灰白色小粒含む）シルト
52（遺構内）　黒褐色（茶）＋暗灰黄色（灰白シルト・ブロック状及び流状に入る）＋にぶい黄色（キブロック粒少し）（下層に砂混じる）シルト
53（遺構内）　黒色（黒茶）＋にぶい黄色（キブロック少し）シルト
54（遺構内）　黒褐色（茶）＋明黄褐色（キブロック多い）シルト
55（遺構内）　黒色（黒茶）＋暗灰黄色（白灰小ブロック少し）＋（キ小ブロック粒僅かに入る）粘質シルト
56（遺構内）　黒色（黒茶）＋オリーブ色（黒茶）＋明黄褐色（キブロック少し）＋灰白色（灰白シルト少し入る）粘質土
57（遺構内）　暗灰黄色（薄茶）＋黒褐色（茶）＋にぶい黄色（キブロック多い）砂混じり粘質シルト
58（遺構内）　黒色（黒茶）＋オリーブ黒色（薄茶）＋明黄褐色（キ小ブロック少し）砂混じり粘質土
59（遺構内）　黄灰色＋黄褐色（キブロック30%）＋暗灰黄色（灰黄色小ブロック30%）粘質シルト



2区　西壁断面　土色

1（盛土）　黄褐色砂レキ土
2（旧耕土）　灰色砂（レキ）混じり粘質シルト
3　灰色＋灰白色（灰白小ブロック）＋にぶい黄色（キ小ブロック粒）　小ブロック少し混じる砂混じりシルト
4（包含層）　黄灰色＋黒褐色（茶小ブロック少し）＋　キ小ブロック粒　シルト
5（地山直上層）　黄灰色粘質土　（明黄色全体に入る）
6（畦畔状盛土）　暗灰黄色＋にぶい黄色（キブロック少し）＋緑灰色（地山ブロック）砂レキ混じり土
7（遺構内）　黄灰色＋黒褐色（茶小ブロック少し）シルト
8（遺構内）　灰色（地山ブロック）＋暗灰黄色（薄茶小ブロック）＋オリーブ褐色（キ小ブロック）　小ブロック多く含むシルト
9（遺構内）　灰色＋キ・薄茶小ブロック少し混じる　シルト
10（遺構内）　黄灰色（薄茶50%）＋灰色（地山ブロック10%）＋にぶい黄色（キ小ブロック30%）ブロック土多く含むシルト
11（遺構内）　黄灰色（薄茶）＋黄灰色（茶）＋（Fe）　小ブロック僅かに含む　シルト
12（遺構内）　黒褐色（茶）＋灰色（地山ブロック）＋灰黄色（キブロック）　ブロック土多く混じる粘質シルト
13（遺構内）　黄褐色（薄茶）＋灰黄色（キ）＋明黄褐色（キ小ブロック）＋地山灰色ブロック　各ブロック土多く混じる粘質シルト
14（遺構内）　黒褐色（茶小ブロック）＋明黄褐色（キ小ブロック）＋黄灰色（薄茶小ブロック）＋地山灰色ブロック　ブロック土多く混じる粘質シルト
15（遺構内）　灰黄色＋黄褐色（キブロック）＋Fe　砂混じり粘質シルト
16（遺構内）　にぶい黄色＋暗灰黄色（茶ブロック）＋黄褐色＋黄褐色（キ小ブロック）　砂混じるシルト
17（遺構内）　暗灰黄色（下層・茶ブロック）＋黄褐色（キブロック混じる）　砂混じりシルト
18（遺構内）　黒色（黒茶ブロック）＋灰黄色粘質シルト



3区　西壁断面　土色

1（盛土）　10YR5／6黄褐色　（粗）砂レキ土
2（旧耕土）　10Y3／1オリーブ黒色　（砂レキ混り）　シルト
3（床土）　7.5Y4／1灰色（砂）＋2.5Y7／2灰黄色（黄小ブロック粒少し）砂質土
4　2.5GY6／1オリーブ灰色or10BG6／1青灰色粘質土　（鉄分含む）
5　2.5GY5／1オリーブ灰色or10BG6／1青灰色　砂混り粘質シルト　（鉄分多い）
6　10BG6／1青灰色　砂混リシルト　（鉄分少し）
7　10BG6／1青灰色　小砂混り（粘質）シルト　（上層鉄分多い）
8　10BG6／1青灰色　シルト　（下層細砂）（鉄分多い）
9　10BG6／1青灰色　細砂混リシルト　（鉄分少し）
10（河川内堆積）　10BG6／1青灰色　砂レキ混リシルト　（鉄分少し）
11（溝内堆積土）　2.5Y4／1黄灰色＋2.5Y7／2灰黄色（黄砂ブロック多い）　（砂少し混る）粘質シルト
12（溝内堆積土）　2.5Y4／2暗灰黄色＋2.5Y3／3暗オリーブ褐色　砂混り粘質シルト
13（包含層）　5Y5／1灰色＋2.5Y7／2灰黄色（黄小ブロック）　（砂僅かに混る）粘質シルト
14（包含層）　2.5Y4／1黄灰色＋2.5Y6／1黄灰色（薄茶ブロック少し）＋2.5Y7／1灰白色（黄小ブロック少し）＋鉄分粒砂混り粘質シルト
15（包含層）　2.5Y4／1黄灰色＋2.5Y7／2灰黄色（黄砂小ブロック）＋2.5Y6／1黄灰色（薄茶ブロック）＋10Y3／1オリーブ黒色各ブロック混在する　粘質シルト

図14　2区・3区東壁・西壁断面図

3）４区の調査　（図15・16・17・PL－１～４）

４区は調査地の南側に位置するおおむね南北方向18m、東西方向13mの方形を示す調査区で、集会場に当たる。４区では、粘土採掘坑と井戸などを検出した。

盛土下の旧耕土層は、南東側が高くT.P.＋7.80mを測る。調査区中央部から北西側は段を成して低くなる様相を示し、T.P.＋7.20mを測る。調査区の南東端部（南側壁断面）では、１区および２区から延びる畦畔Bが確認できる。旧耕土層下は、中世代の整地土層、包含層がみられる。包含層は、瓦器椀片、瓦片、土師器片、瓦質土器片などの細片を含む暗オリーブ褐色粘質シルトで、約５cmを測る。北西部の低地部分では包含層の上層部が削平されており、層厚は２～３cmである。４区における粘土採掘坑は、主に中世代に掘削され、整地された後耕作地化されたものと考えられる。

調査区からは、方形木枠をもつ井戸（井戸430）や素掘りの井戸（井戸423）が出土した。

木枠をもつ井戸430は、井戸の掘り方の下層部の周囲に厚さ２～３cm、幅10～20cm程の縦板を方形上に打設して土留めとし、中段部には約10cm大の丸太を横に並べて、その上に割り板を直行させるように敷き並べて上面を平らにしている。さらに、その上に方形の枡状の井戸枠を設置する構造を呈す。井戸枠の上部には、数枚の割り板がふたをするように配置されていたことから、この地が住宅用地として整地・盛土されるまで活用されていたものと思われる。掘削中においても常に水が湧き出ていたため、最深部まで確認できなかった。井戸内埋土からは、瓦片、陶磁器片、瓦質すり鉢片、堺焼すり鉢片など多くの近世代の生活雑貨が多く出土した。

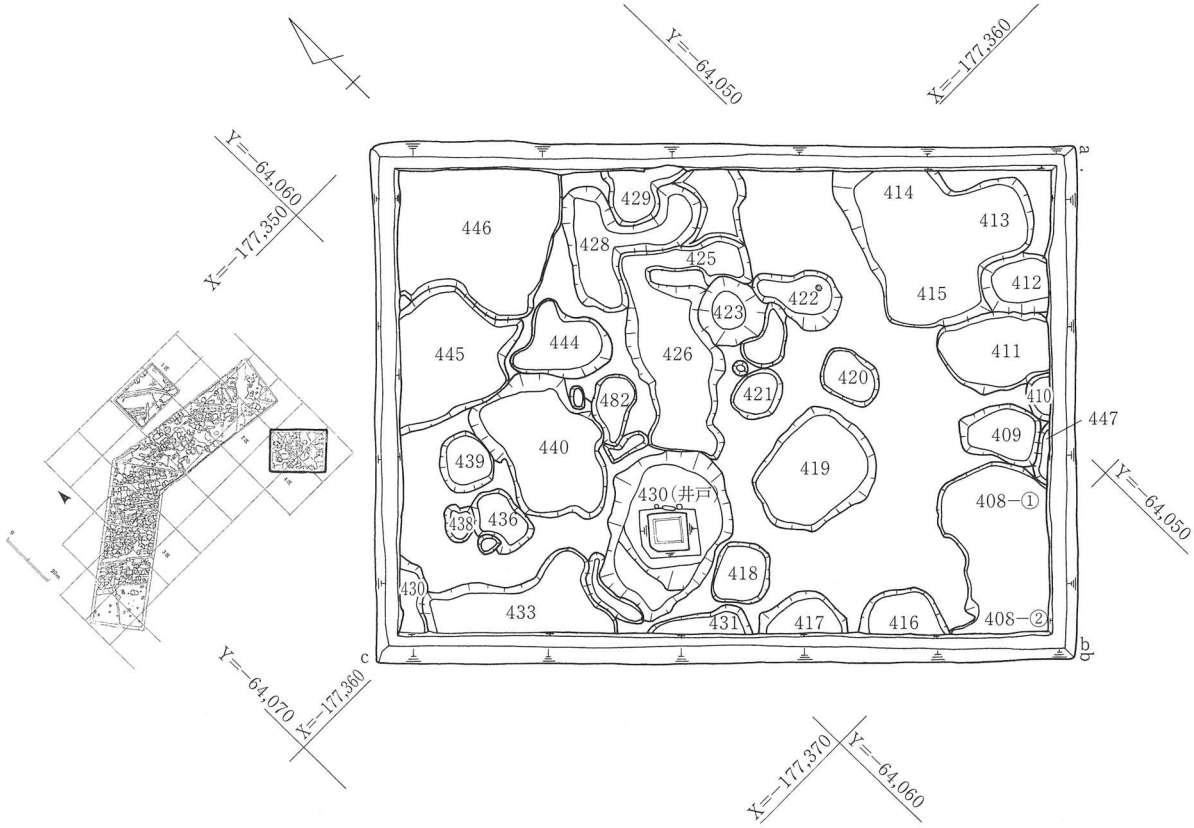
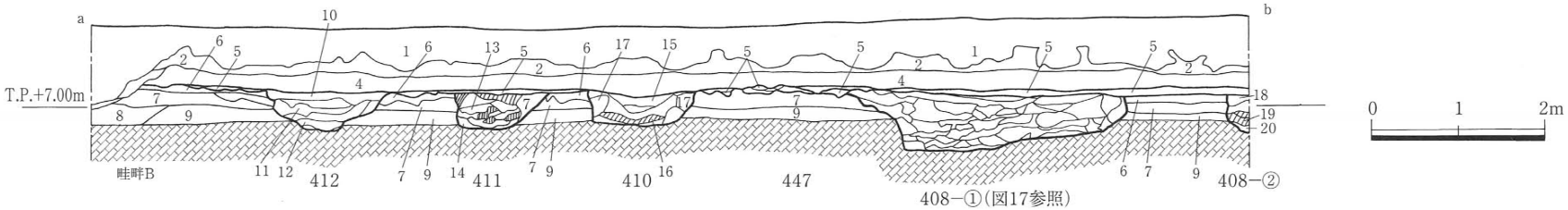
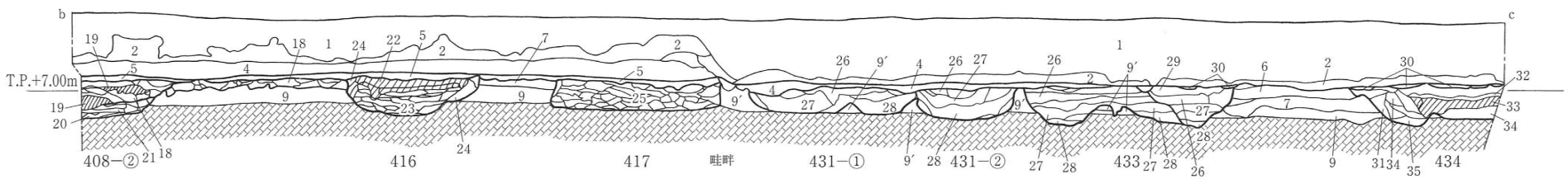


図15　４区遺構全体図



4区　南壁断面　土色

1（盛土）　黄褐色砂レキ混じり土
2（旧耕土）　オリーブ黒色砂質シルト
3（旧耕土）　暗灰黄色砂質シルト
4　灰黄色粘質シルト（鉄分多い）
5（包含層）　黒褐色粘質シルト（鉄分多い）
6　灰黄色（キ小ブロック土少し含む）粘質シルト（鉄分含む）
7　暗灰黄色（キ小ブロック土含む）粘質土（鉄分含む）
8　黄灰色粘質シルト（鉄分含む）
9　オリーブ灰色粘質シルト（鉄分含む）
10（遺構412）　黒褐色＋黄褐色（キ小ブロック少し）粘質シルト
11（遺構412）　黒色＋黄褐色（キ小ブロック土多い）粘質シルト
12（遺構412）　黒色粘質シルト
13（遺構411）　黒色（黒茶ブロック土）＋黄褐色（キブロック土）各大ブロック土混在する　粘質シルト
14（遺構411）　暗灰黄色＋黄灰色　シルト（鉄分含む）
15（遺構410）　黒褐色＋黄褐色（キ小ブロック粒僅か）粘質シルト
16（遺構410）　黒色＋黄褐色（キ小ブロック土多い）粘質シルト
17（遺構410）　暗灰黄色＋黄褐色（キ小ブロック）粘質シルト
18（遺構408②）　黒褐色＋黄褐色（キブロック土多い）粘質シルト
19（遺構408②）　黒色＋黄褐色（キ小ブロック土僅か）粘質シルト
20（地山層）　灰白色粘質シルト（鉄分含む）



4区　西壁断面　土色

1（盛土）　黄褐色砂レキ混じり土
2（旧耕土）　オリーブ黒色砂質シルト
3（旧耕土）　暗灰黄色砂質シルト
4　灰黄色粘質シルト（鉄分多い）
5（包含層）　黒褐色粘質シルト（鉄分多い）
6　灰黄色（キ小ブロック土少し含む）粘質シルト（鉄分含む）
7　暗灰黄色（キ小ブロック土含む）粘質土（鉄分含む）
8　黄灰色粘質シルト（鉄分含む）
9（地山層）　オリーブ灰色粘質シルト（鉄分含む）
9′（地山層）　オリーブ灰色シルト
18（遺構408②・上層）　黒褐色＋黄褐色（キブロック土多い）粘質シルト
19（遺構408②・中層）　黒色＋黄褐色（キ小ブロック土僅か）粘質シルト
21（遺構408②・下層）　粘質シルト
20（地山層）　灰白色粘質シルト（鉄分含む）
22（遺構相当層）　黒褐色＋黄褐色（キブロック土）＋灰黄色（キ小ブロック）各ブロック混じる粘質シルト
22（遺構416・上層）　黒色・黒褐色（黒茶ブロック層）粘質シルト
23（遺構416・中・下層）　黒色・黒褐色（黒茶ブロック土）＋黄褐色（キブロック土）＋褐灰色（黄灰ブロック土）各大ブロック土混在する　粘質シルト
24（遺構416・周縁層）　灰黄色・黄褐色（キブロック土多い）＋黒褐色　粘質シルト
25（遺構417・全体）　黒褐色（茶ブロック土）＋黒色（黒茶ブロック土）＋黄褐色（キブロック土）＋灰黄色（灰キブロック土）＋暗灰黄色（茶ブロック土）各大ブロック土多く混在する　粘質シルト
26（遺構431他・上層）　暗灰黄色（砂ブロック土）＋黄褐色（キ小ブロック）砂質土
27（遺構431他・中層）　暗灰黄色（砂ブロック土）＋黄褐色（キブロック土）＋黒色（黒茶ブロック土）各ブロック土混在する　砂混じり粘質シルト
28（遺構431他・下層）　暗灰黄色（砂ブロック土）＋暗オリーブ褐色（茶ブロック土）砂混じり粘質シルト
29（遺構433・上層）　黒色＋黄褐色（キ小ブロック土僅か）粘質シルト
30（遺構434・最上層）　黒褐色＋灰黄色（キ小ブロック）砂混じり粘質シルト（鉄分含む）
31（遺構434・周縁層）　黄灰色＋黄褐色（キブロック土）　粘質土
32（遺構434・上層）　黒色＋黄褐色（キ小ブロック帯状に薄く入る）粘質シルト
33（遺構434・中層）　黒色粘質シルト（鉄分含む）
34（遺構434・周縁〜下層）　黒色＋黄褐色（キ小ブロック土）＋灰黄色（ブロック土）ブロック土混在する粘質シルト
35（遺構434・最下層）　オリーブ褐色＋暗灰黄色（ブロック土）粘質シルト

図16　4区南壁・西壁断面図

素掘りの井戸423は、検出径が約２m、深さ約1.1mを測り、すり鉢状を呈す。井戸内埋土からは、土師器片、瓦器椀片などの細片が出土した。中世代のものと思われる。

遺構422は小規模の楕円形を呈す粘土採掘坑で、遺構内底部からほぼ完形の土師器皿が1点出土した。皿の口縁部には孔穴がみられた。遺構内のほぼ中央部から出土していることから、おそらく埋め戻しの際に埋納、設置したものと思われる。

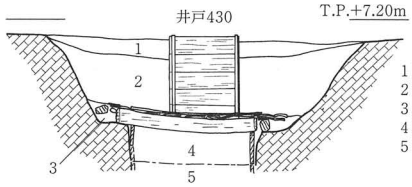
４区で検出した粘土採掘坑は、一定区画内で無作為に掘削したものと思われるもので、形状や大きさは一定ではなく（ⓑ）、方形状や楕円形状の土坑がいくつか近接している状況がうかがえる。１辺３m以上の方形あるいは長方形状のもの（Ⓐ）、あるいは、長径約１～３mでやや不定形な楕円形状のもの（Ⓓ）が主であるが、中には、長径１m程度の不定形な楕円形状を呈す小型の粘土採掘坑もみられた。埋土は、砂ブロック土および砂を含むもの（②）、各種ブロック土を含む層が水平堆積を示し、特に下層付近で黒褐色・黒色粘質シルトが帯状に入るもの（③）がみられた。

４区では、多くの粘土採掘坑の他に井戸を検出した。他の調査区では、井戸に相当する遺構は確認できなかった。粘土を採掘する区画だけでなく、生活エリアが周辺に存在するものと推測される。おそらく、調査区の南側地域に集落が存在するものと思われる。

４）検出遺構　（図17）

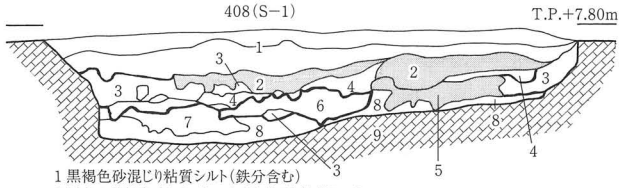
検出された粘土採掘坑の中でも、その埋土として下層付近で黒褐色・黒色粘質シルトが帯状に入るもの（③）が顕著にみられた。調査地周辺では、黒褐色・黒色粘質シルト層が粘土採掘坑内以外で堆積する状況はみられなかった。そこで、黒褐色・黒色粘質シルト層について自然科学分析にかけることにした。各サンプルの採取箇所については下記の表のとおりである。また、分析の結果については、第４章　２．に掲載している。

サンプル	調査区	遺構番号	土　　層	形状	掘り方	埋土
S－1	４区	遺構408	2黒色＋黄褐色（キ小ブロック少し入る）粘質シルト	A	イ	③
S－2	４区	遺構438	5黒色粘質シルト	D	ウ	②
S－3	４区	遺構444	7黒色＋灰黄色（小ブロック多い）シルト	C	ウ	③
S－4	３区	遺構160	5黒色＋灰黄色（小ブロック僅か）粘質シルト	D	ウ	③
S－5	３区	遺構233	5黒色＋灰黄色（小ブロック土混じる）シルト	B	イ	③
S－6	３区	遺構251	4黒色粘質シルト	B	ア	①
S－7	３区	遺構315	5黒色＋灰黄色（ブロック土混じる）粘質シルト	B	ウ	③
S－8	３区	遺構303	4黒色＋灰黄色（小ブロック少し入る）粘質シルト	D	イ	①
S－9	３区	遺構351	6黒色＋灰黄色（流状に入る）粘質シルト	D	ウ	③
S－10	３区	遺構403	2黒色＋暗灰黄色（小ブロック粒入る）粘質シルト	D	オ	①

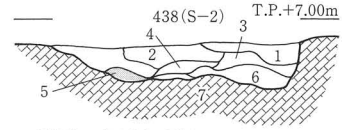


1 灰黄色+褐色砂質土(こぶし大のレキ入る・鉄分含む)
2 黄灰色+オリーブ黒色砂レキ混じりシルト
3 黒褐色レキ混じり粘質シルト
4 灰色砂レキ土(こぶし大レキ混じる)
5 緑灰色砂レキ土(湧水層)

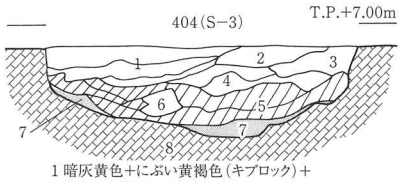
0　2m



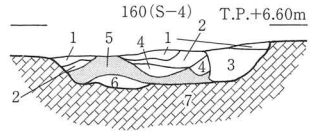
1 黒褐色砂混じり粘質シルト(鉄分含む)
2 黒色+黄褐色(キ小ブロック少し入る)粘質シルト
3 黄褐色(キブロック土)+黄灰色(ブロック土)砂混じり粘質シルト
4 黒色+黄灰色(小ブロックわずかに入る)+灰黄色(流状に入る)粘質シルト
5 黒色+黄灰色(小ブロック多く入る)粘質シルト
6 黒色+黄灰色(キブロック土多い)+黄灰色(ブロック土多い)粘質シルト
7 黒色+黄灰色(キブロック土)+灰黄色(ブロック土)(各ブロック土混在する)粘質シルト
8 黒色+灰白色(ブロック土)+黄褐色(キブロック土)粘質シルト
9 暗緑灰色粘質シルト(地山層)



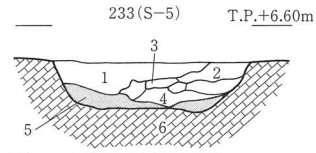
1 黒褐色+暗灰黄色砂質土
2 黄灰色+黄褐色(小ブロック入る)砂質土
3 黒色+暗灰黄色(砂ブロック)砂混じり粘質シルト
4 黄褐色+黒色(小ブロック少し入る)砂質土
5 黒色粘質シルト
6 にぶい黄色+緑灰色(地山ブロック混じる)
砂混じり粘質シルト
7 暗緑灰色粘質シルト(地山層)



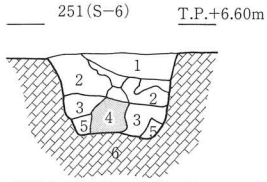
1 暗灰黄色+にぶい黄褐色(キブロック)+
黒褐色(茶ブロック)粘質シルト
2 黄灰色+黄褐色(キブロック少ない)粘質シルト
3 黒褐色+黄褐色(キブロック土多い)粘質シルト
4 黒褐色+灰黄色(小ブロック入る)粘質シルト
5 黒色+黄灰色(ブロック土入る)粘質シルト
6 黄褐色(キブロック土)粘質シルト
7 黒色+灰黄色(小ブロック多い)シルト
8 暗緑灰色粘質シルト(地山層)



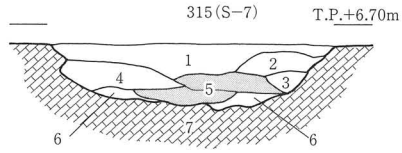
1 黒褐色+黄褐色(キブロック入る)
砂混じり粘質シルト
2 黒褐色+黄灰色(ブロック土)粘質シルト
3 黒褐色+灰白色(流状に入る)粘質シルト
4 黒色(ブロック土)+暗灰黄色
(砂シルト入る)粘質シルト
5 黒色+灰黄色(小ブロック土わずかに入る)
粘質シルト
6 黒色+灰黄色(ブロック土多く含む)シルト
7 暗緑灰色粘質シルト(地山層)



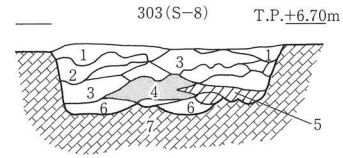
1 暗オリーブ褐色シルト(鉄分含む)
2 暗オリーブ褐色+灰黄色(ブロック土混じる)
シルト
3 黒色+暗灰黄色(小ブロック土混じる)シルト
4 暗灰黄色+灰黄色(ブロック土混じる)
粘質シルト
5 黒色+灰黄色(小ブロック土混じる)シルト
6 暗緑灰色粘質シルト(地山層)



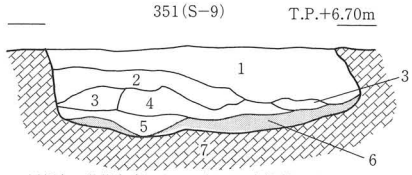
1 黒褐色+暗灰黄色粘質シルト
2 暗灰黄色+黄褐色(キブロック土混じる)
粘質シルト
3 黒褐色+灰黄色(灰黄色ブロック土含む)
粘質シルト
4 黒色粘質シルト
5 暗灰黄色+灰黄色(ブロック土含む)
粘質シルト
6 緑灰色シルト(地山層)



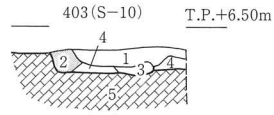
1 黒褐色+暗灰黄色粘質シルト
2 黄褐色(キブロック土)粘質シルト
3 暗灰黄色レキ混じり粘質シルト
4 黒色+黄灰色+灰黄色
(各ブロック土混在する)粘質シルト
5 黒色+灰黄色(ブロック土混じる)粘質シルト
6 黄灰色(ブロック土)+黒色粘質シルト
7 緑灰色シルト(地山層)



1 黄灰色+灰白色(小ブロック入る)粘質シルト
2 黒色+暗灰黄色(流状に入る)粘質シルト
3 黒褐色+黄褐色(キブロック多い)粘質シルト
4 黒色+灰黄色(小ブロック少し入る)粘質シルト
5 黒色+黄灰色(ブロック土多い)粘質シルト
6 黒褐色+にぶい黄褐色
(下層にキブロック帯状に入る)粘質シルト
7 緑灰色シルト(地山層)



1 黒褐色+黄褐色(小ブロック少し入る)粘質シルト
2 黄灰色+黄褐色(キブロック土混じる)粘質シルト
3 にぶい黄色+黄褐色(キブロック土)粘質シルト
4 黒褐色+黄灰色+暗灰色(各ブロック土混在する)粘質シルト
5 暗灰黄色+黄褐色(ブロック土含む)粘質シルト
6 黒色+灰黄色(流状に入る)粘質シルト
7 緑灰色シルト(鉄分含む)(地山層)



1 黒褐色(わずかに砂混じる)粘質シルト
2 黒色+暗灰黄色(小ブロック粒入る)粘質シルト
3 黄灰色シルト
4 黒褐色+黄灰色(キブロック土)粘質シルト
5 緑灰色シルト(鉄分含む)(地山層)

0　1m

図17　遺構断面図

4．出土遺物　（図18～23・表１・PL－５～８）

調査区内から出土した遺物は少なく、コンテナで10箱ほどであった。遺構内から出土したものは極めて少なく、また細片が多いため、実測に耐えられるものはほんの僅かであった。

出土遺物は、近世代の陶磁器碗、鉢類などの生活雑貨や瓦類などが主を成す。また、中国製青白磁片や瓦器椀、土師質皿、大小の土錘などもみられた。

調査区内から土錘（12・14～26・56～60・64・65）がいくつか出土した。おおむね長さ４cm前後、幅１cm前後のもの（14～20・56～60・64・65）が主を成すが、長さ４～５cm前後、幅４～５cm大の大型のもの（12・21～26）もいくつかみられた。21～25は土師質であるが、12、26は陶器製のものである。

中国製青白磁（33・34・80～85）は細片が多く実測に耐えられるものは僅かであったが、龍泉窯系の青磁碗がいくつかみられた。13～15世紀に相当する。33は外面に鎬蓮弁紋を呈す小碗で、13世紀代に相当する。34は内面口禿の白磁皿で、13世紀代に相当する。

１区からは陶磁器が多くみられた。５は瀬戸系白磁の稜皿である。６は伊万里染付の中皿で、裏面高台内に富・長の文字がみられる。「富貴長春」あるいは「長命富貴」と考えられる。17世紀代に相当する。

13は２区遺構23から単一で出土した土師器坏で、口径15.5cm、器高4.2cmを測る。磨耗が著しく調整は不明である。

30～32・52は口径約12cmを測る瓦器椀で、内面にらせん状の暗紋を施すもの（31・52）、粗雑な低い高台が付くもの（32）などがみられた。

37は紀州系の土師質土釜の口縁部で、14世紀中～後半頃に相当する。

46は波状紋を呈す土師質の面打である（第４章　２.）。中央部に穴を有する。

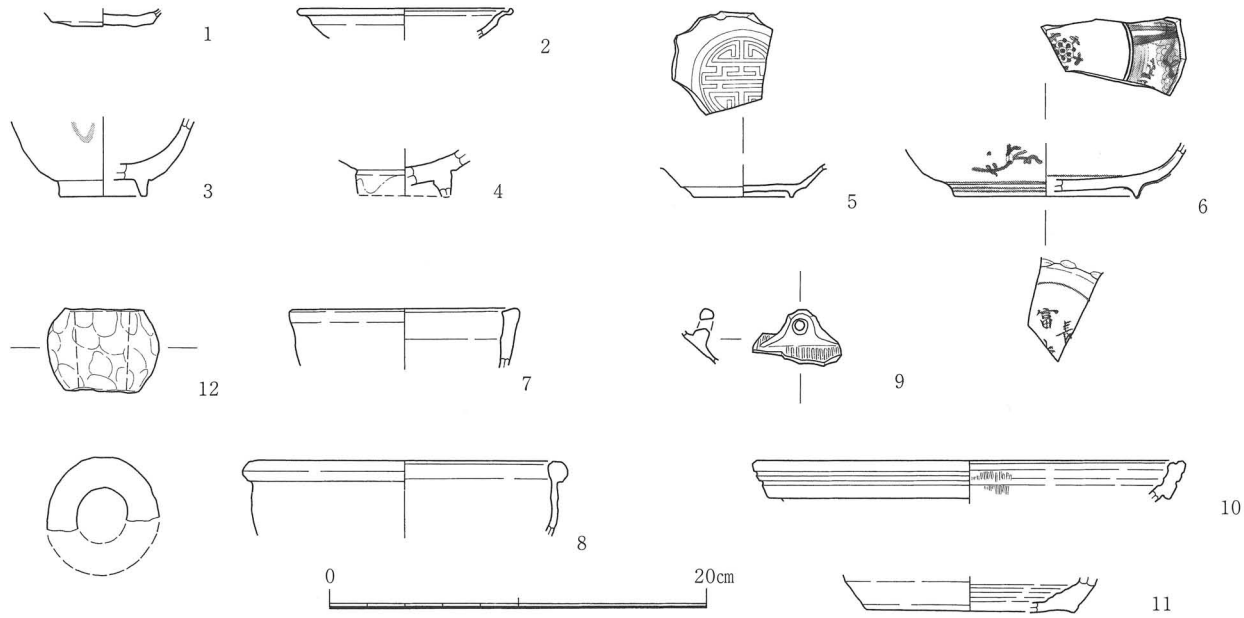


図18　１区出土遺物実測図

47は３区遺構351から出土した瓦器椀で、口径15cm、器高5.6cm、高台径5.0cmを測る。磨耗により調整は不明であるが、高く逆三角形を呈すしっかりした高台を有する。

61は３区遺構298内から出土した貨銭で、「熙寧元寶」（宋　1068）と判読できるが、裏面は凹凸が無く不整形であることから、模造銭であると思われる。

63は４区遺構422から出土した底が丸みを持つ土師器皿で、口径12.4cm、器高4.2cmを測る。口

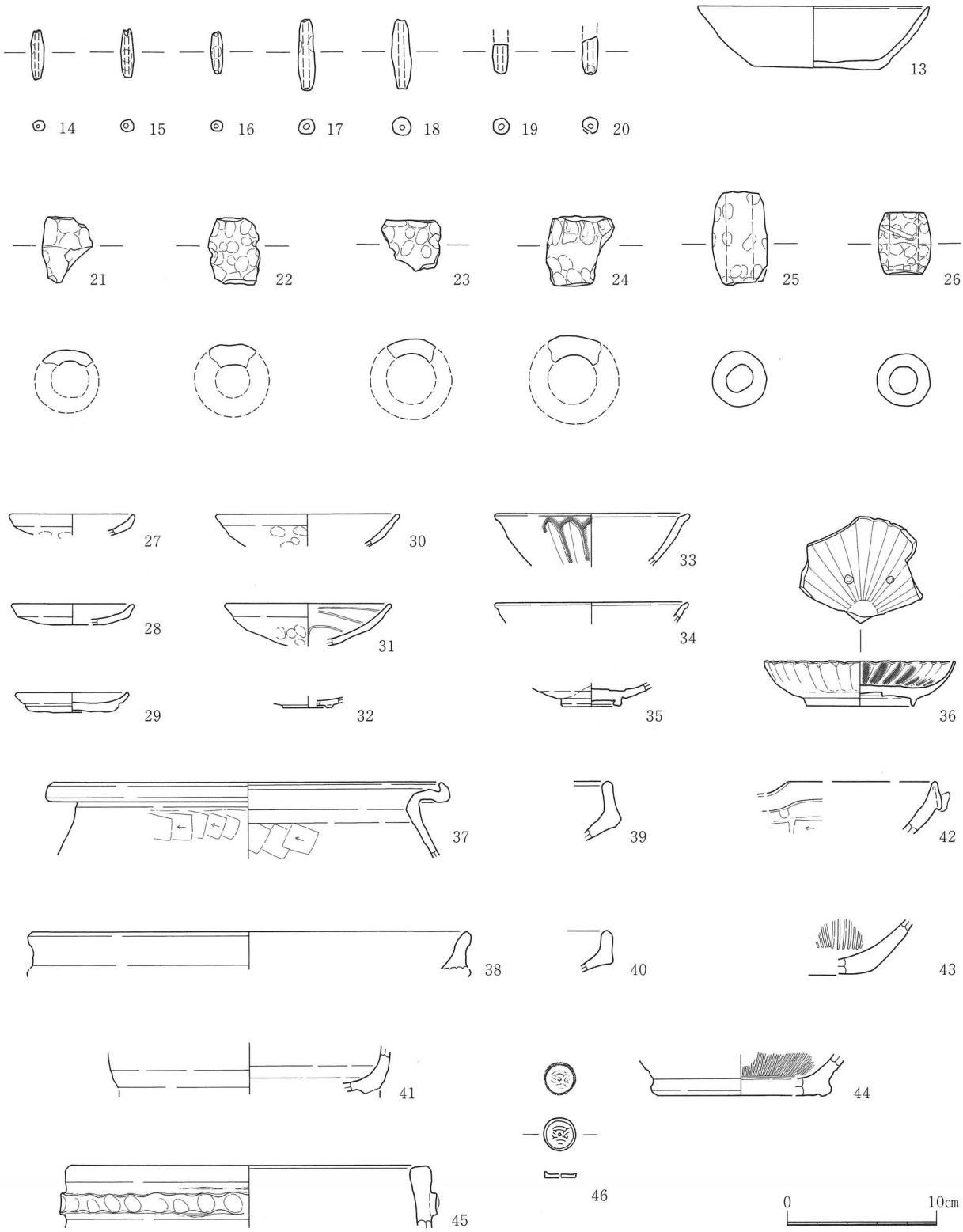


図19　２区出土遺物実測図

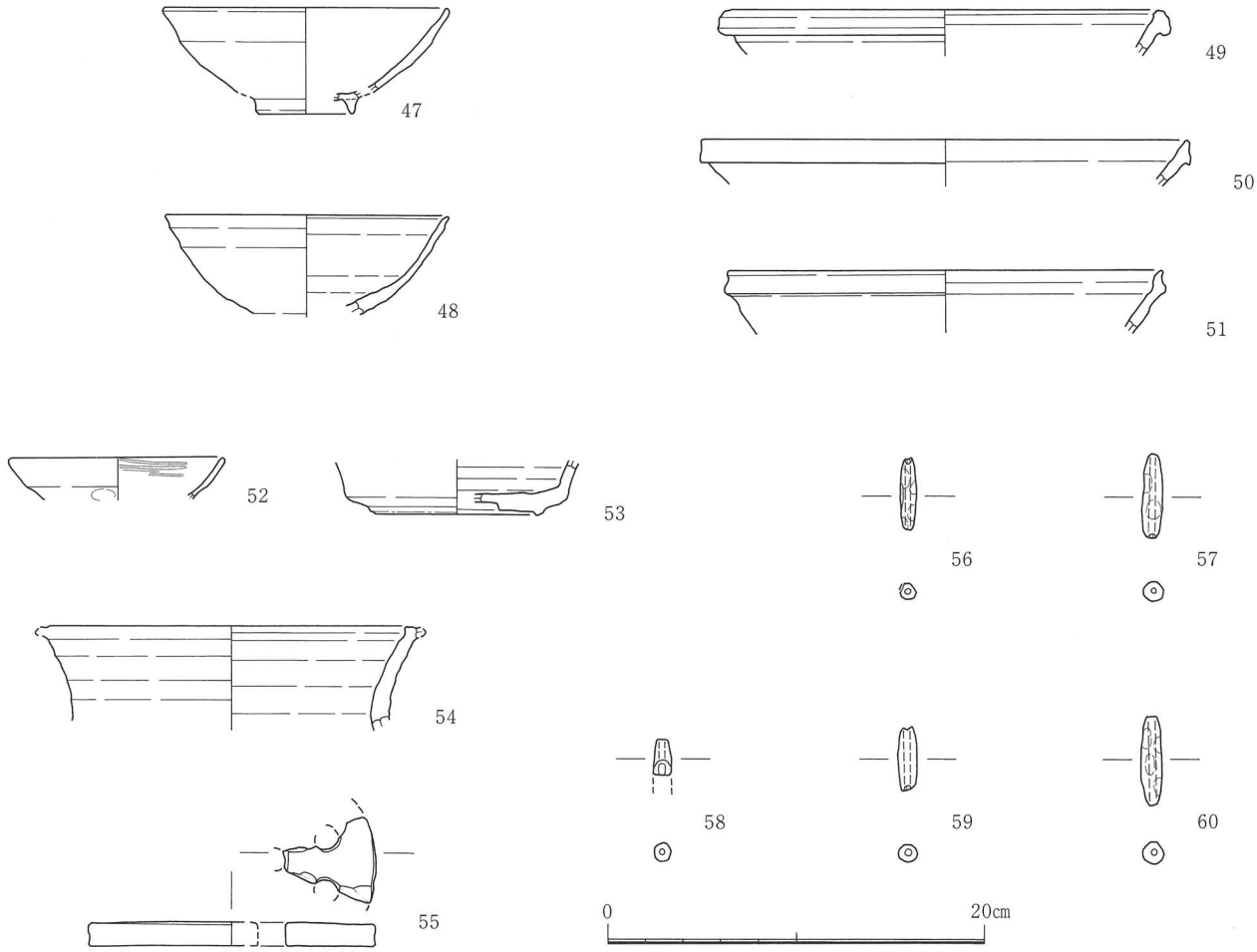


図20　3区出土遺物実測図

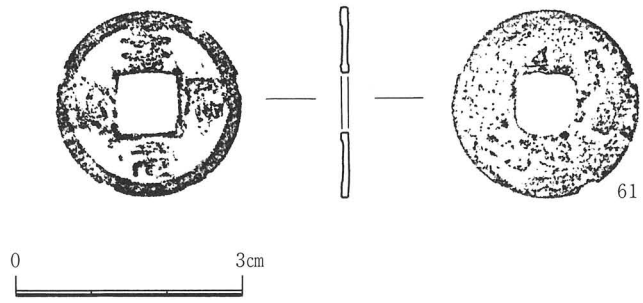


図21　3区出土貨銭実測図

縁部に孔穴がひとつみられる。遺構に埋納する際、祭祀行為を行なったものと推測される。

66は4区遺構419から出土した瓦器椀で、底部を欠損するが、深みのある器形を呈す。70は4区遺構414から出土した平瓦片で、表に縄目痕が顕著にみられる。77は軟質施釉陶器の秉燭で、18世紀頃に相当する。

井戸320からは多くの遺物（71～75他）が出土した。近世陶磁器が多くみられた。71は肥前系の銅緑釉皿で、内面に蛇の目釉剥ぎを施す。72は唐津系の中鉢、73は内面に刷毛目紋を施す唐津系鉢である。74・75は堺焼のすり鉢である。おおむね17世紀後半～18世紀代に相当する。

出土した遺物から、おおよそ高台を持つ瓦器椀を伴う時期のもの（14世紀代）、高台が無く皿状を呈す瓦器椀を伴う時期のもの（14世紀末～15世紀代）、陶磁器を伴う近世代のもの（17～18世紀代）に大別することができる。中世代にはこの周辺に集落があったことがうかがえる。

陶磁器器種同定に際し、森村健一氏（堺市立埋蔵文化財センター）、渡辺晴香氏（本府調査員）にご協力いただいた。

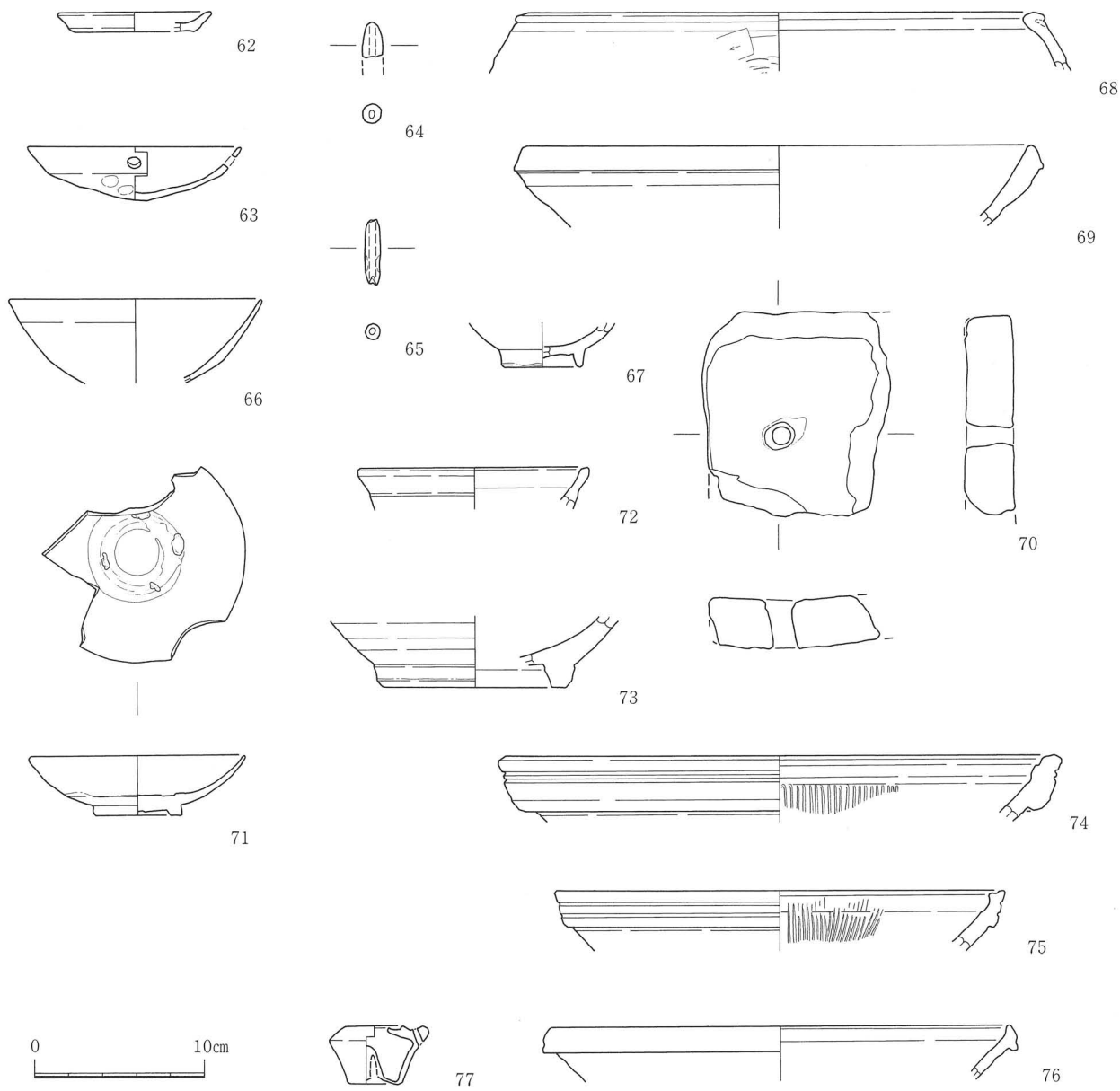


図22　4区出土遺物実測図

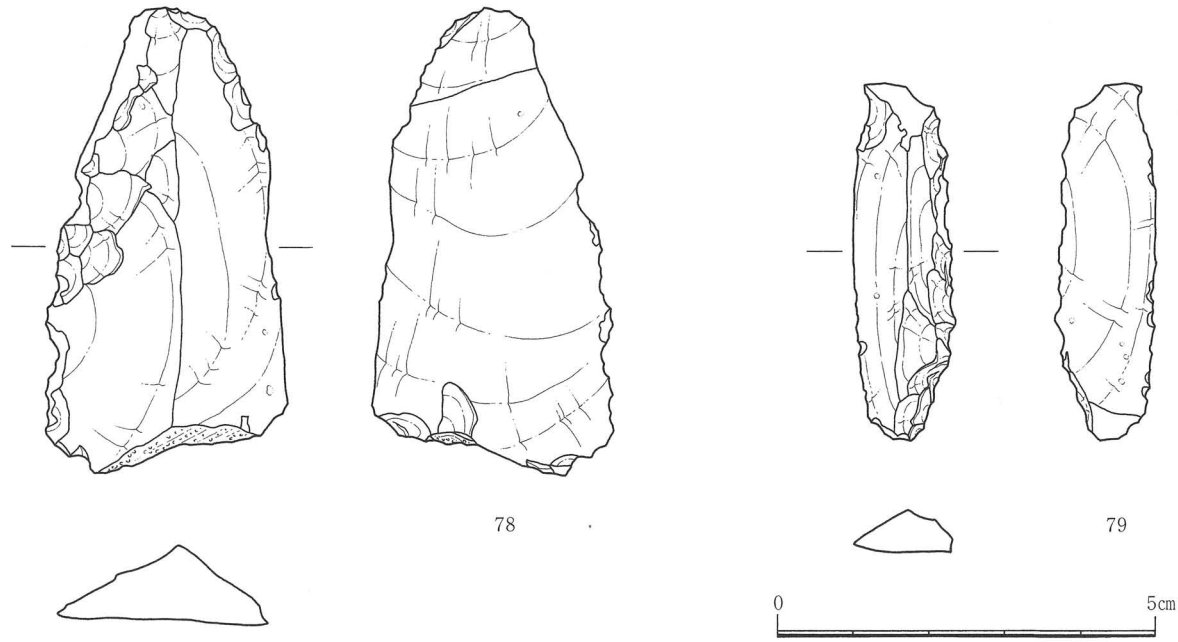


図23　出土石製品実測図

5．小結　（図24）

今回の調査では、粘土採掘坑と数条の畦畔を確認した。粘土採掘坑は、散逸的に掘削されたものも見られるが、畦畔に平行な直線（あぜ）を設定し、掘り方を揃え掘削する状況が看取された。

検出された畦畔で顕著なものは、畦畔A・畦畔Bである。畦畔Aは北西から南東に延びる。畦畔Aに平行を成す畦畔C・D・E・Fがみられる。畦畔Aは、調査区北側に広がる耕作地に続く。畦畔Bは畦畔Aからやや屈曲して南南西に延びる。畦畔Aに起因する平行線に沿う粘土採掘坑が畦畔Bを掘削する状況から、畦畔Bは畦畔Aより古いものであることがうかがえる。

『日根荘総合調査報告書』(1994　(財)大阪府埋蔵文化財協会)では、樫井川右岸の条里復元を行なっている。調査地周辺では、『慶長12年泉州佐野庄出作安松帳』（藤田家文書14）に安松の「六ノ坪」の記載（図中「イ」）がみられる。この条里復元図によると、坪境が調査区内を縦断するようである。今回の発掘調査では、条里復元図に相当する坪境は確認できなかったが、３区西側で畦畔Fを境に、粘土採掘坑の形態が以東のものと著しく異なる状況がみられた。土地所有や土地利用形態の相違を示すものであるが、かつて畦畔F付近に坪境があったのではないかと推定される。さらに、畦畔Bは条里復元図の坪境に起因する畦畔になるのではないかと想定される。

調査地周辺は、14世紀初頭に描かれた『和泉国日根野村近隣絵図』では、「荒野」の偏辺地にあたる。どのように開発され、土地利用されたのかの解明が急がれる。

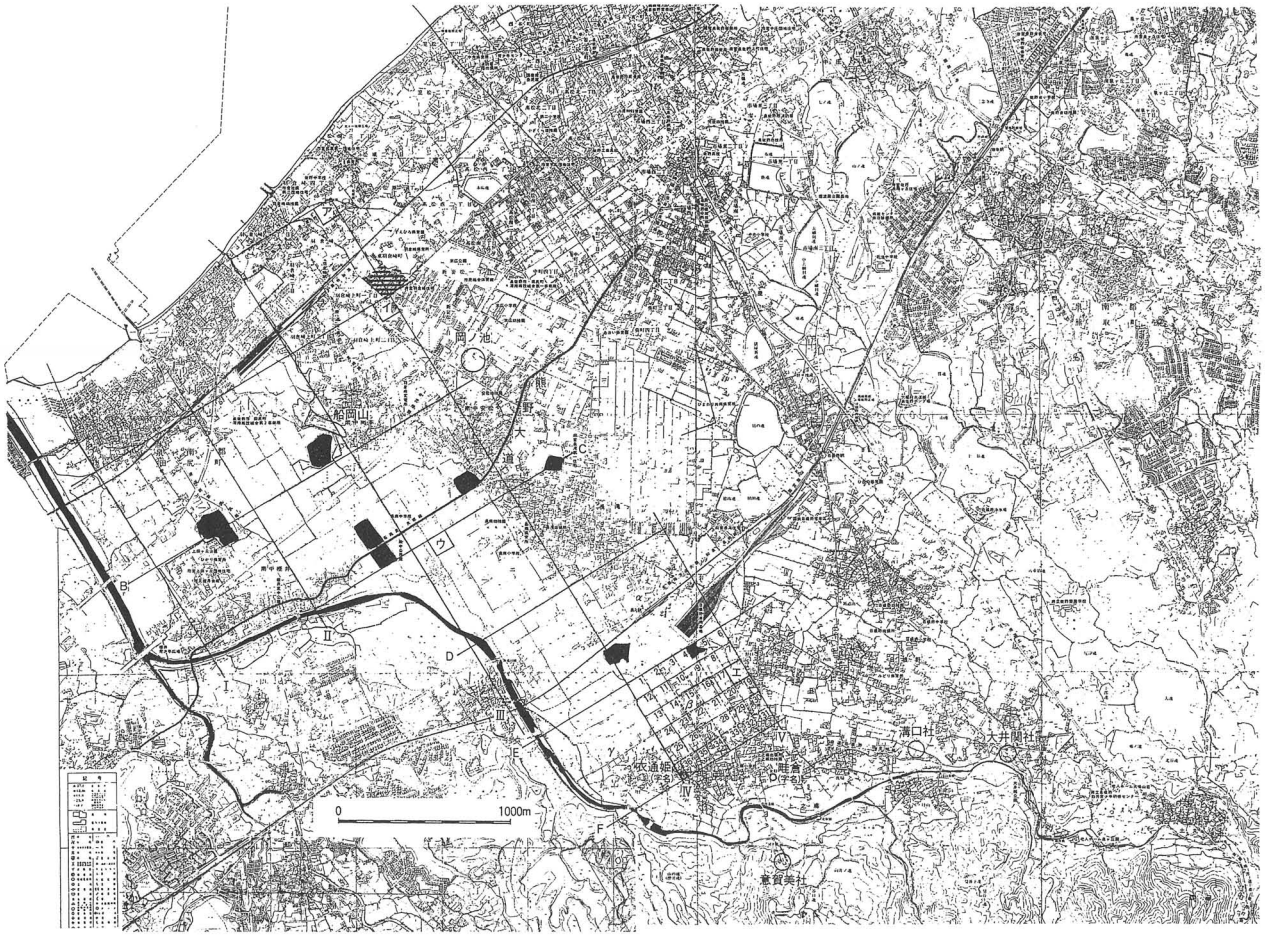


図24　周辺条里復元図

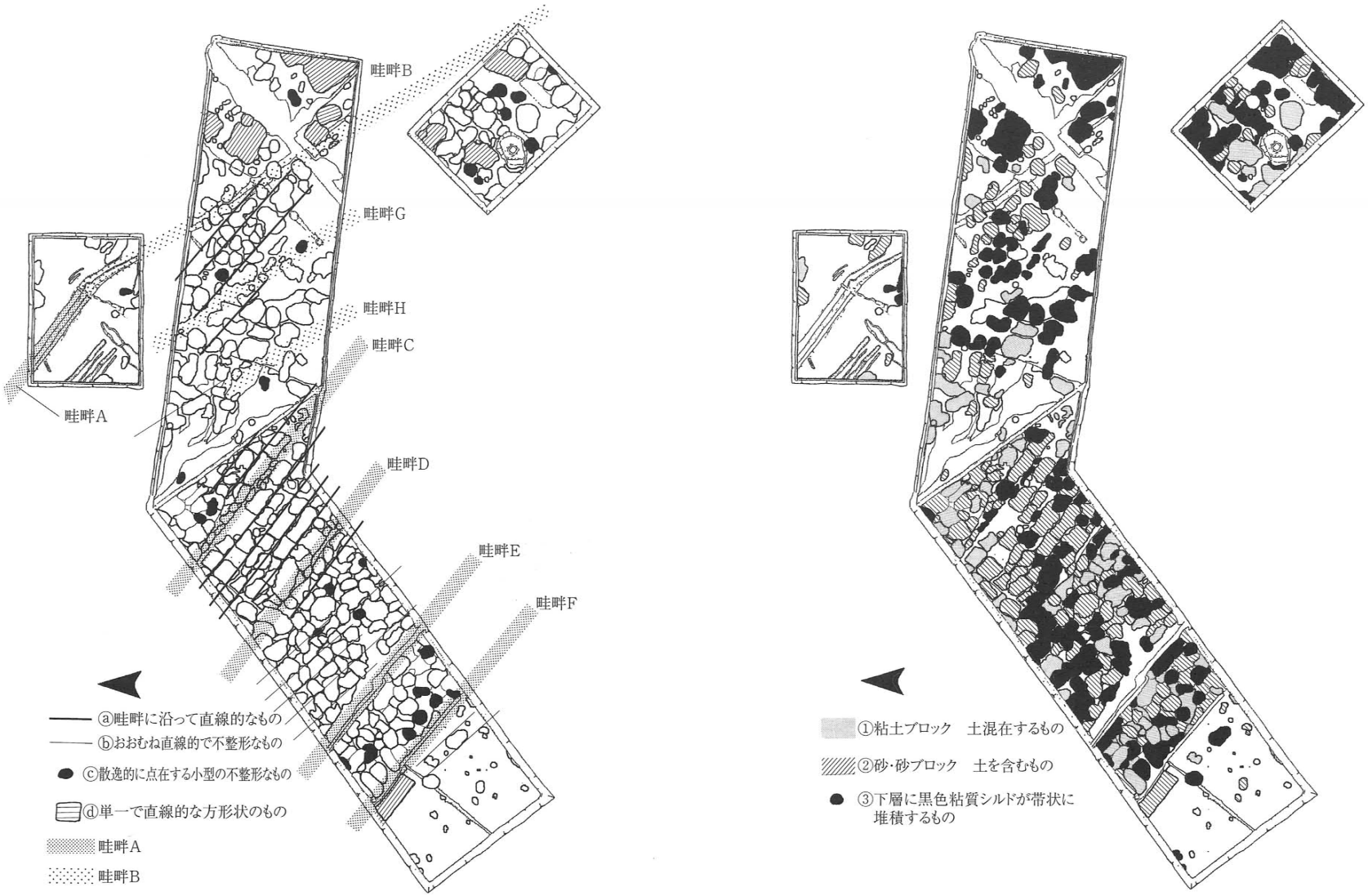


図25　粘土採掘坑分布図

第4章　考　　察

1．泥面子における祭祀行為の可能性

（財）大阪府文化財センター　専門調査員　島内洋二

はじめに

泥面子は土製の玩具で、土製碁石、火打石、灯明皿、陶磁器など近世の遺物とともに出土することが多く、土人形と同様に扱われる。土人形は縁起物としても用いられたようで、民間信仰との関連も示唆される。泥面子も家内安全を願う護符のような意味合いがあるとされる。当遺跡より出土した銭の波形紋をモチーフにした泥面子は、後述するように大場遺跡、長原遺跡などで出土している（図26）。その内、大別して孔を持つものと持たないものの2つに分けられる。当遺跡出土のものは、より当時の銅銭に似せているようである。泥面子は一般に子供の玩具として扱われるが、それ以外の可能性について考えていきたい。

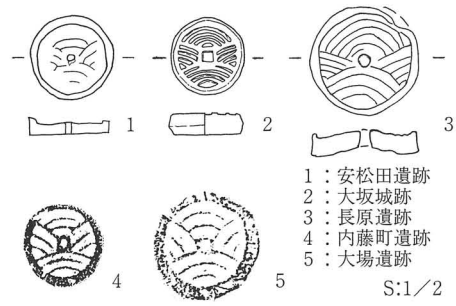


図26　波状紋を持つ泥面子

1：泥面子の概説

泥面子は扁平で円盤状の面打と人面や動物などの顔型を模した芥子面に分けられる。今回出土した泥面子は面打に属する。享保年間（1716～1735）頃に作られたとされ、制作方法は大別して型作りと手捻りの２種類あるが、泥面子については前者である。直径１～６cm、厚さ0.5～1.3cmと幅広い形を持ち、法量から直径２cm以下のものを小型、2.5cm前後のものを中型、３cm以上のものを大型と分けられる。18世紀代には、主に中型が作られ、19世紀以降に小型と大型の泥面子が出現する。図柄も多種多様に存在し、時代の特

図27　泥面子図柄分類

徴を現すものと思われる（図27）。用途については穴一と呼ばれる遊びに使われたようである。ルールはとてもシンプルである。地面に穴を堀り、次にその穴めがけて投げる。穴に入れば自分のものとなる。相手が外した泥面子にめがけて、自分の泥面子を投げ当たっても同様である。もとは銭を用いていたが、大人から子供達の間に広まっていく間に泥面子に変化したとされる。

２：波形紋を持つ泥面子出土遺跡

銭の波形紋を持つ泥面子は多くの遺跡から出土している。大阪府泉佐野市大場遺跡では、江戸時代中期から後期にかけての遺物を大量に含む遺構（01－OX）から出土している。[註1)] 当遺跡と同様に孔を持つ泥面子である。

同府大阪市長原遺跡では江戸時代の作土層とされる２層～３層から出土している。これもまた当遺跡と同様に薄く孔を持つ。[註2)]

同府同市大坂城跡では近代の包含層から出土している。[註3)] 当遺跡の物より若干厚みがあり、孔を持たない。土人形は、幾つかの遺構から約700点が出土しており、ほとんどが江戸時代以降のものである。約700点のうち泥面子は30点ほどである。

東京都内藤町ではゴミ穴とされる遺構（C－1・C－221）から出土している。土人形は約420点出土しているが、うち200点以上が泥面子である。[註4)]

同都四谷三丁目遺跡では、17世紀末から幕末期まで幅広い時期の遺物を含む第19号遺構とする地下室から出土している。[註5)] これも孔をもたず、若干厚みがある。

同都南町遺跡では土採り跡と思われる土坑から出土している。これもまた孔をもたず、厚みがある。[註6)]

波形紋を持つ泥面子は、１cmに近い厚みのあるものは孔を持たず、それより薄いものは孔を持つようである。出土状況を見ると特に際立った特徴はなく、ほとんどが包含層や廃棄土坑と思われる箇所からの出土である。ちなみに銀貨を模ったものもあり、東京都隼町遺跡や同都西新宿３丁目遺跡などで出土している。[註7)]

３：銭を用いた祭祀行為の例

次に銭を用いて祭祀を行った可能性がある遺跡を見ていきたい。よく見られるものとしては、六道銭を伴ったものである。奈良県御坊市稲宿遺跡からは近世墓の中から六道銭や鋏、かみそりを副葬するものとともに幼児墓と推測される箇所では土人形も出土している。[註8)] 六道銭とは死人を葬る時に棺に入れる六文の銭の事で、三途の川の渡し賃や金属の呪力で悪霊が近づくのを避けるためとも言われる。

京都市平安京跡左京近衛・西洞院辻では194枚の銭貨が出土している。[註9)] 様々な遺構から出土した銭貨を一律に扱う危険性も述べられているが、ある程度固まって出土していることから泥面子と同様に遊んだものではないかとしながらも、道路に関する祭祀品の可能性も述べられている。そ

の他に泥面子が105個出土しており、19世紀の道路に伴った側溝から多数出土している。

その他に、耕作地での畦畔や水口周辺では比較的良好な状態で遺物が出土することがあり、それらは耕作前に行う地鎮祭や正月などに行う年中行事に関連するものと取り扱われるが、耕作地内から出土する場合もいくつか存在する。その例を幾つか列挙していく。

大阪府泉佐野市に所在する中開遺跡では、近世の水田に伴うものとして6箇所で径14～18cm、深さ数cmのピット状の土坑を検出。[註10)] そのうち2箇所で銭が出土している。径16cm、深さ4cmのピット状土坑（5－00）から中国・宋銭の「天禧通寶」が文字面を上に検出されている。その側から幅6cm、長さ8mm、厚み3mm弱の断面長三角状の木片が検出されており、実態は不明としながらも銭を突き刺していた棒ではないかという見解をしている。そのほかに径16cmのピット状土坑（15－00）から同じく宋銭の「治平元寶」が先と同様に文字面を上にして出土している。これらの宋銭埋納土坑は耕作地の地鎮を行った跡と推測されており、近世以降に水田の耕作を本格化されたこと裏付けるものとしている。

同府泉佐野市に所在する中嶋遺跡で、地鎮土坑状遺構として多数の土坑が検出されている。[註11)] 3つの地区から計44箇所で地鎮土坑状遺構を検出しており、うち銅銭が出土したのは11箇所である。銭だけでなく馬歯や金属片などが出土している。大きく2つの系統に分けられ、一つは土坑の大きさが径6cm前後の小型が多く、明確な掘り形が見られず金属による染み込みの範囲を示すものと思われる。そのうち径8.5cm前後、深さ2cm（1001－ＯＸ）から「通」の字が残存する銅銭をほぼ垂直の状態で検出している。さらに径6.2cm、深さ3cmの土坑（1004－ＯＸ）からは「景徳元寶」を検出。字面を上にして水平状態で出土しており、約1cmの緑色小石が供伴している。径8cm前後、深さ2.5cmの土坑（1017－ＯＸ）からは銅銭の一部が出土している。これらの土坑は、埋納したのではなく人為的に置いた可能性があり、15世紀以降から近世までの段階で埋まったものとしている。そのほかの8箇所については、土坑を掘った後に埋納した可能性が高い。径15.0～16.2cm、深さ10.9cmの土坑（1311－ＯＸ）に関しては、下部から炭が出土している事から、何かの祭祀行為をした後に埋納したのではと推測されている。径13.2～15.4cm、深さ12.2cmの土坑（1312－ＯＸ）からは小石を供伴しており、これもまた同様のものと推測される。これらは14～15世紀の段階で埋められたものと考えられ、段階的に同様の祭祀が行われていたと推測されている。

さらに同府泉佐野市の日根野遺跡からも銭が18箇所から検出されている。規則性は見られず、掘立柱建物の柱穴や建物に伴う地鎮の可能性は低いとしている。ピット状土坑に埋納したというよりも、人為的に地面に置かれたのではないかと推測されている。「開元通寶」「元豊通寶」「熙寧元寶」「聖宋元寶」など中世後半に流通した銭貨であることから、中世後半から近世初期頃に地鎮などの祭に伴う習俗による可能性が述べられている。[註12)]

類例は少ないながらも泉州地域にて以上のような、中世後半から近世にかけて耕作面に銭を用いた祭祀行為があった可能性が考えられる。

まとめにかえて

先に述べた例のように中世後半から近世初期に行われたと思われる銭を用いた地鎮などの祭祀行為を行う過程で、時代が下るにつれ祭祀行為の簡略化などにより、泥面子を代用していたのではないかということを念頭に考察してきた。しかし、泥面子の出土状況を見ると、包含層や廃棄土坑からが多く、今回のようにピットから出土するものは少ない。むしろ出土状況からは、収穫が終わった後の休耕田で子供達が遊び、忘れ残されたものが地中に残ったということも考えられる。しかし、先の例のように特定の地域において、その土地ならではの祭祀行為が行われた可能性もある。今後、他地域との比較、文献資料などと共に、泥面子が玩具以外に使用された事も想定して出土状況、供伴遺物に注意しながら類例を多く集め、論を追及することに勤めたい。

追記：資料紹介などで井藤暁子氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

〔註〕

註１：岡本敏行『大場遺跡　南海本線分岐線代替地造成事業に伴う発掘調査報告書』　財団法人　大阪府埋蔵文化財協会　1990

註２：池田研『長原・瓜破遺跡発掘調査報告ＸＶ　1995年度大阪市長吉瓜破地区　土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書』　財団法人　大阪市文化財協会　2000

註３：鋤柄俊夫編『大坂城跡発掘調査報告Ｉ』　財団法人　大阪府文化財研究センター　2002

註４：井汲隆夫編『内藤町遺跡－放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－　第Ⅱ分冊〈遺物編〉』新宿区内藤町遺跡調査会　1992

註５：栩木　真ほか編『四谷三丁目遺跡　－（仮称）東京消防庁四谷消防署合同庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告書－』　東京消防庁・新宿区四谷三丁目遺跡調査団　1991

註６：井汲隆夫ほか編『南町遺跡－兵庫県東京宿舎市ヶ谷寮改築工事に伴う緊急発掘調査報告書－』兵庫県・新宿区南町遺跡調査団　1994

註７：Ａ　大八木謙二編『西新宿三丁目遺跡－東京オペラシティ建設に伴う緊急発掘調査報告書－』東京オペラシティ建設・運営協議会　東京オペラシティ建設用地内埋蔵文化財調査団　1993

Ｂ　竹内裕信編『隼町遺跡－警視庁隼町宿舎建設工事に伴う調査－』千代田区隼町遺跡調査会　1996

註８：奈良県立橿原考古学研究所「稲宿古墳群と近世墓」『奈良県古墳発掘調査集報１』奈良県立橿原考古学研究所1976

註９：伊野近富「平安京（左京近衛・西洞院辻）発掘調査概要」　『京都府遺跡調査概報』第33冊　財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989

註10：井藤暁子『中開遺跡Ⅲ・上町東遺跡　南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書』　財団法人　大阪府埋蔵文化財協会　1994

註11：井藤暁子『中嶋遺跡他　３区・８～13区　泉佐野市日根野土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』　財団法人　大阪府文化財調査研究センター　1995

註12：中村淳磯ほか編『日根野遺跡　主要地方道大阪和泉泉南線建設に伴う発掘調査報告書』　財団法人　大阪府文化財調査研究センター　1996

〔図版〕

図１　１：安松田遺跡出土遺物

２：註３と同じ

３：註２と同じ

４：註４と同じ

５：註１と同じ

図２　註４より抜粋したものに加筆

2．安松田遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、安松田遺跡で検出された中世および中世よりやや古い時期の土坑内堆積物下部に認められた黒褐色を呈する腐植質堆積物を対象として、重鉱物・火山ガラス比分析および珪藻、花粉の各微化石分析を行い、覆土の由来や堆積時期、そして形成期の周辺植生に関する情報を得ることを目的とする。なお、本報告では紙面の都合により、各分析の結果表を割愛しているが、詳細は大阪府教育委員会に保管されているので参照されたい。

1．試料

中世の土坑は、近世の耕作土直下層準で、調査区のほぼ全域において多数検出されている（図25)。近世の耕作土の下位堆積物は、層厚40cm以上の上方細粒化する灰色粘土から灰色極細粒砂混じり粘土質シルトからなり、植物根痕が密に確認される。本堆積物を掘り込んで土坑が構築されている。各土坑の深さは40～50cm程度である。充填堆積物の状況は、いずれも類似している。上部から中部が大きさ20～10cm程度のシルトからなるブロック土、シルト質細粒砂からなるブロック土の混土からなる。層相から埋め戻し期の堆積物と判断される。下部は黒色を呈する腐植質粘土質シルトからなる。層相から遺構廃絶後に形成された放置期の堆積物と推定される。

分析調査は、これら多数の土坑のうち、調査区内における分布が均等になるように10基の土坑が選択（図17）され、各土坑内堆積物下部の腐植質堆積物より試料が採取された（試料名：S-1～10)。また、遺構が構築されている堆積物から、上部の灰色粘土と下部の灰色粘土質シルト部分の２層準から遺構内堆積物の検討を行うための比較対照用として試料を採取した（試料名：上位より標準層序１・２)。

2．分析方法

(1)重鉱物・火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、粒径1/4mm－1/8mmの砂分を秤量、ポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離し、得られた重鉱物を秤量の後、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く

延びた繊維束状のものとする。

同定結果は量比をグラフで示す。検出されたテフラについては、火山ガラス、斜方輝石、角閃石のうち、明らかにそのテフラの本質物質と判断される砕屑物について、その屈折率を測定し、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

⑵珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。カバーガラス上に滴下、乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体を基準に同定・計数する。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)などを参照する。同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種に区分し、さらに淡水生種は塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能について分類整理し、主要珪藻化石群集の分布図として示す。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。

⑶花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

３．結果

⑴重鉱物・火山ガラス比分析（図28）

分析結果を図１に示す。遺構試料は、重鉱物量、重鉱物組成、火山ガラス比ともに、大きな違いを示す試料は認められない。重鉱物組成は、いずれの試料も角閃石が100%近くを占め、他の重鉱物は極めて微量ある。火山ガラス比では、10%前後の少量のバブル型が含まれ、微量の軽石型も混在する。火山ガラスのほとんどは、無色透明であるが、バブル型の中には褐色を呈するものも認められた。一方、標準層序試料のうち、標準層序1は、重鉱物量、重鉱物組成、火山ガラス比ともに、遺構試料と類似した組成を示すが、標準層序2は、重鉱物量が極めて微量であり、その組成も不透明鉱物が多く、角閃石は30%程度である。標準層序2の火山ガラス比だけは、遺構試料に類似する。

屈折率測定は、火山ガラスについて行った。火山ガラスの量比の最も高いＳ-7より火山ガラスを拾い出し、測定した結果、n1.507～1.512の比較的広いレンジが得られた（図２）。

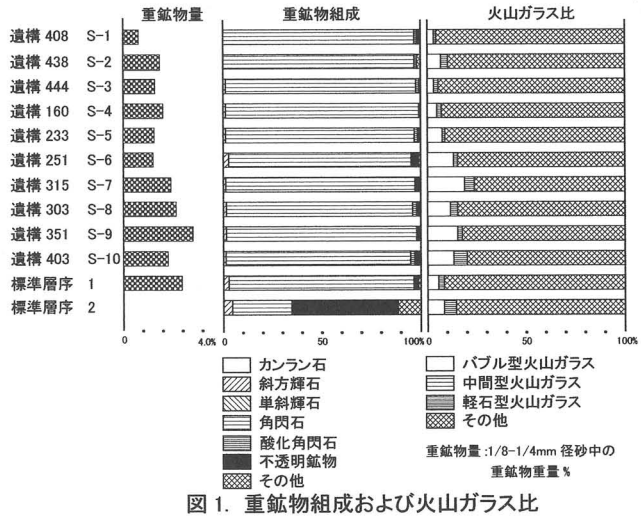


図 1. 重鉱物組成および火山ガラス比

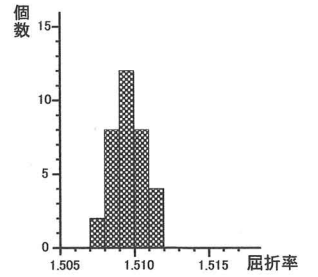
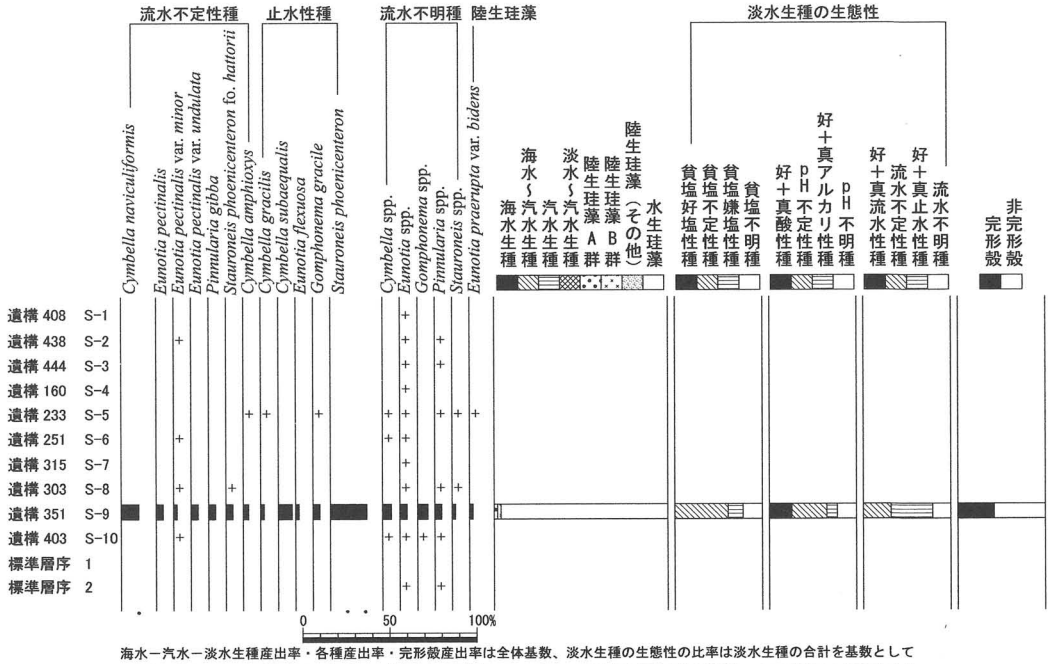
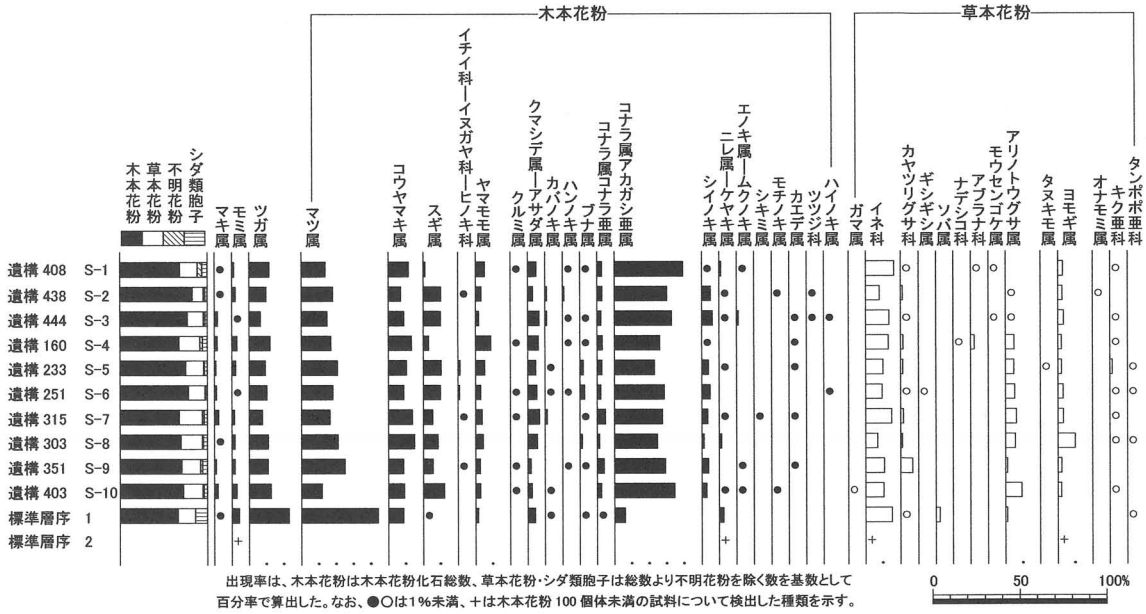


図 2. S-7 の火山ガラスの屈折率測定結果



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。＋は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

図 3. 主要珪藻化石群集



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

図 4. 花粉化石群集

図28　自然科学分析挿図

⑵珪藻分析

結果を図３に示す。珪藻化石は、Ｓ９で100個体以上産出するが、その他の試料や標準層序試料からの産出数は０～57個体と少なかった。

⑶花粉分析

結果を図４に示す。花粉化石は標準層序2で少なかったが、その他の試料からは検出される。保存状態は全体的に悪く、花粉化石の表面に風化の痕跡があるものが多く含まれていた。

４．考察

⑴覆土の由来

土坑内堆積物下部の腐植質堆積物の重鉱物組成、火山ガラス比さらに珪藻化石の種類構成は、いずれも同様な組成を示した。このことから、調査区内で検出された土坑内堆積物は、場所にかかわらず、同一の由来を有すると考えられる。ここで、対照試料とした標準層序1も珪藻化石の種類構成も含めて遺構の覆土とほぼ同様の特性を示したことから、遺構の覆土は、遺構が掘り込まれ、遺構の壁を構成している灰色粘土層などと同様な砕屑物を母材にしていることが推定される。

この灰色粘土層を構成している砕屑物は、樫井川などの河川により和泉山脈やその前衛山地からもたらされたものであり、ほぼ角閃石のみからなる重鉱物組成は、前衛山地に広く分布する領家帯の花崗岩類(市原ほか,1986)に由来する砕屑物を多く含んでいるということを反映している。また、火山ガラスについては、扇状地周囲の泉南丘陵を構成する大阪層群中に狭在するテフラ層から洗い出されて再堆積したか、あるいは沖積層の形成時に降下堆積したテフラ層に由来する可能性もある。ただし、町田・新井(2003)などに記載された大阪層群中のテフラ層の中には、今回確認された形態と屈折率に相当するテフラは認められないことと、今回の試料中における火山ガラスが非常に新鮮であることを考慮すると、後者である可能性が高い。後期更新世以降の近畿地方に分布するテフラのなかでは、形態と屈折率から、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah:町田・新井,1978)に由来する可能性が高い。K-Ahは、九州南方の鬼界カルデラより噴出した広域テフラであるが、その噴出年代は、放射性炭素年代では約6300年前とされている。ただし、完新世における各種の古環境変遷の指標とする際には、暦年に直した年代で考える必要があり、K-Ahに関わる放射性炭素年代を暦年較正した値や湖底堆積物の年縞年代などから、その暦年代は約7300年前とされている(町田・新井,2003)。なお、今回の土坑内堆積物からK-Ahが検出されたことになるが、これは、上述のように遺構周囲の堆積層の中にもともと含まれていたものに由来するもので、遺構の埋積年代を示すものではないと考えられる。

⑵花粉化石群集帯の設定と対比

土坑内堆積物下部の花粉化石群集は、上記の珪藻・鉱物組成などと同様に、いずれの地点も類似した特徴を示した。このことから本遺跡の局地花粉化石群集帯として、YP-Ⅰ帯（YP：安松田遺跡の花粉帯の略）を設定する。本帯は、木本花粉の優占、その中で常緑広葉樹のアカガシ亜属の高率出現、それに次ぐマツ属の多産とツガ属・コウヤマキ属・スギ属といった温帯性針葉樹の

比較的多産が特徴である。

本遺跡周辺では、本遺跡西側の後背地に位置する大場遺跡で花粉分析が行われている（渡辺,1994）。この結果によると、大場遺跡の花粉化石群集はP-Ⅰ～Ⅳ帯に区分され、P-Ⅰ帯がK-Ah以前、P-Ⅱ帯がK-Ah降灰以降、P-Ⅲ帯が奈良～鎌倉時代、P-Ⅳ帯が18世紀以降とされている。このうち、P-Ⅲ帯の木本花粉の特徴は今回のYP-I帯に類似した特徴を示しており、年代的にも矛盾せず、生層序対比される。

(3)遺構埋積時の周辺植生

中世および中世よりやや古い時期の土坑内に腐植質堆積物が形成された頃は、調査地点周辺には常緑広葉樹のアカガシ亜属を中心とし、シイノキ属やマキ属などを伴う暖温帯性の林分が形成されていたことが推定される。この林分は、二次林の代表的な樹種であるマツ属が多産し、コナラ亜属などの落葉広葉樹の種類を随伴していること、アカガシ亜属やシイノキ属の種にはアラカシのような萌芽力の高い種が含まれ、現在の大阪湾岸地域における照葉樹林にはアラカシの萌芽更新による二次林が少なくないことから、極相林としての照葉樹林のような林分ではなかったものと思われる。また、ツガ属・スギ属・コウヤマキ属といった温帯性針葉樹の種類は、暖温帯から冷温帯の推移帯に分布する中間温帯林を構成する要素である。当時も後背山地を中心に分布していたと考えられるが、近年の河内台地縁辺部に位置する長原遺跡の調査成果などでは、低地近辺にも分布していた可能性が指摘されており（渡辺,2002）、その分布に関しては今後の検討が必要である。一方、草本花粉をみると、水生植物の検出は少なく、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属やアリノトウグサ属といった畑や道端などによくみられる種類が認められる。遺跡内やその周辺に分布していたと思われるが、花粉化石群集に占める草本花粉の割合が低いことから、調査地点近辺に草地が拡がっていたとは考えにくい。また、栽培種のソバ属の花粉化石が認められている。当時の栽培種の一種としてソバが存在したものと思われる。ソバ属は渡来種であり、大阪平野では中世以降の層準で普通に認められるが、その栽培に関しては不明な点が多い。ソバは、栽培植物の中でもその栽培時の管理が難しい一種であり、調査地域における耕作地のあり方など考古学的調査成果を踏まえた慎重な評価が必要である。

本遺跡周辺地域の中世の植生については、上記の大場遺跡（渡辺,1994）のほか、水系が異なるが泉北台地に位置する小阪遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社,1992;鈴木、1992）の調査例がある。これら遺跡における中世の花粉化石群集の特徴として、マツ属の増加、草本花粉の増加、栽培植物の出現があげられる。このような傾向は、河内平野で行われた花粉分析結果でも普遍的にみられる傾向である（前田, 1984）。草本類の増加と木本類の減少は、平地林や山林が開かれ、耕地化したことが原因と考えられており、またマツ属の増加は、人間の生業に伴う植生干渉の結果、マツの二次林や植林が増えた結果であるとされている（波田,1987;那須,1980;高原,1998など）。今回の結果も、基本的には、このような植生変遷に比定されるものと推定されるが、河内平野との大きな違いとして、本地域ではアカガシ亜属を主とする暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）

要素の出現頻度が高いことが上げられる。これは地域による植生変遷、特に植生干渉のあり方の違いに起因する可能性がある。また、本地域内でも本遺跡と大場遺跡とで草本類の産状が異なり、本遺跡で低率であることから、林分密度が本遺跡周辺で高く、大場遺跡周辺は草地植生が発達する開けた場所であった可能性がある。これらの可能性については、今後、本地域における山地から低地にいたる植生史情報の蓄積と考古遺跡における人間活動に関する情報を総合的に捉えることにより明らかにされていくものと考える。

(引用文献)

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.

波田善夫,1987,花粉分析からみたマツ林の歴史.松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の撹乱とその動態について－資料集，財団法人　日本自然保護協会.41-49.

原口和夫・三友　清・小林　弘,1998,埼玉の藻類　珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

市原　実・市川浩一郎・山田直利,1986,岸和田地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,148p.

Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.

町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143-163.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

前田保夫,1984,花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷.日本植生誌　近畿,宮脇昭編著,至文堂,87-99.

那須　孝悌,1980,花粉分析からみた二次林の出現.関西自然保護機構会報,4,3-9.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1992,小阪遺跡における珪藻・花粉・植物珪酸体からみた古環境.小坂遺跡－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－自然科学・考察編,大阪府教育委員会・大阪文化財センター,561-582.

鈴木　茂,1992,小阪遺跡15Fトレンチの花粉化石.小坂遺跡－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－自然科学・考察編,大阪府教育委員会・大阪文化財センター,525-533.

渡辺正巳,1994,大場遺跡の花粉・珪藻分析および火山灰分析.「日根荘総合調査報告書」,財団法人大阪府埋蔵文化財協会,p.123-135.

渡辺正巳,2002,NG00-11次調査に係わる花粉分析.「長原遺跡発掘調査報告Ⅸ　市営長吉長原第2住宅建設工事に伴う発掘調査報告書」,財団法人大阪市文化財協会,56-65.

第5章　まとめ

安松田遺跡は、新規発見遺跡であり、この地周辺の古環境についてはあまり知られていなかった。今回の発掘調査では僅かではあるが、新たな知見を得ることができた。

今回検出した遺構は、ほとんどが粘土採掘坑であった。粘土採掘坑については、その形状、大きさ、埋土の堆積状況、分布などにより様々な様相がみられた。採掘の形態・分布として、ⓐ畦畔に沿って直線的に計画して掘削され整然と方形状の土坑が並ぶもの、ⓑおおむね直線的に配置されるが不整形な掘り方の土坑が密集するもの、ⓒ散逸的に点在する小型の不整形状のもの、ⓓ単一で直線的な大型の方形状を示すものなど、違いがみられた。また、採掘時期として、中世代、中世から近世代、近世代の時期が考えられた。一時期に納まらず、幾度となく採掘している状況がうかがえた。さらに、畦畔を境にして粘土採掘坑の形態が異なる、粘土採掘坑が検出されなくなるなど、土地区画との関連や土地利用の方法にも違いがある状況がうかがえた。

粘土採掘坑の埋土から出土した遺物の量は少なく、出土した遺物のほとんどが細片であったため、それぞれの粘土採掘坑の掘削時期を確定するには至らなかった。また、調査区内では採掘された粘土を利用して製品化した痕跡がみられなかった。採取した粘土を何にどのように利用されたのかは不明である。今後、周辺地域の発掘調査で明らかになることを期待したい。

調査地周辺は、14世紀初頭に描かれた『和泉国日根野村近隣絵図』によると、村落・集落に近い「荒野」の偏辺地にあたる。今回の調査で14世紀頃には周辺に集落があったことがうかがえることから、いつ頃の時期から、どの様に「荒野」開発が成されてきたのかを解明することが今後の課題のひとつになると思われる。

〔参考文献〕

・『羽倉崎遺跡』1989　(財)大阪府埋蔵文化財協会
・『大場遺跡』1990　(財)大阪府埋蔵文化財協会
・『羽倉崎東遺跡』1993　泉佐野市教育委員会
・『日根荘総合調査報告書』1994　(財)大阪府埋蔵文化財協会
・『末廣遺跡・中開遺跡・松原遺跡』1995　(財)大阪府埋蔵文化財協会
・『植田池・長滝・安松遺跡』1996　(財)大阪府文化財調査研究センター
・『平成9年度特別展　大坂夏の陣　樫井合戦』1997　歴史館いずみさの
・『市場西遺跡』2001　泉佐野市教育委員会
・『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』　1988～2004（各年度）　泉佐野市教育委員会

表１　出土遺物対照表

遺物番号	挿図	写真PL	種　　類	器　　種	実測No	遺物登録No	地区	遺構・土層
1	図18	PL－5	土師器	小皿	52	0009	1区	第１面精査
2	図18	PL－5	陶器（唐津）	溝縁皿	54	0004	1区	人力掘削土
3	図18	PL－5	磁器（肥前系・波佐見）	碗	49	0004	1区	人力掘削土
4	図18	PL－5	陶器（肥前系）	碗	50	0004	1区	人力掘削土
5	図18	PL－5	白磁（瀬戸系）	小皿（稜皿）	59	0006	1区	人力掘削土
6	図18	PL－5	磁器（伊万里・染付）	中皿	60	0006	1区	人力掘削土
7	図18	PL－5	磁器（肥前系）	香炉	53	0006	1区	人力掘削土
8	図18	PL－5	陶器（京焼系）	片口鉢	51	0004	1区	人力掘削土
9	図18	PL－5	陶器（京焼系）	鍋	58	0004	1区	人力掘削土
10	図18	PL－5	堺焼	すり鉢	55	0004	1区	人力掘削土
11	図18	PL－5	陶器	甕（底部）	56	0009	1区	第1面精査
12	図18	PL－5	陶器（備前）	管状土錐	57	0004	1区	人力掘削土
13	図19	PL－5	土師質	坏	76	0129	2区	遺構23
14	図19	PL－5	土師質	管状土錐	3	0002	2区	キカイ掘削土
15	図19	PL－5	土師質	管状土錐	5	0031	2区	人力掘削土
16	図19	PL－5	土師質	管状土錐	4	0035	2区	人力掘削土（南側側溝）
17	図19	PL－5	土師質	管状土錐	1	0029	2区	人力掘削土
18	図19	PL－5	土師質	管状土錐	2	0016	2区	人力掘削土
19	図19	PL－5	土師質	管状土錐	7	0001	2区	キカイ掘削土
20	図19	PL－5	土師質	管状土錐	6	0013	2区	人力掘削土
21	図19	PL－5	土師質	管状土錐	12	0027	2区	人力掘削土
22	図19	PL－5	土師質	管状土錐	10	0017	2区	人力掘削土
23	図19	PL－5	土師質	管状土錐	11	0015	2区	人力掘削土
24	図19	PL－5	土師質	管状土錐	13	0010	2区	人力掘削土
25	図19	PL－5	土師質	管状土錐	9	0016	2区	人力掘削土
26	図19	PL－5	陶器	管状土錐	8	0030	2区	人力掘削土
27	図19	PL－6	土師器	小皿	19	0014	2区	人力掘削土
28	図19	PL－6	土師器	小皿	18	0001	2区	キカイ掘削土
29	図19	PL－6	土師器	小皿	21	0033	2区	人力掘削土
30	図19	PL－6	瓦器	椀	20	0019	2区	人力掘削土
31	図19	PL－6	瓦器	椀	17	0031	2区	人力掘削土
32	図19	PL－6	瓦器	椀　高台部	27	0030	2区	人力掘削土
33	図19	PL－6	青磁（龍泉）	小碗	15	0012	2区	人力掘削土
34	図19	PL－6	白磁（？）	皿	14	0002	2区	キカイ掘削土
35	図19	PL－6	磁器（肥前系）	中皿	16	0011	2区	人力掘削土
36	図19	PL－5	白磁（肥前系）	菊花皿	32	0015	2区	人力掘削土
37	図19	PL－5	土師質（紀州系）	土釜	31	0019	2区	人力掘削土
38	図19	PL－6	土師質	焙烙	29	0016	2区	人力掘削土
39	図19	PL－6	土師質	焙烙	28	0016	2区	人力掘削土
40	図19	PL－6	土師質	焙烙	24	0015	2区	人力掘削土
41	図19	PL－6	土師質	火舎	30	0030	2区	人力掘削土
42	図19	PL－6	瓦質	すり鉢片口部	23	0002	2区	キカイ掘削土
43	図19	PL－6	堺焼	すり鉢	26	0015	2区	人力掘削土
44	図19	PL－6	丹波焼	すり鉢	22	0016	2区	人力掘削土
45	図19	PL－6	瓦質	火鉢	25	0017	2区	人力掘削土
46	図19	PL－6	土師器	面打	80	0034	2区	人力掘削土
88		PL－6	白磁（肥前系）	菊花皿	33	0015	2区	人力掘削土
80		PL－6	青磁（龍泉）	碗	—	0023	2区	人力掘削土
47	図20	PL－6	瓦器	椀	72	0100	3区	遺構351
48	図20	PL－6	須恵器	椀	74	0096	3区	遺構342①
49	図20	PL－6	須恵質（東播系）	こね鉢	73	0081	3区	遺構280
50	図20	PL－6	須恵質（東播系）	すり鉢	70	0101	3区	遺構357
51	図20	PL－6	須恵質（東播系）	こね鉢	71	0107	3区	遺構377
52	図20	PL－7	瓦器	椀	68	0049	3区	人力掘削土

遺物番号	挿図	写真PL	種　　類	器　　種	実測No	遺物登録No	地区	遺構・土層
53	図20	PL－7	青磁（波佐見）	香炉	61	0050	3区	人力掘削土
54	図20	PL－7	須恵器	甕	69	0054	3区	人力掘削土
55	図20	PL－7	土師器	さな（七輪）	67	0055	3区	人力掘削土
56	図20	PL－6	土師質	管状土錐	64	0079	3区	遺構208
57	図20	PL－6	土師質	管状土錐	63	0071	3区	遺構261
58	図20	PL－6	土師質	管状土錐	66	0055	3区	人力掘削土
59	図20	PL－6	土師質	管状土錐	65	0055	3区	人力掘削土
60	図20	PL－6	土師質	管状土錐	62	0054	3区	人力掘削土
61	図21	PL－7	貨銭		79	0127	3区	遺構298
81		PL－7	中国白磁	（深）皿　高台	—	0066	3区	遺構219
82		PL－7	青磁（龍泉）	碗　片	—	0099	3区	遺構344
83		PL－7	青磁（龍泉）	碗　片	—	0050	3区	人力掘削土
84		PL－7	青磁（龍泉）	皿	—	0119	4区	遺構428
86		PL－7	陶器（京焼系）	土鍋？	—	0067	3区	遺構144
87		PL－7	瓦質	羽釜	—	0091	3区	遺構318
62	図22	PL－7	土師質	小皿	44	0111	4区	遺構408
63	図22	PL－7	土師器	皿	75	0125	4区	遺構422
64	図22	PL－7	土師質	管状土錐	39	0128	4区	遺構430（井戸）
65	図22	PL－7	土師質	管状土錐	40	0114	4区	遺構417
66	図22	PL－7	瓦器	椀	41	0116	4区	遺構419
67	図22	PL－7	磁器（肥前系）	碗　高台	42	0118	4区	遺構425
68	図22	PL－7	瓦質（湊焼）	甕	43	0111	4区	遺構408
69	図22	PL－7	瓦質	すり鉢	45	0112	4区	遺構413
70	図22	PL－8	瓦	平瓦	47	0113	4区	遺構414
71	図22	PL－8	陶器（肥前系）	皿	38	0120	4区	遺構430（井戸）
72	図22	PL－8	陶器	中鉢	37	0120	4区	遺構430（井戸）
73	図22	PL－8	陶器（唐津？）	鉢	36	0120	4区	遺構430（井戸）
74	図22	PL－8	堺焼	すり鉢	34	0128	4区	遺構430（井戸）
75	図22	PL－8	備前	すり鉢	35	0120	4区	遺構430（井戸）
76	図22	PL－8	瓦質	すり鉢	46	0123	4区	包含層
77	図22	PL－8	陶器（？）	秉燭	48	0123	4区	包含層
85		PL－8	青磁（龍泉）	碗　片	—	0057	4区	人力掘削土
78	図23	PL－8	石製品		78	0112	4区	遺構413
79	図23	PL－8	石製品	刃器	77	0124	4区	包含層

報　告　書　抄　録

ふりがな	やすまつだいせき
書名	安松田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2004－3
編集著者名	杉本清美
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL　06-6941-0351
発行年月日	2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やすまつだいせき 安松田遺跡	おおさかふいずみさのし 大阪府泉佐野市 ひがしはぐらざきちょう 東羽倉崎町	27213	118	34° 24′	135° 18′	03年６月～ 12月	2369㎡	府営羽倉崎住宅建て替えに伴う発掘調査

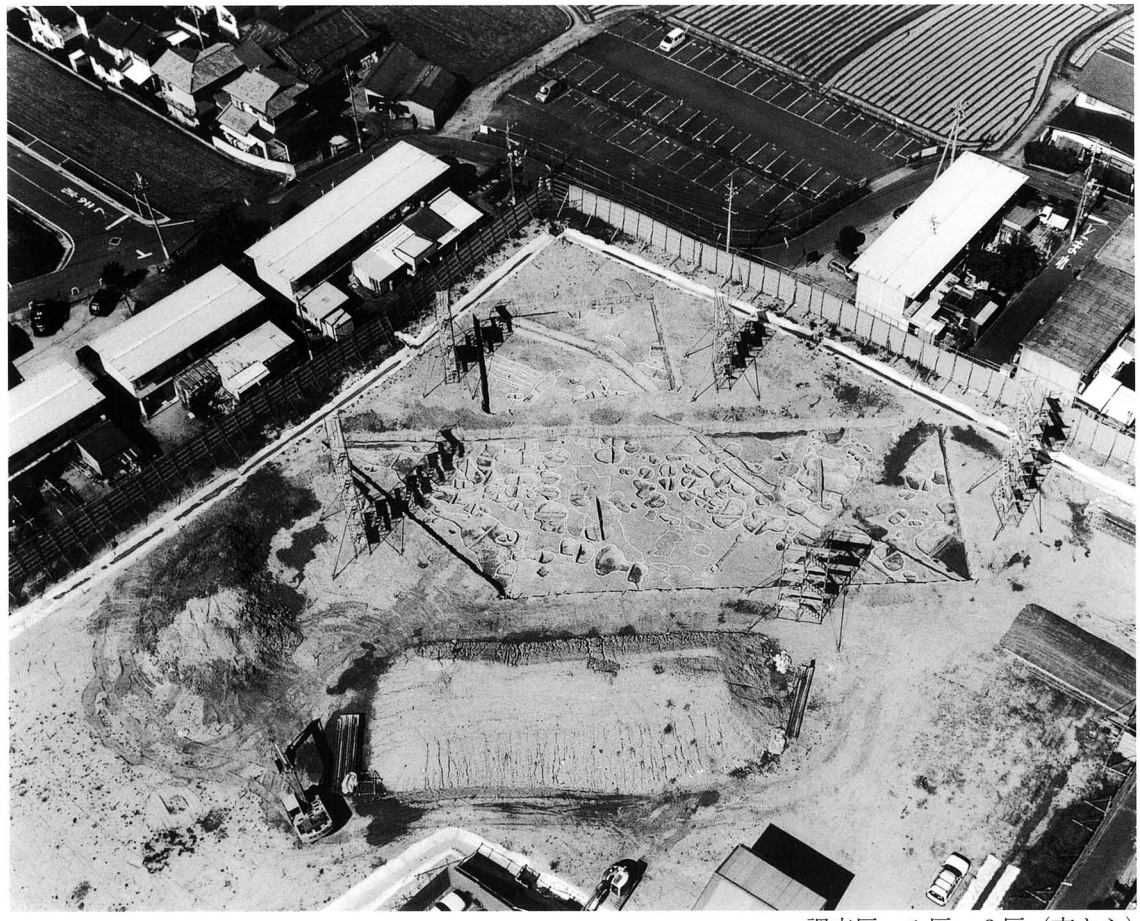
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
やすまつだいせき 安松田遺跡	集落跡	中世～近代	粘土掘削土坑 畦畔・井戸 耕作溝	瓦器・瓦・陶磁器・青・白磁・土錘　他	規則正しく掘削された粘土掘削土坑を検出。 周辺条里の復元。

図　　版

調査区遠景（南東側上空より）

PL-1

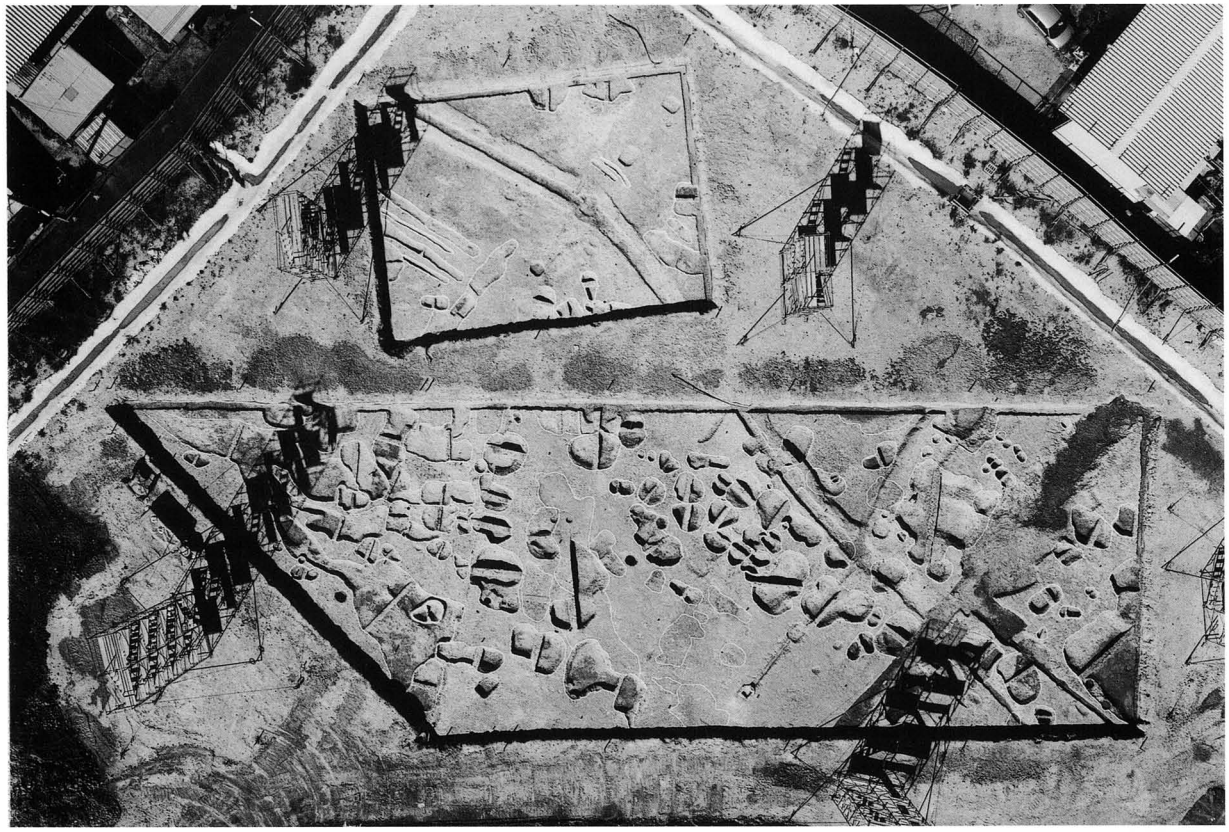
調査区全景(1)



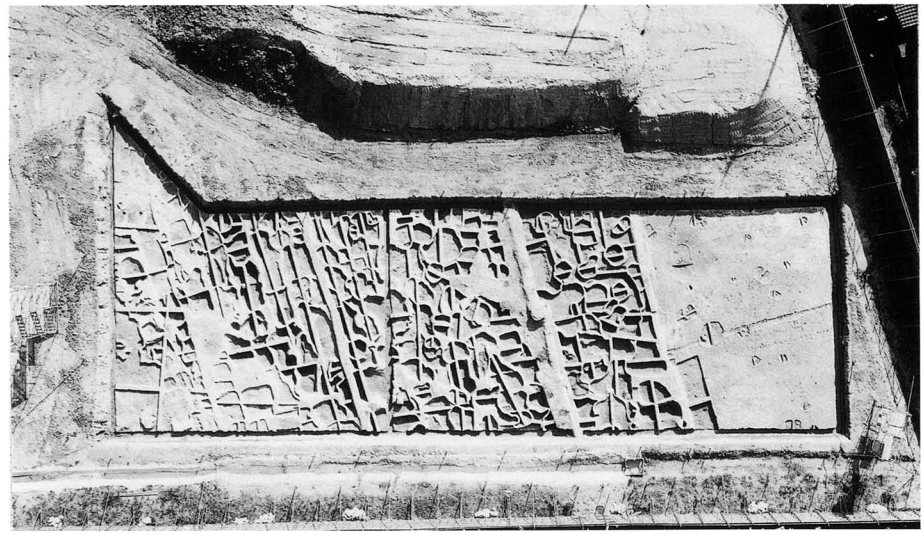
a．調査区　1区・2区（南から）

b．調査区　3区・4区（北から）

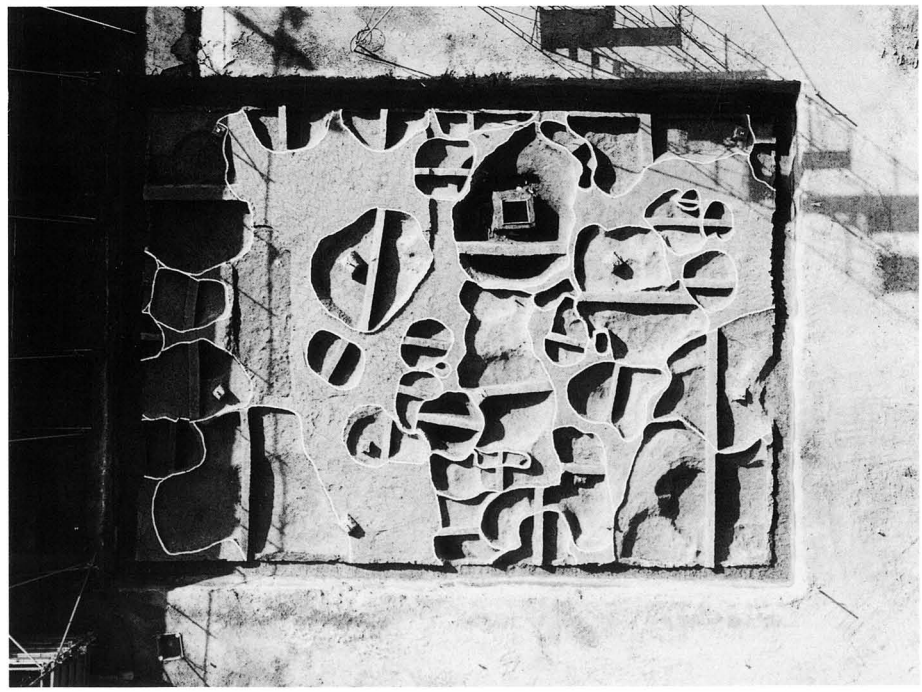
調査区全景(2)



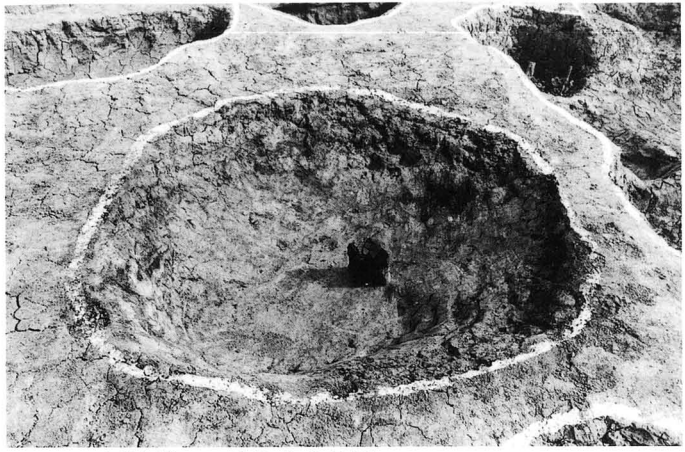
a．1区・2区全景(上が北)



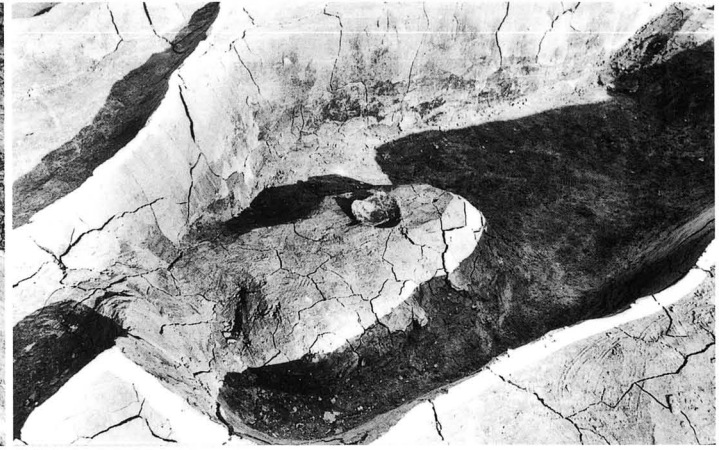
b．3区全景(上が南)



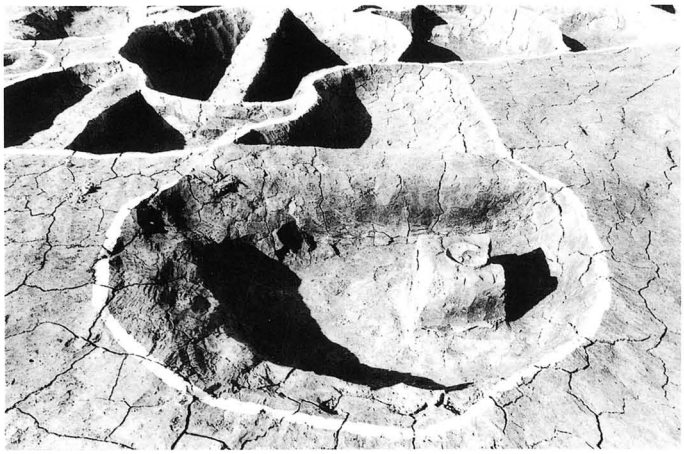
c．4区全景(上が西)



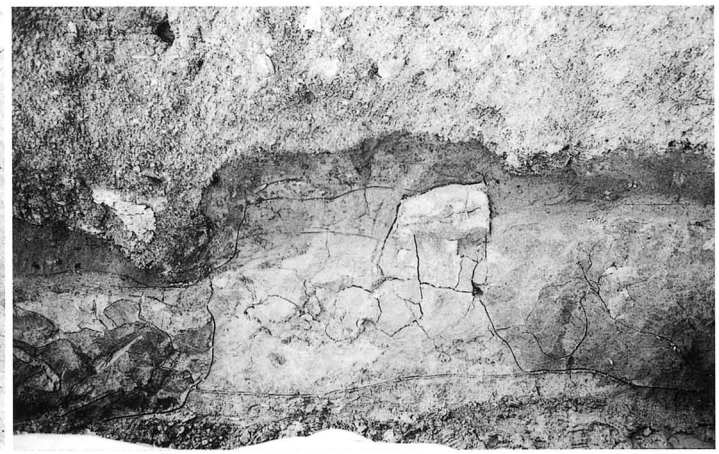
a．２区遺構23　遺物出土状況



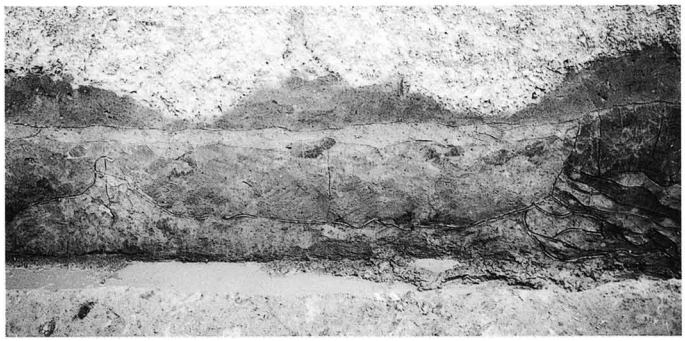
b．３区遺構351　遺物出土状況



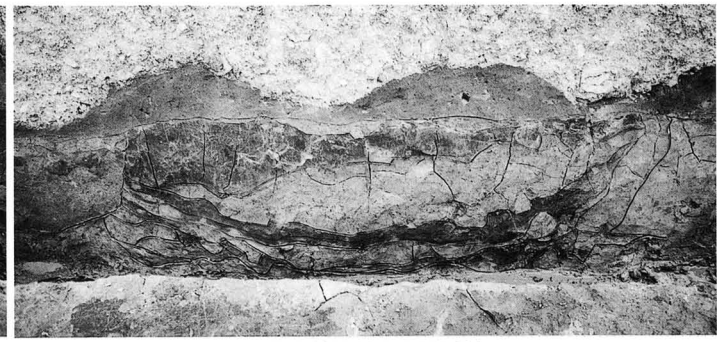
c．４区遺構422　遺物出土状況



d．３区北壁　畦畔Ｃ



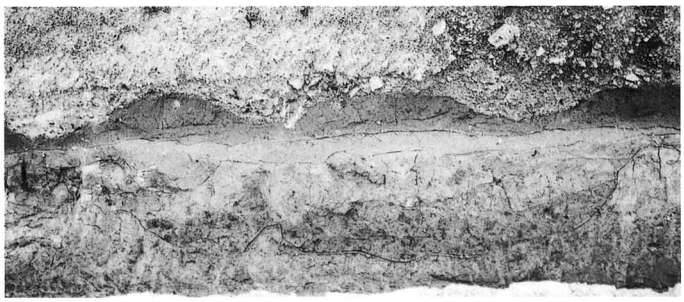
e．３区北壁遺構297断面（砂状堆積）



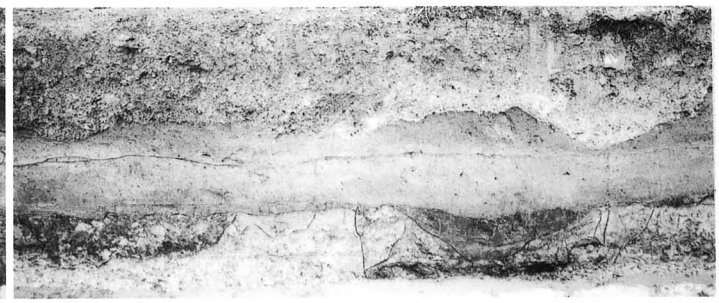
f．３区北壁遺跡293断面（黒粘土層堆積）

g．３区北壁遺構315断面（帯状堆積）

h．３区北壁遺構261断面（ブロック状堆積）



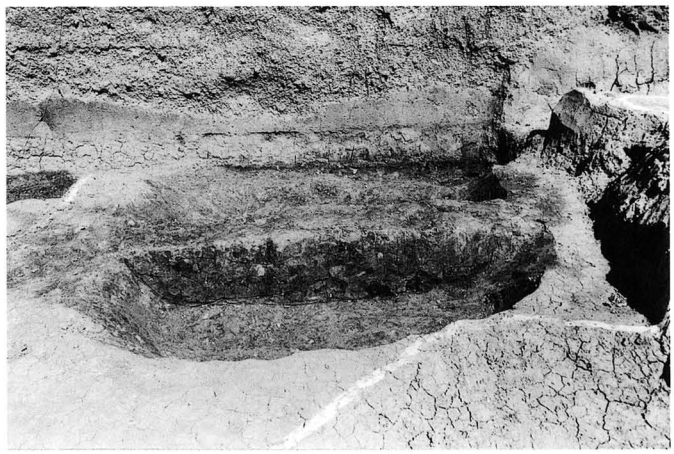
i．３区北壁遺構204断面（ブロック状及び砂堆積）



j．４区西壁遺構416・417断面

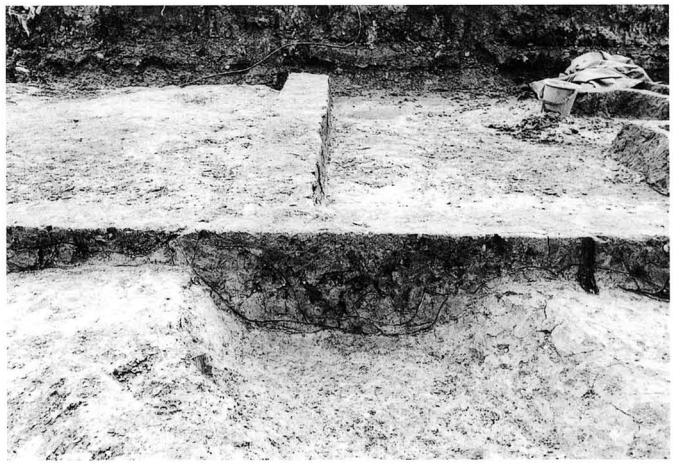
a．２区遺構４断面（北から）

b．２区遺構16断面（東から）



c．２区遺構126断面（南から）

d．２区遺構94断面（東から）



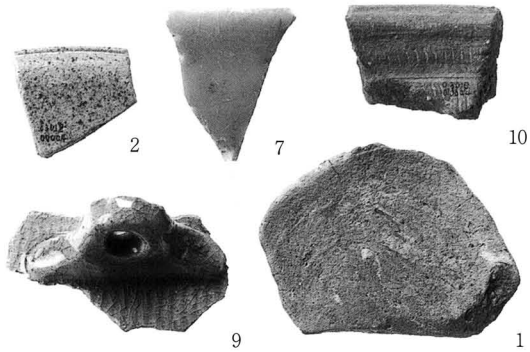
e．３区遺構195断面（西から）

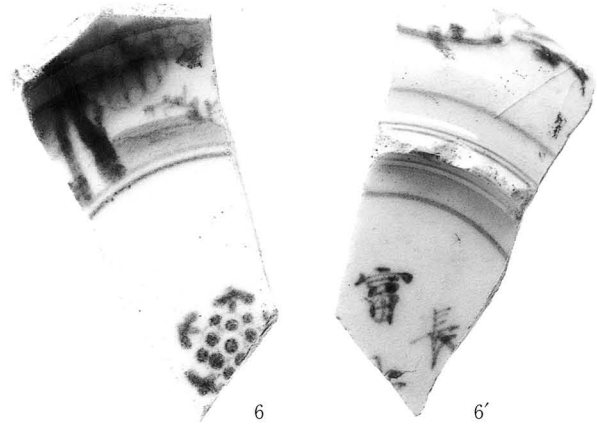
f．３区遺構371断面（南から）

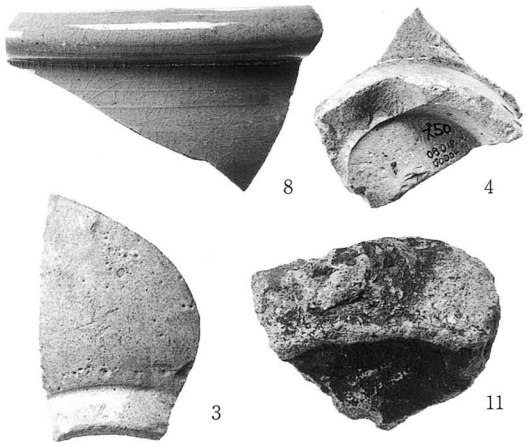
g．３区遺構352断面（東から）

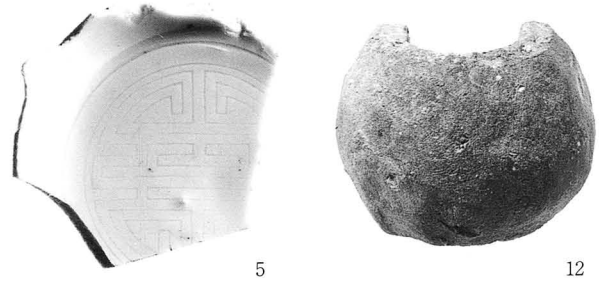
h．４区遺構414・415断面（北から）

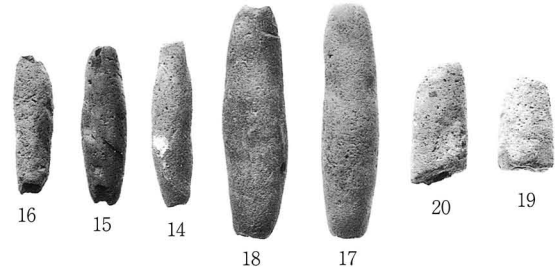
出土遺物(1)

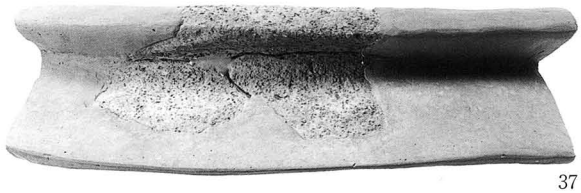


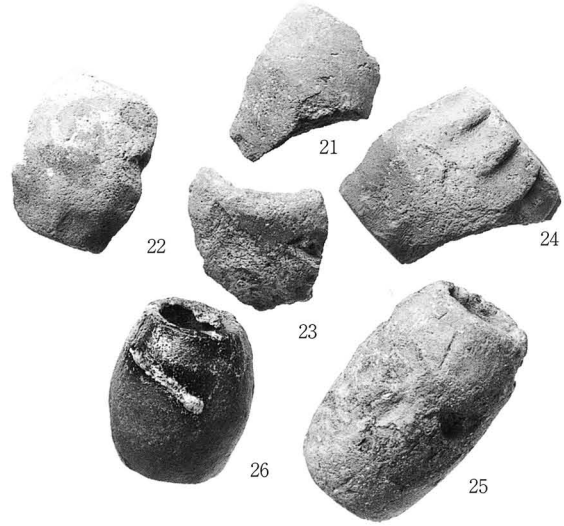


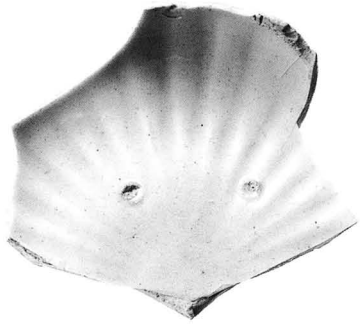




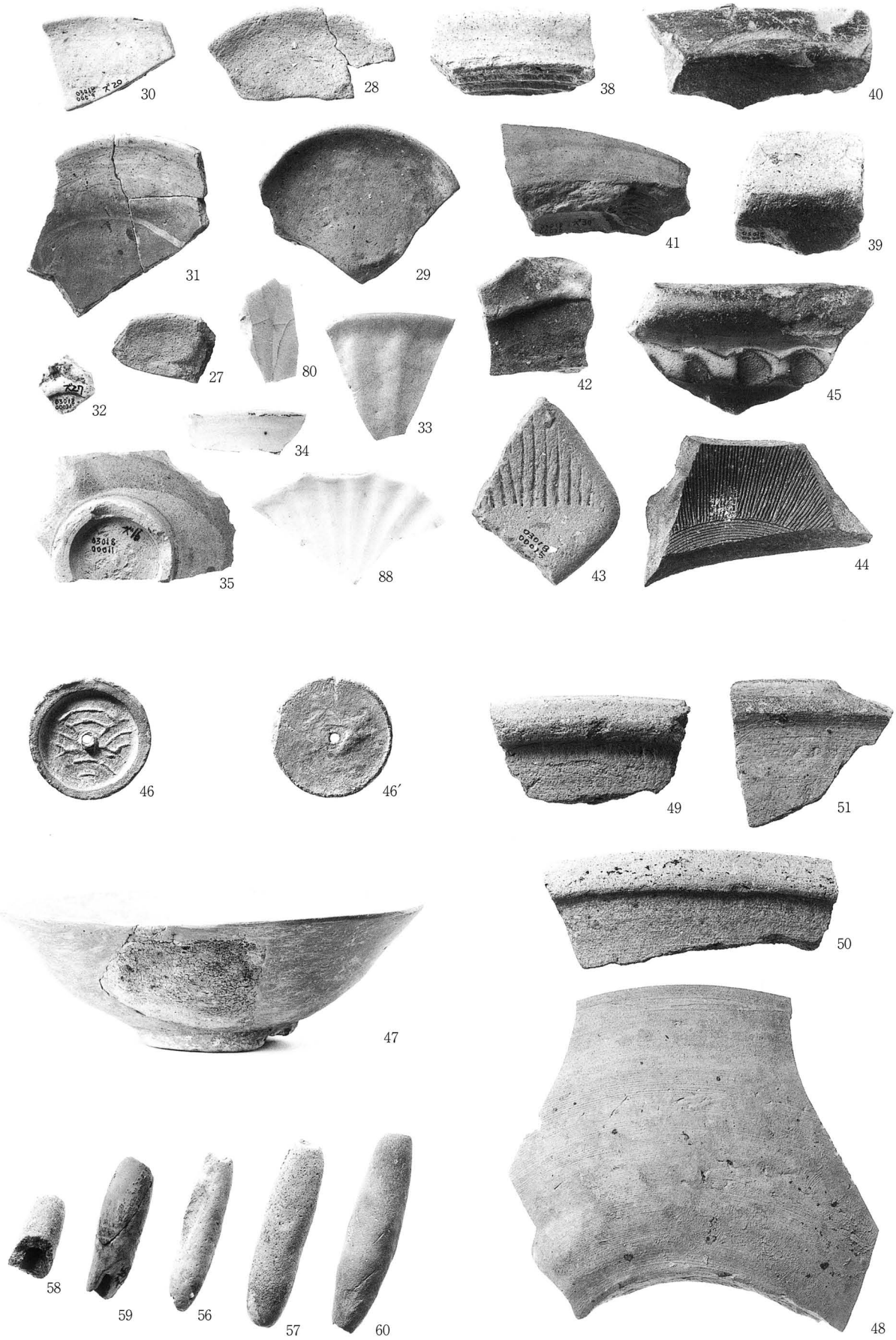








出土遺物(2)


30
28
38
40
31
29
41
39
27
80
42
45
32
33
34
35
88
43
44
46
46′
49
51
50
47
58
59
56
57
60
48

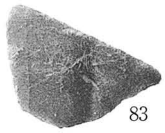
出土遺物(3)

87

86

52

53


83

82

81

54

55

63

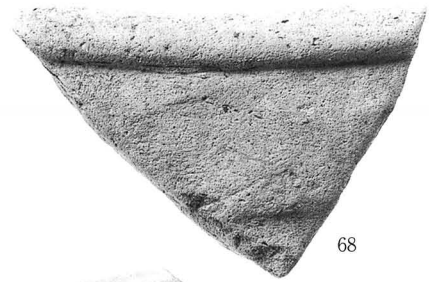
64

65

61

66

69

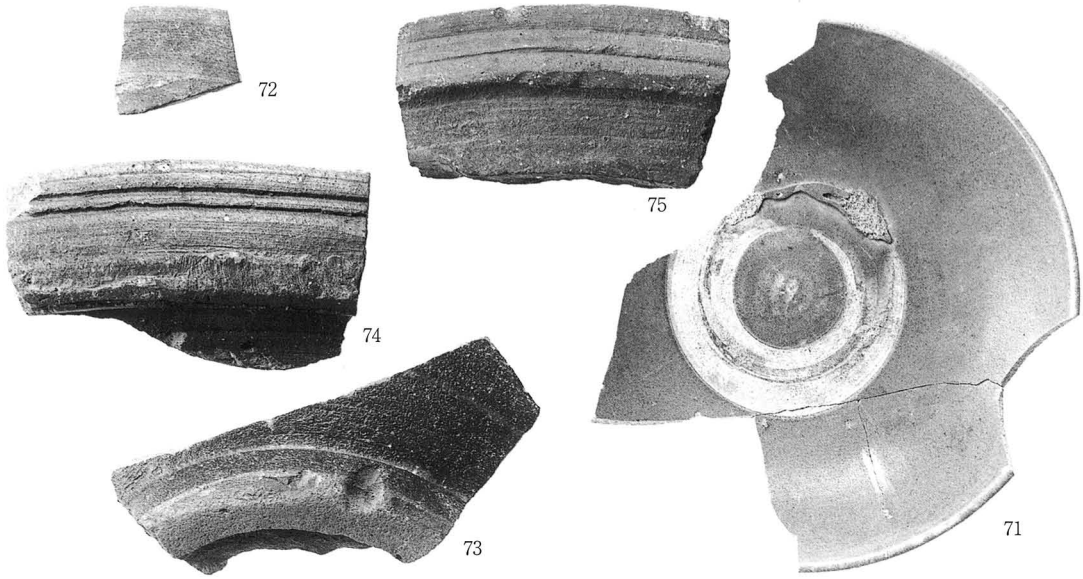

68

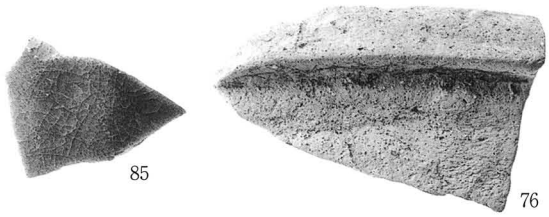
62

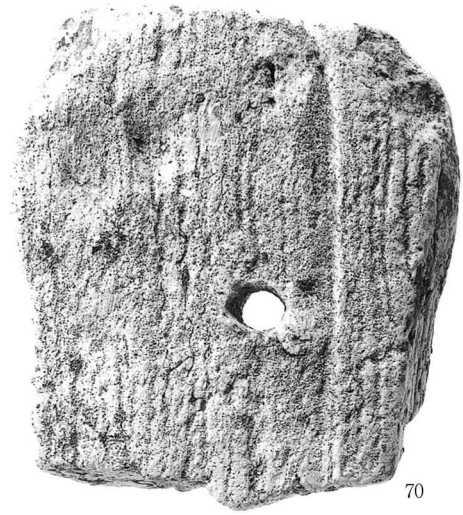
84

67

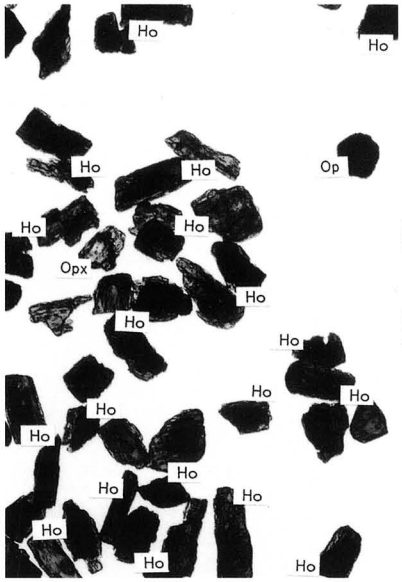
出土遺物(4)



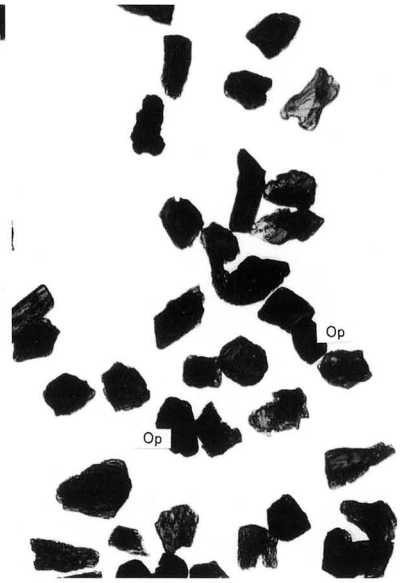




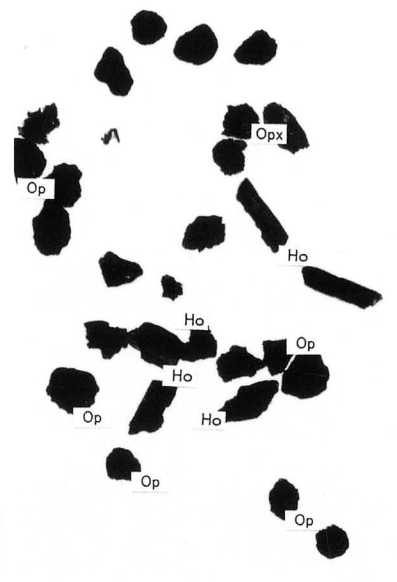
図版1　重鉱物・火山ガラス・珪藻化石



重鉱物(3区イコウ 315;S-7)



重鉱物(標準層序;1)

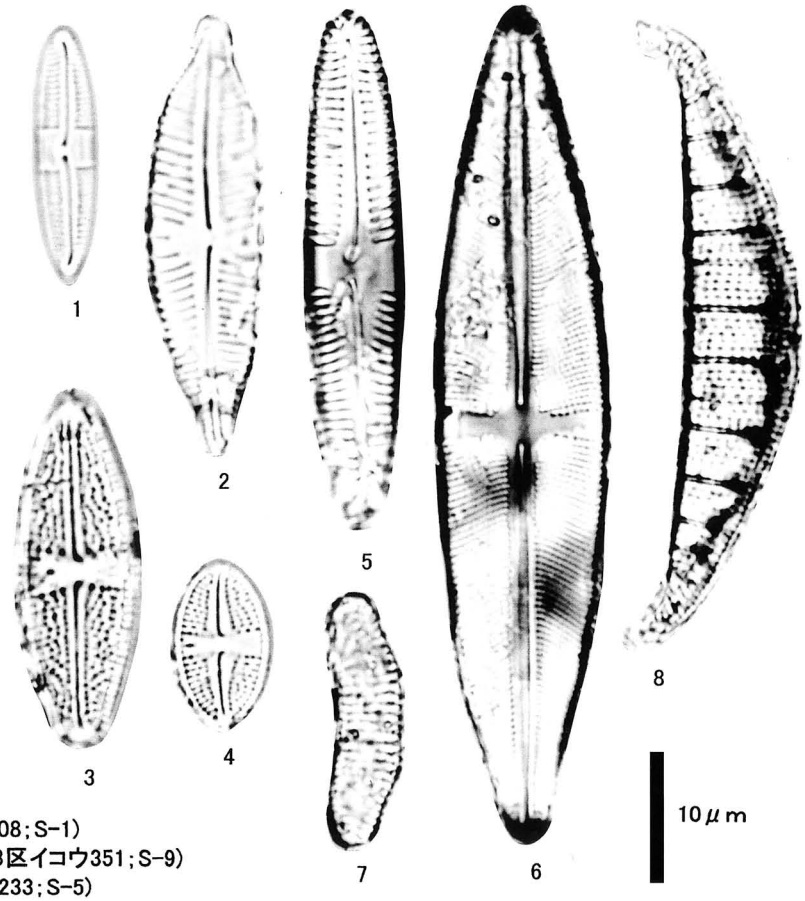


重鉱物(標準層序;2)

0.5mm

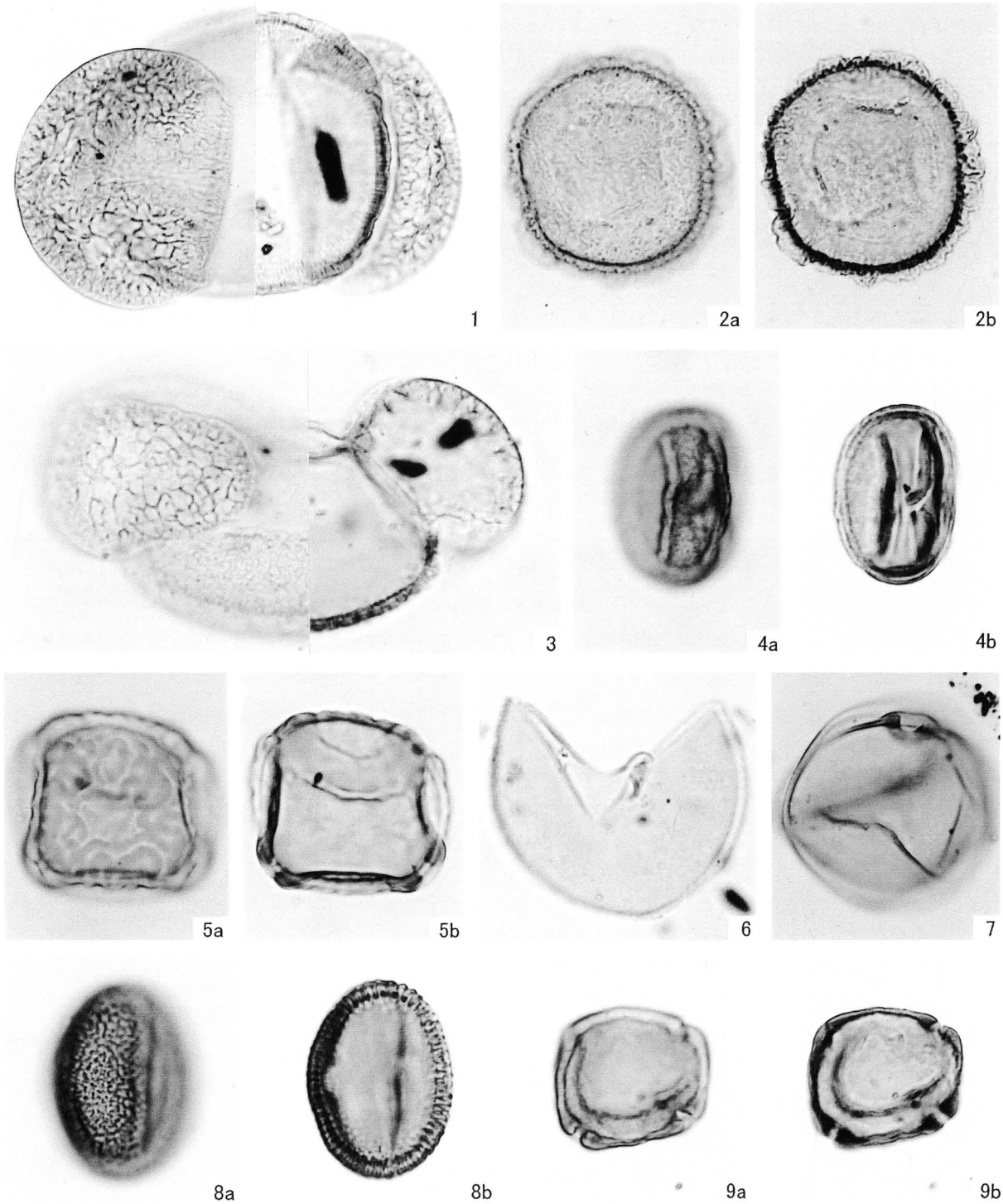
Opx: 斜方輝石. Ho: 角閃石. Op: 不透明鉱物. Vg: 火山ガラス.

火山ガラス(3区イコウ 315;S-7)



珪藻化石

1. *Caloneis aerophila* Bock(4区イコウ408;S-1)
2. *Cymbella naviculiformis* Auerswald(3区イコウ351;S-9)
3. *Navicula mutica* Kuetzing(3区イコウ233;S-5)
4. *Navicula saxophila* Bock(4区イコウ408;S-1)
5. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer(4区イコウ408;S-1)
6. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.)Ehrenberg(3区イコウ351;S-9)
7. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.)Rabenhorst(3区イコウ303;S-8)
8. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller(標準層序;2)



1．モミ属(3区イコウ233；S-5)
2．ツガ属(3区イコウ233；S-5)
3．マツ属複維管束亜属(3区イコウ233；S-5)
4．コナラ属アカガシ亜属(3区イコウ233；S-5)
5．ニレ属－ケヤキ属(3区イコウ233；S-5)
6．スギ属(3区イコウ233；S-5)
7．イネ科(標準層序；1)
8．ソバ属(標準層序；1)
9．アリノトウグサ属(3区イコウ233；S-5)

大阪府埋蔵文化財調査報告2004－3
安　松　田　遺　跡

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571　大阪市中央区大手前2丁目
TEL　06-6941-0351
発行日　2005年3月31日
印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL　06-6976-8761